シスコン弟とAqoursの日常

ふらんどる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

松浦果南の弟、松浦玲士は果南お姉ちゃんが大好きな重度のシスコン。

そんな彼とＡｑｏｕｒｓメンバーの日常。

目次

松浦家の朝 ―― 1
松浦玲士とＡｑｏｕｒｓ ―― 4
かな姉と雨の日 ―― 8
果南ちゃんの一日妹!? ―― 10
桜内梨子のお悩み ―― 17
曜ちゃんファッションショー ―― 22
決闘!!ヨハネＶＳ玲士!! ―― 30
妹と弟の姉談義 ―― 40
いっぱい食べる君が好き ―― 46
マリーのＣｏｏｋｉｎｇ Ｔｉｍｅ ―― 51
開校！スパルタ式黒澤塾！ ―― 56
お姉ちゃんとお出かけ！ ―― 65
松浦姉弟と風邪 ―― 75
かな姉の怖いもの ―― 84
玲士くんが寝そべりにはまって果南ちゃんが嫉妬する話 ―― 95
姉たちの休暇計画 【松浦玲士の休日 Ｐｒｏｌｏｇｕｅ】 ―― 98
鞠莉お姉ちゃんの想い 【松浦玲士の休日 Ｄａｙ１】 ―― 103
ダイヤお姉ちゃんのお願い【松浦玲士の休日 Ｄａｙ２】 ―― 118
果南お姉ちゃんとの休日【松浦玲士の休日 Ｄａｙ３】 ―― 128
船上のシンデレラ ―― 140
玲士の日常と果南の想い 【２年生編ｐｒｏｌｏｇｕｅ】 ―― 153
十千万旅館いおいでませ ―― 159
甘え上手な渡辺さん ―― 166
桜内梨子と湯けむり温泉旅行 ―― 173

二人の弟と姉への想い【コラボ作品】――――――――184
玲士の悩みとＡｑｏｕｒｓの心配【果南ちゃんお誕生日記念回】
195
誕生日の朝　【果南ちゃんお誕生日記念】――――――206
仮装をするのは大変だ――――――――――――214
善子ちゃんって不思議だな――――――――――――218
幻日のレーシ【シスコン弟　ｉｎ　ｔｈｅ　ｍｉｒｒｏｒ】―
226

松浦家の朝

「姉」それは同じ父と母から生まれた年上の女性である。

また、姉に過度に愛着を持つことを世間一般では「シスコン」と言う。

これは松浦果南のシスコン弟、松浦玲士（れいし）の日常を描いた物語である。

「起きろー！　朝だぞー！」

我が愛しの姉、松浦果南の声から松浦玲士の一日は始まる。

しかし、いくら愛しのかな姉（ねえ）が起こしに来たからといっても、布団という至上の空間から脱け出すのは容易ではない。

「あと３０分……」

そう言ってさらに布団に潜る。

「もう！　起きないんだったら明日から玲士の分の朝ごはん作ってあげないよ！」

「はい起きました！　それだけはやめてください」

かな姉の朝ごはんは一日のエネルギーの源。食べられなかったら松浦玲士は死んでしまいます。

「早く着替えてご飯食べて！　遅刻するよ」

日課のランニングを終えたかな姉はもうすでに浦女の制服に着替えていた。急いで制服に着替えて台所に向かう。

台所には父さんは既に朝食を食べ終えていたのでかな姉と二人きりだった。

ちなみに母さんはどうしたかというと、沖縄の石垣島で別のダイビングショップを経営してるのでたまにしかこっちに帰ってこない。

そういうわけで我が松浦家の男たちの胃袋はかな姉にがっちりと握られてるというわけだ。
「はい、あんまり時間無からちょっと急いでね」
テーブルの上に並べられたかな姉特製の朝食をいただく。
毎度のことながら食べながら思う、かな姉の作る料理はいったいどうしてこんなにも美味しいのであろうか？　この味噌汁一つ例にとってみても多すぎず少なすぎない適度な味噌の量、ちょうどよい温度の汁、全て均一な形に切り揃えられた豆腐、それに……
「玲士！　ボーッとしてないで早く食べて！」
はいごめんなさいすぐ食べます。

朝食を食べ終えたら急いで歯を磨き、支度をして船着き場の行き船に乗る。
「玲士も高2なんだからいい加減自分で起きれるようになってよね」
「申し訳ないデース」
正直なことを言うと僕は一人で起きれないことはない。しかし、一日があのけたたましいアラームなんかで始まるのは御免だ。私はかな姉に起こされたいのだ。
どうしてかな姉の声で起こされることが目覚まし時計のアラームで起こされることに劣っているはずがあろうか、いやそんなことはあるはずがない（反語法）
「また一人でニヤニヤして……そろそろ着くから降りる準備して」

「果南ちゃん、玲士くんおはヨーソロ!!」
「おはよう果南ちゃん、玲士君」
「二人ともおはよう」

先にバス停に着いていた幼馴染の一人である渡辺曜と、この春やって来た東京から桜内梨子と挨拶を交わす。
「曜、梨子おはよう。千歌はまだ来てないの？」
「あっ！　曜ちゃーん！　梨子ちゃーん！」
するともう一人の幼馴染、高海千歌が彼女の実家である旅館十千万から出てきて、こちらに向かってくる。
「果南ちゃんに玲士君もおはよう！」
そう言い終わると同時にふぁぁと大きくあくびをする。
「おはよう千歌。あくびをしてるってことは昨日夜更かししたね」
「あはは……昨日μ’ｓのＤＶＤを見てたらついつい遅くまで……」
「さすが果南ちゃん！　千歌ちゃんのことなら何でもお見通しだね！」
「夜更かしすると練習に響くよ」
「玲士も人のこと言えないでしょ、昨日も遅くまで起きてたみたいだし。それに、もうすぐバスが来るよ」

嗚呼、かな姉とのしばしの別れだ。
できれば一緒の学校に行きたい。ずっと一緒に居たい。しかし、それは不可能だ。浦の星女学院は名前の通り女子高だ。
「それじゃ、また後で。かな姉いってきます」
「いってらっしゃい。頑張ってね」
そう挨拶を交わして、到着した沼津行きのバスに乗り込む。
窓際の席に座り、車窓から見えるかな姉に小さく手を振る。それに気づいたかな姉も小さく手を振る。
『発車します、ご注意ください』
かな姉と再び会えるまであと何時間だろう、そんなことを考えながらバスに揺られ学校へ向かうのであった。

松浦玲士とＡｑｏｕｒｓ

『次は浦の星女学院前～、浦の星女学院前～』

僕が通う高校からバスに揺られること３０分弱、

車窓にかな姉たちが通う浦の星女学院が見える。

実は松浦玲士は学校が終わってからこの浦の星女学院でＡｑｏｕｒｓのマネージャー、つまりお手伝いさんみたいなことをしています。

きっかけはＡｑｏｕｒｓの発起人で、幼馴染の千歌からどうしてもと頼まれたからだけど、今でも何で僕なんだろう？　と考える。

まあ、引き受けたからには彼女達を全力でサポートしていきたいと思っている。

バスを降り、そこから続く長い坂を上った先にある浦の星女学院の校門前に着く。

守衛さんに特別来校者証を見せ、門の中に入る。

「やっぱりいつ来ても緊張するな」

そう独り言を呟く。

かな姉が通っているとはいえ女子高に男一人で入るのは緊張する。最初の頃は他の生徒から変な目で見られていたが、今ではそんなことも無くなったし、守衛さんも僕が坂を上ってくるのが見えると事前に門を開けておいてくれるまでになった。

「あっ！　玲士くんだ！　おーい！」

声がするので見上げると屋上から練習着の千歌がこちらに手を振っている。

校舎の時計に目を向けると時刻は午後４時２６分。Ａｑｏｕｒｓの練習は４時半からなので、急がなければと思いながら手を振りかえし、校舎に入って屋上へ向かう。

「今日の練習はここまで、みんなお疲れ様」
練習の終わりを告げるかな姉の言葉と同時にみんなが僕の所に来る。
僕は事前に作っておいたスポーツドリンクが入った水筒をみんなに渡す。
「ぷはぁ、生き返るずら～」
「花丸ちゃん凄い勢いで飲むね」
Ａｑｏｕｒｓの練習が円滑に進むように飲み物やタオルを用意したり、後片付けをしたりするのが僕の主な仕事だ。
「ねえねえ玲士くん、さっきの私の動き、見ていてどうだった？」
「うん、千歌の動きは全体的に見て良かったよ。あとはもうちょっと大きく動くともっと見栄えが良くなるかな」
こうしてみんなの動きを見てあげるのも僕の大事な仕事だ。
「善子ちゃんはサビの時もう少し右に動いて」
「承知！　ってだからヨハネよ！」
「やっぱり玲士がいてくれると安心シマース！」
そう言って鞠莉姉は僕の頭を撫でる。
ちなみに僕に特別来校者証を発行してくれたのも、この学校の理事長でもある彼女のおかげだ。
「玲士君は私達の動きを細かく見てくれるからとっても頼りになるよ」
「いやいや梨子ちゃん、みんながやってることの方が何倍も凄いよ。それに比べたら僕のやってることなんか??」
「玲士さん、そんなに謙遜しないで下さい。こうして私たちが練習に集中できるのも貴方のサポートのおかげですわ」
鞠莉姉とダイヤさんは昔からよく一緒に遊んだ仲で、僕とは姉弟のような関係だ。まあ、かな姉が一番であることに変わりはないが。
「こんな立派な弟をもって、果南はしあわせ者デース！　あっ玲士、いっそのことマリーの弟にならない？　そしたら毎日一流シェフの料理が食べられるわよ」
「いや、僕は一流シェフの料理より、かな姉の手料理の方が良いかな。

それに僕はかな姉と一緒にいたいから」
確かに鞠莉姉の住むホテルオハラは魅力的だ。子供の頃かな姉と一緒に行った時なんかは「ここに住む！」なんてことも言ってたっけ。でも僕にとってかな姉の存在は何物にも変えられない大切なものだ。
「ほら、二人とも早くしないとバスの時間に間に合わないよ」
「はーい」
かな姉に言われ、僕は後片付けを始める。

「玲士、今日もお疲れ様」
後片付けを終え、校舎から出ると玄関前でかな姉が待っていてくれた。
バス停まで、お互いに今日あったことなどを話ながら歩く。
「それと、さっきはありがとね」
突然言われた感謝の言葉に少し戸惑う。
「ほら、さっき鞠莉と話してた時、一流シェフより私の料理の方が良いって言ってくれたこと」
かな姉に言われ、先ほどの会話を思い出す。
「玲士が私の料理好きなのはいつも見ていればわかるけど、改めて口に出して言われると嬉しいなぁ、って思って」
「別に、かな姉の料理が美味しいのは事実だし」
「それでも嬉しいよ、ハグッ！」
かな姉はそう言って僕に抱きつく。
「ちょっ、かな姉！」
いきなりなので心の準備ができておらずちょっと驚いたが、かな姉にハグされている時ほど幸せな時間はない。
かな姉の温もりを肌で感じられ、この人の弟で本当に良かったと心から思うことができる。
「びっくりした？　最近して無いな、って思って。嫌だった？」
「嫌なんかじゃない！　むしろずっとされてたい」

「ふふ、ありがと。そういえば、今日の夕飯何が食べたい？」
「かな姉の作るものなら何でも良いよ」
そんな会話をしながらバス停までの長い坂道を下ってゆく。

かな姉と雨の日

「かな姉ただいま」
　休日、沼津での買い物を終えて淡島にあるダイビングショップ兼自宅に帰る。
「おかえり、降ってくる前に帰って来てくれて良かった」
　空は一面黒雲で覆われ、今にも雨が降りそうな天気だ。
「私は夕飯作るから、玲士は店の前にある物を中に入れといて。もうすぐ降るだろうからなるべく急いでね」
「りょーかい」
　かな姉に言われ、店の前に出してある酸素ボンベ等のダイビング用品を中にしまう。
　片付けを終えてた数分後にはかな姉の言ったとおり外から雨音がし始めた。
　僕は今日沼津で買ってきた本を読みながら、しばらくの間自室でくつろぐ。
「玲士ー、ご飯だよー」
　かな姉に呼ばれたので本を閉じ、台所へ向かう。
　父さんは沖縄の店の手伝いに行ったため不在なので、かな姉と二人きりの夕食をとる。
「今日は父さんから連絡あった？」
「当分帰ってこれなさそうだって。向こうが結構忙しいみたい」
　雨足は以前より強まり、風の音も聞こえるようになった。
「だんだんひどくなるね」
「予報によれば雷にも注意だって」
　僕が雷という単語を発すると同時に、かな姉がビクッとする。
「へ、へぇー、ソウナンダー」
　明らかに動揺するかな姉。そうです、かな姉は雷とか暗い所が苦手なのです。
　時々見せる意外な一面もかな姉の魅力の一つだ。

夕食を食べ終えて部屋に戻り、先ほどの本の続きを読む。
すると突然、激しい雷鳴と同時に部屋の明かりが消える。
「停電？」
スマホの明かりを頼りにしながら、様子を見にリビングへ向かう。
「かな姉、大丈夫ー？」
「ハグゥ！」
かな姉が柱に抱きついてました。

「かな姉・・、大丈夫？」
「べ、べ、別に何ともないし・・・」
するとまたも雷鳴が響く。
「ハグゥ！」
今度は僕に抱きついてました。
「全然何ともなくないじゃないですか」
「お、お願いだから玲士、このまま、このままここにいて！」
停電は解消されるまでの数分間、風雨の音しかしない暗闇でかな姉に抱きつかれたまま過ごす。
「やっぱり玲士にハグしてると安心するなぁ」
「まったく・・・、先にお風呂入るよ」

湯船に浸かりながら今日一日の事をふり返る。
そういえば、さっき暗闇でかな姉に抱きつかれてる時、いつもと違う表現し難い変な気持ちになったが、あれは一体何なのだろうか？
まあ、そんなことは今考えることでもないか。
よく分からない事は深く考えない、そんな思考はかな姉譲りだ。それよりは明日の事を考えよう。
そう思い、湯船の中で大きく息を吐いた。

果南ちゃんの一日妹!?

「果南ちゃん！千歌を妹にしてください！」
　場所は浦の星女学院スクールアイドル部部室、ミーティングが終わった途端突然千歌がそう言いってかな姉の前で頭を下げる。
「な、何を言い出すんだ藪から棒に」
「いきなりどうしたの、千歌は私にとって妹みたいなものだよ」
「そういうのじゃなくって、千歌は本当の妹になりたいの！」
　千歌からの無茶とも言える頼み事は今まで何度もあったが、今回ばかりはまるで言ってる意味が分からない。
　ほかのみんなもキョトンとしている。
「あら～ちかっち、そんなに果南の妹になりたいのならマリーがとってもｅａｓｙな方法を教えてあげるわ」
　いつものごとく陽気な調子で鞠莉姉が言う。
「なになに、教えて鞠莉ちゃん！」
　簡単にかな姉の妹になる方法？はて一体なんだろう？
「玲士と結婚しちゃえばいいのよ。そうすればちかっちは名実ともにも果南の妹になれるわよ。義理だけどね」
「ちょっ、鞠莉姉！」
　鞠莉姉の口から結婚という単語が出た瞬間、場の空気が一変する。

「ピギィ！れ、玲士さんと千歌ちゃんが、け、結婚!?」
「ふぇっ!?け、結婚!?」
「ブッブー！ですわ！在学中に結婚などもっての他！生徒会長であるこの私(わたくし)が絶対に！許しませんわ！」
　ダイヤさんが騒然とした場を収めに入る。
「落ち着いてくださいダイヤさん。そもそも僕まだ結婚できる年齢じゃないです。鞠莉姉も変なこと言わないでください」
「Ｉｔ，ｓ　ｊｏｋｅ！ダイヤったら本気にしちゃって～」

「別に私はそれでも良かったんだけど・・・」
鞠莉姉のジョークはたまにジョークに聞こえないから怖い。千歌を見ると、驚いた後は何故か俯いて何か言っていたようだがうまく聞き取れない。顔が少し赤く見えるのは気のせいだろうか。
「さては千歌、美渡さんと喧嘩したんでしょ」
かな姉の指摘に千歌は小さく頷く。
「そんな事だろうと思った」
「みんな聞いてよ、美渡姉が行った悪逆非道の数々を!」
先ほどの様子とは打って変わって、いつも通りののよく響く元気な声で身ぶり手振りを交えて大袈裟に話す。
「大方後で食べるために取っておいた何かを食べられた、ってとこだろ」
「うぐぅ、なぜそれを・・・」
反応を見る限り、どうも図星らしい。
「リトルデーモン、もしかしてあなた脳内の思考を直接!?」
善子ちゃんが異様に反応する。
「いや、千歌が言いそうなことは大体分かるよ」
「昔から千歌ちゃんと美渡さんはよく食べ物で争ってたからね・・・」
千歌と曜は小学校に入る前からの付き合いだ。
お互いの考えそうなことは大体わかる。
「そんなのまた買えばいいだろ」
「そんなのじゃないもん!だって、松月の数量限定みかんどら焼き(みかん四割増し)だよ!!
数量限定だよ!げ・ん・て・い!!」
たしかに限定商品の話を聞いて買って食べてみたが、評判通り大変美味しかった。それを勝手に食べられたとなると、みかん大好きな千歌からすればたまったもんじゃないだろう。
「確かに食べ物の恨みは怖いずら」
「わかったから一端落ち着け」
かなりの勢いで詰め寄る千歌をなだめて席に座らせる。
「と・に・か・く!千歌は果南ちゃんみたいなやさしいお姉ちゃんの妹

になりたいの！」
「何を言うんだ、かな姉は、ぼ・く・の姉だぞ！」
　たとえ幼馴染の頼みであっても、それだけは譲れない。
「むぅ～そんなぁ～、お願い！せめて一日だけでも・・・」
「千歌ちゃん、そんなわがまま言ったらだめよ」
　いつものごとく梨子ちゃんがそう言って千歌をたしなめる。
　それにしても梨子ちゃんって千歌のママみたいだと思うのは僕だけだろうか。
「それで千歌の気が収まるなら私は良いよ。玲士も良いでしょ、一日ぐらい」
「かな姉が言うのなら・・・」
　僕はしぶしぶ納得する。
「なんなら家に泊まっていく？」
「やったぁ！ありがとう果南ちゃん!!」
　こうして松浦家に一日妹が誕生したのであった。

　一日妹ということなので今日は千歌が家に泊まることになった。
「ところで、千歌は今日どこで寝るんだ？家に空いてる部屋なんて無いぞ」
　淡島へ向かう船の中、ふと疑問に思ったことを尋ねる。
「うーん、私か玲士の部屋の床に布団敷いて寝てもらうしかないね。千歌はどっちが良い？」
　もちろん果南ちゃん！と即答するかと思いきや、意外にも考え込む千歌。
「かな姉の部屋で良いだろ。てか、僕の部屋なんて嫌だろ」
「全然嫌なんかじゃないもん！」
　千歌が大声で反応したので少し驚く。
「どうしたの千歌、そんなに大声出して」
「えっ！べ、別に何でもないよ。そうだ！いっそのこと昔泊まった時

みたいに3人で寝ない？私と玲士くんの二人が果南ちゃんの部屋で寝るってのはどうかな？」
　何でもないと言いながら明らかに慌てている。最近少し千歌の様子が変だが何あったのだろうか？
「たまにはそんなのも良いかもね。玲士も良いでしょ？」
「まあ、たまには・・・」
「ありがとう、果南お姉ちゃん！」
　千歌は思いきりかな姉に抱きつく。
「あはは、千歌は甘えん坊だなぁ」
　かな姉はよしよし、と千歌の頭を撫でる。
　おのれ千歌、自分からかな姉に抱きつくとはなかなかやるな・・・
　どうして女というのはこうも簡単に人前でベタベタくっつけるんだ。僕だって本当は抱きつきたいんだぞ。

　淡島に着いた船から下り、ダイビングショップ兼自宅に入る。
「よーし、後で玲士くんの部屋覗いちゃおう！」
「人の部屋を勝手に覗くような方はお引き取り願います」
　なんてこと言うんだこいつ。プライバシーの侵害だぞ。
「ほらほら、二人とも。玲士は二人分の布団敷いといて、千歌は私と夕飯の準備するよ」
「「はーい！」」

　家の事が一段落して僕は店の外に出る。そしてそこにある椅子に腰掛け、特に何をするわけでもなく夕日に照らされる内浦の海を見つめる。昔からこうしているとどういうわけか不思議と心が落ち着く。
「またここにいた。玲士、ご飯できたよ」
　しばらくするとかな姉が呼びに来たので台所に行くと千歌はもう席についていた。

「いっただっきまーす！」
いつもは静かな松浦家の食卓も今日は千歌がいるので賑やかだ。
千歌が居るせいなのか、いつもよりも豪華な気がする。
まず最初に味噌汁を飲むが、瞬時に味の違いに気づく。
「この味噌汁を作ったのは千歌だね」
「当ったりぃ～！どうして分かったの？」
「分かるよ。だってかな姉のに比べたら味が全然違う」
「えーっ！果南ちゃんに言われた通りにしたつもりなんだけどなぁ。果南ちゃん！今度料理教えて！」
「いいよ、また今度ね」

食事を終え食器を片付けた後、かな姉が冷蔵庫から何かを取り出した。
「あーっ！美渡姉に食べられた松月の数量限定みかんどら焼き（みかん四割増し）!!何で!?どうして!?」
「たまたま家にあったから、千歌にあげるよ」
「ありがとう果南ちゃん！」
「家に帰ったらちゃんと美渡さんと仲直りするんだよ」
「はーい！」
「あれ？かな姉それって??」
僕が途中まで言いかけるとかな姉は口の前で人差し指を立てる。
「千歌が喜んでくれればそれで良いの」
「なるほど」
改めてかな姉の優しさを実感する。千歌が妹になりたいと言うのも納得だ。
まあ、かな姉はぼくの姉だけどね。

最後に風呂から上がり、かな姉の部屋に入る。
「ねぇねぇ、トランプしない？」
そう言って待ち構えていた千歌は鞄からトランプを取り出す。

「良いよ、じゃあババ抜きしようか」
「よーし、玲士くんには負けないぞ！」
「こっちだって負けるもんか」

こうして始まったババ抜き対決は、かな姉が一番始めにあっさり抜けて千歌との一対一の対決になった。
「・・・こっちだ！」
僕が最後に引いたカードは見事に手札とそろい、千歌の負けとなった。
「むう～、もう一回！もう一回だよ！」
「何度やっても結果は同じさ。だって僕がババを引こうとすると必ずにやけるからすぐわかるね」
「えーっ！そうなの果南ちゃん!?」
「あはは、確かにね。それにしても二人とも昔から変わって無いなぁ」
そう言われて子供の事を思い出す。
かな姉と僕と千歌と曜、昔はよく四人で遊んだ。
そしてゲームの勝ち負け等つまらない事で千歌と喧嘩して、そして二人とも泣いて、最終的にかな姉が仲裁して仲直りしてたっけ。
「それに二人とも、明日も朝練で早いからもう寝たほうが良いよ」
「はーい」

「ねえねえ玲士くん、まだ起きてる？」
明かりを消して数分後、布団の中でまどろんでいると千歌が小さい声で話しかけるのが聞こえる。
もうすでにかな姉はベットの上で寝息を立てている。
「なんとか・・・」
半醒半睡の状態で受け答えする。

「今日はありがとう、千歌のわがままに付き合ってくれて」
「千歌のわがままに振り回されるのはもう慣れてるよ」
「玲士くん、そっちに行っ・・・」
千歌が何か言い終わらない内に、僕の意識は途切れた。

Ｃｈｉｋａ，ｓ　ｍｏｎｏｌｏｇ

果南ちゃんも玲士くんも寝てしまい、この部屋で起きているのは私だけ。
でも、寝れるわけない。
大好きな人が隣にいるんだもん。
小さいときから一緒にいる、ずっと、ずーーっと大好きな人。
私がスクールアイドルを始めるときも、「大丈夫だ、千歌ならできる」って応援してくれた。
Ａｑｏｕｒｓのマネージャーを頼んだときも笑顔で引き受けてくれた。
今まで何度もいろんなアピールをしてきた。
でも、玲士くんは気づいてくれない。
千歌なんかより曜ちゃんとか梨子ちゃんみたいなかわいいタイプの女の子が好きなのかな、それとも鞠莉ちゃんやダイヤさんみたいな大人っぽい人？やっぱり千歌みたいな普通怪獣は振り向いてもらえないのかな・・・・

桜内梨子のお悩み

「ねえ玲士君、明日って空いてるかな？」
Ａｑｏｕｒｓの練習が終わり片付けをしていると、梨子ちゃんが声をかけてきた。
「明日はお店にも予約は入ってないし大丈夫だけど、どうかしたの？」
「うん、ちょっと相談したいことがあって・・・、明日家に来てもらえるかな？」
マネージャーとしてＡｑｏｕｒｓメンバーの相談にのることも大切な仕事だ。
「了解。お役にたてるかどうかは分からないけどね」

「お邪魔します」
翌日、梨子ちゃんの招きに応じて桜内家を訪ねる。
中に通され梨子ちゃんの部屋に入ると、かな姉や千歌の部屋とは違うとても上品で良い香りがする。
「玲士、チャオ～」
部屋には僕より先に鞠莉姉が来ていた。
「二人ともごめんなさい、せっかくのお休みなのに・・」
「Ａｑｏｕｒｓのためなら平日も休日も関係無いよ。それよりも相談の内容は？」
「うん、実は・・・」
梨子ちゃんが見せてきたのは、何も書かれて楽譜だった。
「いざ曲を作ろうとすると全然イメージが湧いてこなくて・・・」
そう言って表情を曇らせ俯く梨子ちゃん。
元々梨子ちゃんは、あのμ’ｓで有名な東京の音乃木坂学院の生徒だ。
生まれも育ちも東京の彼女がこの内浦に引っ越してきた理由は、あ

るピアノの発表会で全く弾けなかった事があったので環境を変えたかったからだと以前彼女から聞いた。
　その彼女がまたピアノの事で悩んでるなら助けてあげたい、そんな感情が自然と湧いてくる。
「それに来週の月曜日までには仕上げるって約束しちゃったし・・・」
「なるほどねぇ。でも、僕なんかで本当によかったの？鞠莉姉は作曲の知識があるけど・・・」
「ノンノン玲士、作曲に関する知識が無いからこそ、固まった考えに囚われないｆｒｅｅな発想ができるのよ」
「自由な発想ねぇ・・・、とりあえず歌詞を見せてくれない？」
　梨子ちゃんから渡された紙に書かれた歌詞を見る。テーマは『大切な人への想い』だった。
「大切な人への想いか・・・。ねえ梨子ちゃん、梨子ちゃんの大切な人ってどんな人？」
「へっ!?たっ、大切な人!?」
　びっくりした様子の梨子ちゃん。僕そんなに変なこと聞いたかな？
「マリーにとってＡｑｏｕｒｓのみんなは家族みたいなものよ！そ・れ・と、玲士はマリーの弟みたいなものデース！」
「ちょっ、鞠莉姉！いきなり抱きつかないでください！」
　隣に座っている鞠莉姉に思いきり抱きつかれる。なんか最近はかな姉よりも抱きつかれる回数が多い気がする。
「昔は自分からしていたくせに～」
「そうなの鞠莉ちゃん？」
「イエーッス!!鞠莉お姉ちゃ～ん、ってよく抱きつかれたものよ」
「ううっ・・・」
　梨子ちゃんの前で少し恥ずかしい昔のエピソードを暴露される。
　確かに昔はよくやってたよ。でもそれはかな姉の真似をしたかであって決して鞠莉姉からシャンプーの良い匂いがしたからとかそんな理由じゃないからね。
「私も鞠莉ちゃんと同じでＡｑｏｕｒｓのみんな、それと転校してき

た私を受け入れてくれた浦女のみんなや町の人達、それと・・・」
「それと？」
どういうわけか梨子ちゃんは急に言葉に詰まる。
「れ、玲士君・・・」
「・・・へ？僕が？」
唐突に僕の名前が出たので思わずキョトンとしてしまう。
「Ｏｈ！これはまたずいぶんと突然の愛の告白ね！」
「へっ!?こ、こ、こ、告白だなんて!!そんなんじゃなくて!!い、いつも玲士君はＡｑｏｕｒｓを助けてくれるから大切な人って意味であって！玲士君！本当に違うの!!」
鞠莉姉の言葉に顔を真っ赤にしてあたふたとする梨子ちゃん。
千歌の時もそうだが鞠莉姉は何でこう変なことを言うのだろう。
「わかってるから梨子ちゃん、一端落ち着こう。ほら、お茶飲んで」
なんとかして梨子ちゃんを落ち着かせる。
「で、その大切な人への想い、例えば感謝の気持ちとかを思い浮かべながら曲を作ってみるってのはどうかな？抽象的すぎるか」
「Ｇｏｏｄｉｄｅａ！梨子、早速やってみましょう！」
「ありがとう玲士くん。やってみるね」
そう言って梨子ちゃんと鞠莉姉はピアノに向かった。

三人で試行錯誤すること数時間、ついに曲が完成した。
「こんな感じでどうかな??」
梨子ちゃんは完成した曲を弾き終わる。
完成した曲は、大切な人への想いというテーマにすごく合った、綺

麗でやさしい感じのメロディーだった。
「ｐｅｒｆｅｃｔ!!素晴らしい曲だわ！」
「うん、凄く良いよ！」
「良かった。鞠莉ちゃん、玲士君、本当にありがとう」
そう言って深々と頭を下げる梨子ちゃん。
「梨子は一人で抱え込みすぎなのよ」
「どんなことも一人でするのは立派だけど、たまには人を頼っても良いんじゃないかなって思う」
「ありがとう。この埋め合わせは必ずさせて！
今日一日付き合ってもらったから・・・」
「いえ、マリーは遠慮しておくわ。だってｄａｔｅは二人きりのほうが良いでしょ？」
「「鞠莉ちゃん！」姉！」

梨子ちゃんの家を後にして連絡船乗り場で帰りの船を待つ。
「それにしても鞠莉姉、みんなの前で変なことを言わないでください。みんな困るし、こっちも恥ずかしいです」
「だ～って～あたふたする玲士がｖｅｒｙ　ｃｕｔｅなんだも～ん」
「まったく・・・」
「ふふっ、玲士もずいぶんと鈍感なのね」
「鞠莉姉今なんか言った？」
「いえ、なんでもないわ！」

Ｒｉｋｏ，ｓ　ｍｏｎｏｌｏｇ

玲士君に大切な人はと聞かれた時、びっくりしてすぐには答えられませんでした。

だって、私にとっての大切な人はあなたなんだもん。

Ａｑｏｕｒｓのマネージャーとして大切って事以上に私の想い人として大切なの・・・。

東京から引っ越してきて初めてあなたに出会ったあの日、あなたは見ず知らずの女の子である私が言った「海の音が聞きたい」なんて突拍子もないことに耳を傾けて、千歌ちゃん達と一緒にいろんな事で私を助けてくれました。

でも、あなたはきっと私なんかより千歌ちゃんや曜ちゃんみたいな明るくて活発な女の子が好きだよね・・・

新参者の私なんかに出る幕は無いのかな・・・

曜ちゃんファッションショー

「あの～曜ちゃん？僕何かした？」
　僕の目の前には頬を膨らませてご機嫌ななめな様子の曜がいる。
　どういうわけか今日は会った時から態度が素っ気無かったので、練習が終わってから聞いてみたのである。
「今　曜ちゃんは怒っているのであります」
「だから何で？どうして？」
「自分の胸に手を当てて考えてみるのであります」
　そう言って曜ちゃんはプイッと横を向く。
　しかし、いくら考えてもわからないものはわからない。
「玲士、もっとよく考えて。小さなことかもしれないよ」
　かな姉に言われて再度ここ最近の行動を思い返してみるが、やっぱり心当たりが無い。
「そんな事言われても・・・。本当に曜を怒らせるようなことした覚え無いんだけどなぁ・・・」
「どうしたの曜。このままだとわからないままだよ。私でいいから話してみて」
「この間、千歌ちゃんが玲士くんの家に泊まった時の事・・・」
「「千歌が泊まった時の事??」」
　千歌が泊まった時の事を一つ一つ思い出してみるが、皆目見当がつかない。
「私だけ仲間はずれにして、ずるいであります・・・」
「仲間はずれ??」
「曜も知ってるでしょ。千歌が妹になりたいって言い出して・・・」
「それに、三人で一緒に寝たなんて聞いてないのであります!!」
　原因はわかったが何で曜が怒るのかがわからない。
「それは千歌がそうしたいって言うから・・・」
「・・わかった。曜、明日一緒に遊ぼっか。玲士も明日空いてるでしょ？休みの日は部屋にいるか沼津の商店街をうろついてるだけなんだし」

「まあ、そうだけど・・・」
確かに明日特に予定はないけど、予定のないのが当たり前みたいな言い方されるといくらかな姉に言われたからといっても少し傷つく。
「えっ！本当！ありがとう果南ちゃん！」
今までとは一転して笑顔になる曜。怒ったと思えば笑顔になったり、全くもって女の子の心理は複雑怪奇だ。
かな姉にしても、一体何がわかったのか僕にはわからない。
こうして様々な謎を残しながらも明日の渡辺家行きが決まった。

翌日、約束通り渡辺家を訪れる。
「果南ちゃんに玲士くん、いらっしゃい！」
出てきた曜は、昨日とは違っていつも通りの元気な笑顔で迎えてくれた。学校にいる時とは違ってメガネをしている。
僕とかな姉は2階に有る曜の部屋まで通される。
「それで、今日は何をするんだ？」
「ふふ、よくぞ聞いてくれました！二人には曜ちゃん秘蔵のいろんな衣装を着てもらうよ！名付けて、曜ちゃんファッションショー!!」
「えっ、僕も!?」
「もっちろん！まずは私から！玲士くん、覗いちゃ駄目だよ」
「安心して、私がここで見張ってるから」
「人を覗き魔みたいに言わないでください」
「頼んだよ果南ちゃん！」
かな姉に念押しをして、曜は部屋から出ていった。まったく曜は僕をなんだと思ってるんだ。

数分後、部屋の外から声がする。

「まずは曜ちゃん一番の自信作、船乗り衣装!!」
扉を開けて出てきた船乗り姿の曜は、さすが船長の娘とだけあってとても様になっている。どことなく曜のお父さんの面影も感じる。
「すごく似合ってるな、曜」
「えへへ、まだまだこんなもんじゃないよ！」
その後はチャイナドレス、巫女衣装、バスガイドなど様々な衣装に着替える曜。
「曜ちゃん七変化終わり！次は果南ちゃん！」
「楽しみだなぁ、どんな服を着るか」
曜とかな姉は一緒に部屋から出ていった。

数分後、曜が部屋に戻ってくる。
「それでは果南ちゃん、どうぞ!!」
曜の部屋の扉が開く。

「悪い子は逮捕しちゃうぞ!!なんてね」
部屋に入ってきたのは女性警官の衣装を着たかな姉だった。
「・・・かな姉??」
何が起こってるのかわからない。目の前の現実に思考が追い付かない。
「すごいすごい！似合ってるよ果南ちゃん！」
「意外と様になってるでしょ？」
そう言ってかな姉はいろいろとポーズをとる。
こんなに茶目っ気のあるかな姉を見たのは久しぶりだ。
Ａｑｏｕｒｓのライブでいろんな衣装を着ているが、こんなかな姉は見たことない。
かわいい、かわいい、超かわいい。
「逮捕してくださいお願いします」
急いでスマホで写真を撮る。
「次はどれを着れば良いの？」

意外にもかな姉はノリノリだ。
「う～んと、じゃあ」
曜はかな姉に耳打ちをして、二人とも部屋から出る。

「二人とも、お注射はいかがかなん？」
入ってきたのはナース服に身を包んだかな姉だった。
「曜、ここは天国か？」
「いや私の部屋」
スマホのカメラで連写する。決めた、明日からスマホの待ち受けにしよう、そうしよう。
「まだまだ行くよー！」

その後も、探偵やスチュワーデス姿等々普段なら絶対見ることのできないかな姉の姿を目に焼き付け、ベストショットを狙って様々な角度からとにかく写真を撮りまくる。もう言葉にするのも難しい位のかわいさだ。
「果南ちゃん七変化終了！」
「ふぅ、珍しい衣装も着れて楽しかったよ」
元の服に着替えたかな姉が部屋に入ってきて、かな姉のフォトセッションタイムという夢のような時間が終わった。
「最後は玲士くんの番！」
そう言って笑顔でメイド服を持ってくる曜。
「いやいやいやちょっと待て、いくらなんでもその衣装だけは勘弁してくれ」
僕がメイド服を着たなんて話が広まろうものなら一貫の終わりだ。最近の女子高生の拡散力はものすごいからな・・・
「冗談冗談、ちゃんと男物も何個かあるから」
何で曜は男物なんか持ってるんだ。そんなに持ってるんだったらもういっそのことこの家を服屋に改装したらどうだと思う。

「玲士くんのメイド服姿、いけると思うんだけどなぁ」
「まあ、似合わなくはないかもね」
「衣装は廊下に置いてあるから」
「はいはい」
変なのじゃないことを祈りつつ部屋から出るのであった。

??????????
玲士が部屋から出ていって数分後、様子を見に行っていた曜が帰ってきた。
「果南ちゃん!玲士くんはとってもかっこよくなってるよ!」
「楽しみだなぁ」
「それでは玲士くん、どうぞ!!」
扉を開けて出てきた玲士の姿は童話に出てくる王子様のような格好をしていた。
「うぅ・・・、これで良いんでしょ」
よく見ると、顔が真っ赤になっている。
「玲士くん、すごく似合ってるよ!!ポーズ!」
隣で曜はすごい勢いで写真を撮っている。
「似合ってるよ玲士。私も記念に一枚撮ろうかな?」
「かな姉・・・」
最初は恥ずかしがっていた玲士も、だんだん慣れてきたのかポーズをとったりもした。
「次はどれにしようかな・・・」
「まだあるの!?」
「あはは、頑張ってね玲士」
??????????????

「ふぅ、やっぱり普通の服が一番良いや」
ファッションショーという名のコスプレ大会を終え、数時間ぶりに元の服に着替える。
「二人ともありがとう、今日は本当に楽しかったよ！」
「こちらこそ、いろんな衣装を着れて私も楽しかったよ。ありがとね、曜」
「それにしても何で昨日はあんなに怒ってたんだ？」
ずっと気になっていたことを曜に尋ねる。
「えーっと、それは・・・」
「振り付け考えたり衣装作りとかで忙しくっていろいろ溜まってたんでしょ？だから、昔みたいに家に泊まった千歌が羨ましかったんでしょ？」
かな姉に言われて曜は俯きながら小さく頷く。
「なるほどねぇ」
曜は頑張り屋だ。文武両道で人当たりも良く、昔から尊敬している。でも、そのせいで自分の時間を削ったり、一人で悩んでいることも多かった。
かな姉はあの時見それを抜いて、今日遊ぶことを提案したんだ、と今さらなが気づく。やっぱりかな姉は凄い。
「曜、ハグしよ？」
かな姉は大きく腕を広げる。
「果南ちゃん!!」
曜はかな姉の胸元に飛び付く。
「よしよし、曜が頑張ってることはＡｑｏｕｒｓのみんながよく知ってるよ。だから悩みがあったら私に言って。何でも相談に乗るからさ」
曜はなにも言わなかったが、小さくすすり泣く声が聞こえる。
いつもは目の前でかな姉が抱きつかれ時は弟として黙ってはいないが、このときばかりは曜に場を譲った。

曜は数分後かな姉に抱きついたままだったが、やがて顔を上げた。
「ごめんね二人とも。しんみりした空気にしちゃって・・・」
「大丈夫だよ。僕も出来る限りのサポートはするから、何かあったら言ってね」
「ありがとう玲士くん！そういえば二人とも、バスの時間大丈夫？」
「あっ！いけない忘れてた！」
曜に言われて時計を見ると帰る予定のバスの時刻が迫っている。
「玲士、急ぐよ。それじゃあ曜、また学校でね」
「うん！二人とも気をつけてね！」
「それじゃ、またファッションショーやるなら是非呼んでくれよ。またかな姉のコスプレ見たいし」
「果南ちゃんも良いけれど、それより私は玲士くんのメイド服姿が見たいな！」
「あーかな姉急ぎましょーバスが来ちゃう」

Ｙｏｕ，ｓ　ｍｏｎｏｌｏｇ
今日一日玲士くんと過ごして気づいた。
私、やっぱり玲士くんの事が好きなんだ。幼馴染じゃなくて、一人の男性として。
でも、私は知っている。
大切な幼馴染の千歌ちゃんが玲士くんのことが好きだってこと。
彼と初めて会ったのは、千歌ちゃんの友達としてだった。
そして、千歌ちゃんが玲士くんのことが好きだということに気づくのにそう時間はかからなかった。

あんまりにも千歌ちゃんに好かれてるから嫉妬したこともあったけ。

千歌ちゃんは昔からいつも一緒にいる大切な幼馴染だ。

だから絶対に千歌ちゃんを悲しませるようなことはしたくない。

でも、この気持ちは押さえきれない。

こんな悩みを抱えて二人といつも通りに過ごすなんて、私にできるのかな・・・

決闘!!ヨハネＶＳ玲士!!

「リトルデーモン、貴方に決闘を申し込むわ!!」
　そう言って善子から突きつけられた紙には『界たし状』と書いてある。
「カイタシジョウ？『果たし状』じゃなくって??」
「えっ!?」
「高校生にもなって漢字を間違えるなんてかっこ悪いずら」
「でも、漢字を間違えてるとはいえ、果たし状を突きつけられたことには代わりはないよ。もし僕がなにか善子ちゃんを怒らせるようなことをしたら謝るよ」
　Ａｑｏｕｒｓのマネージャーをやっている身として、メンバーとの信頼関係が一番大切だと考えている。もしそれを失ってしまってはおしまいだ。
「よ、善子ちゃん、喧嘩はやめてよ・・・」
「ま、マルが話を聞くから落ち着くずら」
　一気にその場の空気が重くなる。ルビィちゃんは今にも泣きそうだ。
「な、なんでみんなそんなに深刻になるのよ!・まずは中身を見なさいよ!」
　善子ちゃんに促され紙を広げて書いてある文章を読む。
『界たし状
　堕天使ヨハネの名において貴殿に決闘を申し込む。
　明日午前１０時、彼の約束の地にて待つ。
　勝敗は天界より示された伝説の遊戯によって決めるものとする。
　堕天使ヨハネ』

「・・・わかった!・要は、明日一緒に遊んでくれってこと?・」
「そういうことよ!・」

「「なぁんだぁ～」」
まあ、こういった遠回し？な誘いかたをする所も善子ちゃんらしい。
「それで、何で遊ぶんだ？オセロ？トランプ？」
「クククッ、そのような下等な下界の遊びなど、このヨハネには相応しくないわ」
「善子ちゃんカードゲームやるといつも負けちゃうもんね」
「オセロで全部ひっくり返された人初めて見たずら」
「うるさい!!って、だからヨハネよ！」
間髪入れず突っ込むルビィちゃんと花丸ちゃんと、それを訂正する善子ちゃん。
一年生三人のこの一連の流れは見ていてほほえましく思う。
「これで勝負よ!!」
そう言って善子が鞄から取り出したのは昨日発売されたばかりのゲームだった。
「あっ！そのゲームもう買ったの!?」
「要するに、新しくゲームを買ったから一緒に遊んでほしいってことずらね」
「物分かりの良いのねリトルデーモン。それじゃあ明日、天界より示された彼の約束の地にて落ち合いましょう」
「了解。明日は特に予定もないし」
「ルビィ！ずら丸！あなたたちもよ！聖戦の目撃者となりなさい！」
そう言って善子ちゃんは二人を指さす。
「マルは明日はお寺の手伝いがあって・・・」
「ルビィも明日は家族みんなで出かける用事が・・・」
「うううぅ・・・」
「あはは、残念だったね善子ちゃん」
「まあ、元から予定があるなら仕方ない・・・って、だ・か・ら、ヨハネよ！」

ＹｏｓｈｉｋｏＹｏｈａｎｅ，ｓ　ｐｅｒｓｐｅｃｔｉｖｅ

???????????

スマホのアラームで目が覚める。
玲士との決闘にむけて夜中までゲームしてたからまだ眠い。
目覚ましは８時半にセットしたから、約束の時間の１０時まで１時間半余裕がある。
アラームを止めようとスマホを手に取る。
画面には『０９：３０』と表示されていた。
「どうしよう、完全に寝坊じゃない!!」
私はベットから飛び起き、リビングへ向かう。確かに８時半にセットしたはずなのに！
仮の同居人（両親）は既に居らず家には私一人だけ。
前日に着ると決めていた服に着替え、鏡の前に立つ。
髪をセットしようと鏡を見ると、寝癖がピョンとはねている。
慌てて直そうとするが何度やっても直らない。
「なんで直らないのよ！」
こんな姿リトルデーモン達に見られたら何て言われるか・・・
その時、ピンポンと玄関のチャイムが鳴る。
「どうしよう！もう来ちゃったじゃない！」
何とか水を付けて寝癖を直し、急いで玄関に向かいドアを開ける。
「よ、よく来たわねリトルデーモン」
「おはよう善子ちゃん」
「なんで私なんかも・・・」
ドアの前には決闘の相手である玲士と、来られない二人の代わりに呼んだリリーがいた。
「愚問ね上級リトルデーモン　　リリー。あなたはこの聖戦の目撃者となることを光栄に・・・」
その時運悪く私のお腹が鳴った。その音で慌ててたので朝ご飯を

食べてないことを思い出す。
「もしかして善子ちゃん、朝ごはん食べてないの？」
「だ、堕天使にはそのようなものは必要・・・」
「まさか夜更かしして、今起きたばかりじゃないでしょうね」
はぐらかそうとしたが、リリーに問い詰められる。
「な、なぜそれを・・・」
「やっぱり。夜更かしは駄目だってダイヤさんに言われてるでしょ」
「それに、腹が減っては戦はできぬって言うし。先に僕たちは部屋で待ってるから、食べてきな」
「はい・・・」
そう言われ、顔を赤くしながら私はリビングへ向かうのだった。

????????????

梨子ちゃんと二人で善子ちゃんを待つ。
「どうして梨子ちゃんは今日ここへ？」
「善子ちゃんに呼ばれたのよ・・・。まあ、今日は元から予定が無かったからいいけど??」
「あはは・・・ご苦労様」
不満げな表情になる梨子ちゃん。そんな会話をしている内に善子が戻ってきた。
「待たせたわね、リトルデーモン。さあ、聖戦を始めるわよ!そして、私が勝ったら何でも言うことを聞いてもらうわ！」
そう言ってビシッっと僕を指さす善子ちゃん。
「何でもかぁ・・・、良いよ、面白そうだし」
善子ちゃんが提案した条件に了承する。
「善子ちゃん、あんまり変なことお願いしちゃ駄目よ！」
「わかってるわよ！」
梨子ちゃんが釘を刺してくれた。まあ、堕天使料理（激辛）の試食

会はさすがにちょっと・・・と思う。
「もし善子ちゃんが負けたら?」
「そ、その時はリトルデーモンのお願いを聞いてあげるわ」
「まあ、お願いすることなんかないと思うけどね」
「そろそろ始めるわ。いくわよリトルデーモン!このヨハネの力を思い知らせてくれるわ!」
「よしきた!」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「うおっ、善子ちゃん強い!」
ゲームが始まると、僕は善子ちゃん側の攻撃に打ちのめされ、防戦一方となる。
やがて画面に、『１Ｐ　Ｗｉｎ』と表示され一回戦目は善子ちゃんの勝ちとなった。
「いや〜善子ちゃん強いね」
「昨日夜通し特訓した甲斐があったわ!この調子なら次も楽勝ね!」
「うぐぐ・・・・」
早速僕はピンチに立たされる。
「さあ!二回戦目を始めるわよ!覚悟しなさい!」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「なんで急にボタンが反応しなくなるのよ!」
二回戦目は僕の辛勝に終わった。

「危ないところだった～」
「そういえば善子ちゃん。今日お家の人は??」
大きく伸びをして、梨子ちゃんは言う。さすがに見ているだけでは退屈だったのだろう。
「我が仮の同居人は何処へと旅立ったわ。例え戻ってきたとしても、このヨハネが張り巡らせた聖霊結界によって・・・」
ちょうどその時、玄関の方で扉が開く音がする。
「あら善子、お友達?」
そして、少し開いたドアの間から善子ちゃんのお母さんが顔を出す。
話に聞いていた通り、善子ちゃんによく似ている。
「げっ!?なぜこの時間に?!」
「すみません昼食までご馳走していただいて・・・」
??????????
僕と梨子ちゃんは善子ちゃんのお母さんのご厚意で津島家で昼食をいただくこととなった。
「良いわよ別に。玲士君にリリーちゃんね、いつも善子から聞いてるわ。ありがとね、善子と仲良くしてくれて」
「いえいえこちらこそ・・・」
「ふふ、玲士はこのヨハネに最も忠実なリトルデーモンの一人よ」
「凄いわね～玲士君。いっそのこと善子をもらってくれないかしら?」
「!?!?」
「ゴホッゴホッ!」
善子ちゃんのお母さんがとんでもないことを言うので、びっくりして思わず噎せ返る。
「ちょっと!へ、変なこと言わないでよ!!」

「なんてね、冗談よ！」
「あはははは・・・・」
　愛想笑いしか出来ない。善子ちゃんとはＡｑｏｕｒｓの活動意外にもよくゲームをしたりする関係だ（後は堕天使とリトルデーモンの主従関係？）。決して男女の仲などではない。しかし、はっきりと『嫌だ』と断ってしまえば善子ちゃんを傷つけてしまうことにもなりかねないから難しいところだ。

　お昼の後は午前中は観戦していた梨子ちゃんも加わりいっそう賑やかになる。
　そしていよいよ決戦の時が来た。
「さあ！これが最後の勝負よ！」
「二人とも、頑張ってね」

?????????

「いやー残念。惜しかったなぁ」
　結局三回戦目は僕の負けとなり、約束通り善子ちゃんのお願いを聞くことになった。
「本当に大丈夫？何でも言うこと聞くのよ？」
「大丈夫だよ。それよりごめんね、今日は一緒に付き合ってもらって」
「玲士君が謝ることはないわ。悪いのはあの堕天使よ！それに二人きりだとあの堕天使が何をしでかすか分からないし」
「そう言いながらも結構ゲーム楽しんでたじゃん。上級リトルデーモンのリリーちゃん」
「もう！玲士君まで！」
　そんな会話をしながらバス停までの道を歩く。
「玲士君、一つ聞きたいことが有るんだけど、良いかな？」
　しばらく話していると今までと違って真剣な表情になる梨子ちゃ

ん。声のトーンも下がる。
「なんだい？」
「玲士君、さっきわざと負けなかった？」
梨子ちゃんの質問にギクリとする。
「・・・どうしてそう思うの？」
「だって善子ちゃんの方をチラチラ見てたでしょ、それに時々手が止まってたし。明らかに不自然よ」
「・・・凄いね、梨子ちゃんは」
梨子ちゃんといいかな姉といい、どうして女の子はこう察しが良いんだろう。もしかして僕が鈍感なのか？かな姉にもよく言われるし。まぁ、そんなことは今考えることではない。

「待ちなさいよ！」
突然の背後からの声に振り向くと善子ちゃんが立っていた。
「「善子ちゃん!?」」

Ｙｏｓｈｉｋｏ　Ｙｏｈａｎｅ，ｓ　ｐｅｒｓｐｅｃｔｉｖｅ

玲士の忘れ物に気づいて急いで追いかけたら、偶然二人の話を聞いた。
そうしたらなによ！わざと負けてって！
「聞いたわよ!!あなたわざと負けたのね!!」
「い、今のは何と言うか・・・」
なかなか答えようとしない玲士に私はさらに問い詰める。
「はぐらかしてもムダよ！このヨハネアイにかかればすべてお見通しなんだからね!!」
しばしの沈黙の後、玲士が口を開く。
「・・・僕が勝ったってお願いすることなんて無いから・・・。ほら、お昼もごちそうになったし・・・」

「なによそれ!」
「善子ちゃん落ち着いて・・・」
リリーの制止をよそに私は言葉を続ける。
「それに私の言うこと何でも聞くのよ!嫌じゃないの!?」
「嫌じゃないよ。だって善子ちゃんと一緒にいると楽しいし。堕天使の話とか僕はすごく好きだよ」

『一緒にいると楽しい』『すごく好き』その言葉にドキッとする。
そして、彼との会話が自然と思いだされる。
彼はいつも嫌な顔一つせず私の話を聞いてくれる。今日もこうして私の急な誘いに付き合ってくれた。
実際私も彼と話していて楽しいと思っている。
そして、彼のことをもっと知りたい、一緒にいたいと思うようになっていった。

「こ、今回は特別に許してあげるわ。それに、今の言葉嘘じゃないわよね!」
「もちろん、嘘じゃないよ」
「ほ、本当?天界堕天条例に誓って??」
「誓うよ 」
「まあ、玲士君嘘つけないもんね。ついてもすぐ果南ちゃんに見破られるし」
「あはは・・・確かに」
玲士は苦笑しながら頭を掻く。そのような彼の仕草の一つ一つをもっと近くで見ていたい。だんだんその思いが強くなる。
そして、私は言い放つ。
「堕天使ヨハネの名において、リトルデーモン玲士に命ずる!明日一日私に付き合いなさい!!」
「わかりました。ヨハネ様の仰せのままに」
「ふふ、よかったね善子ちゃん」
「だ・か・らヨハネよ!」

リリーにいつもの返しをしながらも、私の頭はすでに明日の玲士との約束の事を考え出していたのだった。

妹と弟の姉談義

休日、僕はかな姉に頼まれたおつかいがてら沼津の商店街を歩く。
「ん？なんだあれ？」
見るとそれは新しくできた洋菓子店の開店セールの行列だった。
実は、松浦玲士は『セール』とか『限定』等の言葉に非常に弱いのである。
だから普段なら買わないような物もついつい買ってしまうという悪い癖があるのだ。
「デザートに買っていくか」
行列に並び、おすすめと書いてあった特性プリンを４つ買っていく。
そして商店街をぶらついた後、店の近くに戻ってくると、ちょうど赤髪ツインテールの女の子がお店から出てきた。見まごう事なきＡｑｏｕｒｓの黒澤ルビィちゃんだ。遠目から見ても落ち込んでいるのがわかる。
「おーい、ルビィちゃ～ん」
「ピギィ！あっ、玲士さん」
僕に呼ばれてピョコンと小さく跳ねるルビィちゃん。
「もしかして、玲士さんもお買い物ですか？」
「うん、ちょっとおつかいを頼まれてね。ルビィちゃんはお菓子買いにきたのかな？」
「はい、でも欲しいものが売り切れちゃってて・・・。玲士さん、ルビィの相談聞いてもらって良いですか？」
そう言って上目遣いで頼み込むルビィちゃん。
こんな頼み方をされて断れる人がいるだろうか？いや、そんな人はいるはずがない。
「相談？良いとも。まあ、立ち話もなんだからどっか座れるところに行かない？」
「はい！」

「実??????????????はお姉ちゃんが取っておいた抹茶味のお菓子を間違って食べちゃって・・・。それでお詫びにお姉ちゃんが大好きなプリンを買ってこようと思ったんだけど売り切れちゃってて・・・」
二人で入った喫茶店でいきさつを話終え、シュンとして俯くルビィちゃん。
「なるほどねぇ。優しいね、ルビィちゃんは」
「お姉ちゃんはいつもルビィが好きなものを分けてくれるから。それに今度のお菓子はお姉ちゃんが本当に楽しみにしてたみたいだから・・・」
ルビィちゃんの優しさに心を打たれる。
僕はＡｑｏｕｒｓには二人の天使がいると思ってる。一人目は堕天使の善子（ヨハネ）ちゃん。そしてもう一人が自称はしていないものの天使のようなかわいさと優しさを持つルビィちゃん。
つくづくダイヤさんは幸せ者だなと思う。

「ルビィ、玲士さんみたいにお姉ちゃんに頼らなくて良いようになりたいんです。ルビィはまだお姉ちゃんに頼ってばかりだから・・・」
「いや、僕もかな姉に頼ってばっかり。それに、ルビィちゃんはすごく成長していると思うよ」
ルビィちゃんはもう昔の彼女ではない。Ａｑｏｕｒｓのマネージャーをしていてわかる。昔は僕やかな姉がダイヤさんの家に行くといつも隠れちゃってなかなか姿を見せてくれなかった。
それが今ではスクールアイドルとして多くの観客の前で歌って踊っている。本当にすごいと思う。
「それにしてもうらやましいよ。ダイヤさんみたいな人を姉に持って」
ダイヤさんはその場にいるだけで凛とした雰囲気を醸し出し、厳しさの中にも優しさを兼ね備えている素晴らしい人だ。

「お姉ちゃんはスクールアイドルのことなら何でも知っていて、家でも宿題とかダンスの練習とか色々手伝ってくれて、ルビィの自慢のお姉ちゃんなんだぁ♪」
「でも、かな姉だって料理は美味しい、スポーツは得意、お刺身とか分けてくれるし自慢の姉さ」
　僕が話し終わると、顔を見合わせて二人ともクスクスと笑う。
「お互い姉を持つもの同士考えることは同じみたいだね」
「そうみたいですね」
　自分の姉を自慢したいと思うのはどちらも同じらしい。
「玲士さんは果南ちゃんと喧嘩しちゃったりする事ってあるんですか？」
「喧嘩かぁ・・・、最近はしてないけど昔はあったよ」
　僕にとってかな姉は女神のような存在だ。
　しかし小さい頃は愚かにもそのかな姉に楯突いたこともあった。
「確か家出するなんて言ったこともあったなぁ」
「い、家出!?」
「うん、あれは小学校に入るか入らないか位の頃――」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
　ある日、僕とかな姉は喧嘩をした。
　喧嘩の原因は簡単明快、兄弟姉妹を持つ人は一度は経験したことがあるであろう『チャンネル争い』というものだった。
「今日は7時から『世界のイルカたち』見るの！」
「ヤダヤダヤダ!!そんなの見たくない！」
「玲士！お姉ちゃんの言うこと聞いて！」
「ヤダヤダヤダ!!見たくない！見たくない！他のやつ見たい！」
「見・る・の！」
「い・や・だ！」
「じゃあもう玲士にハグしてあげない！おかず分けてあげない！」
「ケチ！お姉ちゃんのいじわる!!」

「言うこと聞かない玲士がわるいんだからね！」
「むぅ～、もうやだ！玲士いえですする！」
　そう叫んで僕は家を飛び出した。
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
「――――まあ、結局大事にならなくて済んだけどね」
「そんなことがあったんですか」
「後他にはね・・・」

「あら、ルビィ、玲士さん」
　急に名前を呼ばれて驚いて振り向くと、入り口の辺りにその声の主はいた。
「ダイヤさん!?」「お姉ちゃん!?」
　突然のダイヤさんの登場に僕もルビィちゃんも驚く。
「たまたま商店街を歩いていたら二人を見つけたので。ふたりでお買い物ですの?」
「いや、僕がたまたま商店街でルビィちゃんを見つけただけで・・・」

「ごめんなさい！ルビィ、お姉ちゃんが取っておいたお菓子を食べちゃったんです！」
　突然ルビィちゃんが立ち上がって深々と頭を下げる。
　ダイヤさんは驚いた様子だったが、次第に落ち着いた表情に戻っていった。
「いえルビィ、私の方こそあなたに謝らなければならないのですわ」
「と、言いますと?」
「実は一週間ほど前――――」
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
「ダイヤ、冷蔵庫にお父様がお客様からもらったプリンがあります。お父様はいらないそうなので二人で食べなさい」
　部屋で勉強しているとお母様が声をかけてきました。

言われて台所に行き冷蔵庫を開けてプリンを取り出す。
蓋を開けてスプーンで一口すくい、口に入れる。
「な、なんですのこの味は!?」
そのとろけるような美味しさに私は瞬く間に魅了されてしまいました。
「も、もう一つ・・・」
気づいたら私の手は冷蔵庫を開けてもう一つのプリンに伸びていました。
「る、ルビィ・・・、ごめんなさい!」
こうして私はルビィの分のプリンを食べてしまったのでした・・・
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「―――と言うことがあったのですわ」
「なるほどねぇ。結局二人とも同じことしてたってわけか」
「ルビィ、こんな私を許してください。お詫びに今度スイートポテトを買ってあげますわ」

「そうだ!もしよかったらこれ二人で食べて」
僕は箱からさきほど買ってきたプリンを2つ取り出し、二人に差し出す。
「本当に良いんですの!?結構高かったのではなくって?」
「いや、セールって聞いてつい多く買っちゃって。それに僕とかな姉の分があれば十分なんで」
「玲士さん、ありがとうございます!」
ペコリ　と頭を下げて笑顔を見せるルビィちゃん。やっぱりルビィちゃんは天使だと思う。
「そういえば玲士さん、買い物は良いんですか?」
「あっ、いけない!すっかり忘れてた!」

ルビィちゃんに言われ、商店街に来た目的を思い出す。
「あんまり遅いと果南さんに怒られますわよ。早く行きなさい、ここのお会計は私がしておきますので」
「えっ!?そんな、悪いですよ」
「いえ、プリンのお礼ですわ」
「それじゃ、お言葉に甘えて。ダイヤさんありがとうございます!また学校で」
僕はダイヤさんに頭を下げ、喫茶店を後にした。

いっぱい食べる君が好き

「みんなお待たせ」
今日もいつものごとく放課後に浦女に来て、屋上に出る扉を開ける。
しかし、みんなの方を見ると見知った顔一つが足りない。
「あれ？花丸ちゃんは？」
「花丸ちゃんは図書委員の仕事があって遅れるから先に始めておいてって」
ルビィちゃんが教えてくれた。
「わかった、じゃあ先に始めてよっか」

ストレッチや発声練習等を行ってしばらく経つが、なかなか花丸ちゃんは現れない。そのうち休憩という声がしたのでみんなのところに水筒を持っていく。
「それにしても遅いね花丸ちゃん。なにか手間取ってるのかな？」
「もしかしたら、今日二年生の図書委員の人が風邪でお休みだから時間がかかってるのかも」
タオルで汗を拭きながら梨子ちゃんが言う。
「心配なら、手伝ってくれれば？」
ちょうど水筒を取りに来たかな姉が僕に言った。
「わかった、ちょっと抜けるね」
皆にそう断り、花丸ちゃんを手伝いに図書室へ向かう。

「花丸ちゃん、手伝いに来たよ」
図書室では花丸ちゃんが何冊も本を抱えてせっせと本を棚に戻す作業をしていていた。
「あっ、玲士さん。ごめんなさい、オラの作業が遅くって・・・」
「いや、この量の本を一人でやるんだから頑張ったって遅くもなるよ。

花丸ちゃんは働き者だね」
　辺りを見ると、まだかなり多くの本がテーブルの上に置いてある。
僕はその本の山から何冊かを手に取る。
「この本はどこに置けば良いの？」
「あっ、その本は向こうの棚ずら」
　こうして二人で作業を進め、何とか本の山を無くすことができた。
「玲士さん、手伝ってくれてどうもありがとうございますずら！」
「いやいや、メンバーを助けるのもマネージャーの仕事の内だよ。早く練習に合流してきな。みんな心配してたよ」
「はい！」
　僕たちは急いで図書室を後にした。

「玲士さん、さっきはどうもありがとうずら」
　練習が終わって浦女から出ると、花丸ちゃんが声をかけてきた。
「いやいや感謝されることでもないよ、マネージャーとして当然さ」
「やっぱり玲士さんは優しいずら。ところで玲士さん、週末って空いてますか？」
「週末なら大丈夫だよ。どうかしたの？」
「実は・・・」
　そう言って花丸ちゃんは鞄から一枚のチラシを取り出した。

「玲士さん、今日はオラに付き合ってくれてありがとうずら！」
「いやいや、こちらこそ誘ってくれてありがとう」
　僕は今花丸ちゃんと沼津で開催されているフードフェスの開場にいる。昨日はそのお誘いを受けたというわけだ。
「どれも美味しそうだね、何から食べようか？」

「え～と、じゃあまずはあそこのお店ずら！」

それからは二人で開場を回り、いろんな美味しいものを食べた。
いろんなものを美味しそうに食べているときの花丸ちゃんの笑顔はスクールアイドルとして舞台に立っている時と同じくらいの輝きだ。見ているこちらも自然と笑顔になる。

「いろいろ食べてきたけど、そろそろ甘いものが食べたくなったなぁ」
「じゃあ、今度はあれを食べてみるずら！」
花丸ちゃんが指したのは東京の有名スイーツ店のチョコレートケーキだった。
「男女ペア限定の商品??花丸ちゃん、もしかして今日僕を誘ったのって・・・」
看板をよく見ると『男女ペア限定』と書いてあるが、それにもかかわらず先程から結構注文されている。
「えへへ・・・、このケーキがすごく美味しいって聞いて・・・」
「なるほどねぇ、じゃあ食べてみようか」

二人で注文した後は、僕は席をとるためにその場を離れる。
「お待たせずら～」
数分の後、花丸ちゃんがケーキを持ってきた。
「えっ?これって・・・」
ピンク色だったり、ハートの形をしてるってことは、どうみてもカップル向けの商品だよねこれ・・・
まわりを見てみると、イチャつきながら食べてるカップルがちらほら・・・
「早速食べるずら♪」
花丸ちゃんは特に気にしてはいないみたいだけど、まわりからその・・・、まあ、いわゆる恋人同士と見られないか心配だ。
変な噂が立ってＡｑｏｕｒｓの活動に支障が出るようなことがあ

ればこの松浦玲士は死んでも死にきれない。
「玲士さん、どうかしたずら？もしかしてあんまりお口に合わなかったんじゃ・・・」
「いやいや、とっても美味しいよ」
「やっぱり玲士さんを誘った甲斐があったずら♪」
「あはは、お役に立てて何より。次はどうしようか？」
「じゃあ次は・・・」

その後も食べた、食べた、とにかく食べた。そしてついに限界が来た。
「は、花丸ちゃん、もうお腹いっぱいじゃない？」
「いや、マルはまだまだ食べられるずら！」
笑顔で答える花丸ちゃん。
「あの～花丸ちゃん、腹八分目と言ってね、あんまり食べ過ぎると・・・」
「もちろんわかってるずら。今はまだ半分くらいずら」
「ゑ??」
少なくとも僕の倍は食べてるのにそれをまだ半分と言う花丸ちゃん。たしかに僕はあまり多くは食べないけれど、さすがに食べ過ぎなんじゃ・・・
彼女のお腹の中はいったいどうなってるんだ??
「次はあそこのお店のケーキ食べるずら～」
「ま、まだ食べるの・・・？」

「――と言うわけで今日の晩ご飯は少なめで・・・」
家に帰ってかな姉に事の経緯を話す。
「まったく・・・、食べ過ぎないようにってあれほど言ったでしょ」

かな姉に呆れ顔をされる。
「それと、玲士最近太ったね」
「うぐっ・・・」
痛いところを突かれる。たしかに最近体重計の数値が上がりぎみだなという自覚がある。
「そういうことだから、明日からランニングするから早起きしてね」
「は～い」
こうして当分の間僕はかな姉の早朝ランニングに付き合うことになったのであった。

マリーのＣｏｏｋｉｎｇ　Ｔｉｍｅ

Ｍａｒｉｅ’ｓ　ｐｅｒｓｐｅｃｔｉｖｅ

「あ～ん、いったいどうしたら玲士の胃袋をｃａｔｃｈできるの～」
　大きな独り言を呟き、買ってきた料理の本をながめる。
　昨日も玲士に、『マリー特製☆フランス料理三段弁当』作って持たせたんだけど、あんまり気に入ってくれなかったみたい。
　だって玲士ったら、私がどんな料理を作っても『かな姉の作る料理が一番美味しい』って言うんだもん。
　果南ってばあんなに玲士に愛されてるなんて、マリー嫉妬しちゃう！
「そうだ、Ｇｏｏｄ　ｉｄｅａがあったわ！」

??????????

「――ということで、玲士好みの料理の作り方を教えてください果南先生♪」
　結局、私は果南から料理を教わることにした。場所はホテルの厨房でもよかったんだけど、果南が家の方が良いって言うから松浦家のキッチンですることになった。
「別に良いけど、私としては普通に作ってるだけなんだけどなぁ」
「いえ！何か秘密があるはずよ！それで果南、今日は何を作るの？」
「今日は玲士が大好きなカレーだよ」
「ｃａｒｒｙ　ｒｉｃｅ？たしか家に本場のｓｐｉｃｅがあったから持ってきたほうが良いかしら？」
「まったく、これだから金持ちは・・・。普通ので十分。まずは玉ねぎを刻むから、まな板取って」
　まな板を渡すと果南は玉ねぎを刻み始めたので、私も家から持ってきたものを同じように刻む。
「あ～ん、玉ねぎが目に染みる～」

玉ねぎが目に染みるとは聞いていたけど、まさかこんなにすごいとは・・・

果南の方を見ると平然と玉ねぎを刻んでいる。

「な～んで果南はそんなに平気そうな顔してるの～??」

「玉ねぎは切る前に冷水で冷やしておくと目に染みにくくなるんだよ。鞠莉も覚えておいた方が良いよ」

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　果南！」

その後はニンジンやじゃがいも等を食べやすい大きさに切る。

果南曰くじゃがいもは大きめに切っておくと玲士は喜ぶらしい。

切り揃えた野菜と肉を炒めて水を入れる。

「待って鞠莉、水はなるべく少なめに。玲士は水っぽいと嫌がるから」

「なるほど・・・」

料理の最中に果南から聞いた玲士の情報を逐一メモにとっておく。他の料理に応用して玲士好みの味を作るために！

そして、カレールーを入れてコトコト煮込む。

「あとは、カレールーの他にソースを少しとチョコレートを数欠片入れると玲士好みの味になるよ」

そして数分間煮込み、完成となった。

「これでｃｏｍｐｌｅｔｅデース！」

「もうすぐご飯が炊き上がるからそれで完成だよ。そろそろ玲士が帰ってくると思うから、ちょうど良いかな」

ご飯が炊き上がるのを待っている間、私は果南にあることを聞いてみる。

「ねぇ、果南って玲士のこと、どう思ってるの？」

「玲士のこと？どうしたの急にそんなこと聞いて」

「別に良いじゃな～い♪どう思ってるのよ♪」

私がそう言った後、う～んと果南は少し考える素振りをした。

「玲士は大切な弟だよ。昔から背伸びして私に追い付こうとしてるけど、まだまだ子供っぽい所もあるからかわいいんだ。お互い持ちつ持たれつな関係ってとこかな」

「ふぅん、持ちつ持たれつねぇ。??じゃあ、もしそのかわいい弟にＧｉｒｌｆｒｉｅｎｄができたら??どうする？」
「うーん??、玲士が決めたことなら私は特に干渉しないよ。でも玲士って他人の事はよく気づくけど、自分の事になると鈍くなるからいろいろと大変なんじゃない？」
「ほんっと！それ！なんであんなに鈍感なのかしら！」
　玲士の鈍感は一種の病気よ！マリーは毎日ａｐｐｒｏａｃｈしてるのに！
「なんで鞠莉がそんなに興奮するのさ？」
「??ただいま～」
　そうこうしているうちに、玲士が帰って来た。
「おかえり、玲士」
「玲士～　ｗｅｌｌｃｏｍｅ　ｂａｃｋ♪」
「鞠莉姉!?どうしてそんな格好を？」
　エプロン姿の私に少し驚いたようだった。
「今日はマリーが玲士のためにｃｏｏｋｉｎｇしたのデース！」
「また高級フランス料理でしょ？」
「ｎｏｎ　ｎｏｎ、今日は果南直伝のｃａｒｒｙ　ｒｉｃｅデース!!」
「もうできてるから、二人ともご飯食べる準備して」
「は～い」

　いよいよカレーを盛り付け、食べ始める。私はドキドキしながら玲士の反応を窺う。
「お味はいかがかなん？」
「うん、おいしいよ。いつもの味」
　その言葉を聞いてホッとする。
「よかったわ～気に入ってくれて」

「それにしてもなんでまた急にこんなことを？」
「だ～って～玲士がマリー特製お弁当を気に入ってくれないんだもん」

「別に気に入ってないって訳じゃなくて、鞠莉姉の料理も僕は好きだよ。ただ、かな姉の料理が一番ってだけであって・・・」
「じゃあ明日から毎日マリー特製のお弁当を持ってってるのね！」
「まぁ、毎日じゃなくてたまになら・・・」
「じゃあ明日はマリーがお弁当作るわね♪」
「べ、別に良いけど・・・」
少し目をそらしながら言う玲士。照れた時にする彼の癖だが、ハグしたくなるほどのかわいさだ。もういっそのことハグしちゃおうかしら？
「鞠莉、玲士！食事中はハグしちゃ駄目だからね！」
「なんでわかるのよ」
「玲士と鞠莉の考えそうなことは大体わかるよ」
どうやら果南には全部お見通しだったみたい。
「じゃあ、食べ終わったマリーがらい～～っぱいハグしてあげるわ♪」
「うぅ・・・かな姉・・・」

～～～～～～～

翌朝、昨日言っていた通り、鞠莉姉が弁当を持ってきた。ちなみに結局昨日はご飯の後めちゃくちゃ抱きつかれました。
まったく鞠莉姉は僕を抱き枕と勘違いしてるんじゃないだろうか？僕にハグして良いのはかな姉だけなんだもんね！それにハグはかな姉の専売特許みたいなもんだぞ。
それはさておき、弁当の話に戻ろう。以前弁当を作った時なんかは重箱に入れて持ってきてたが、今回はいたって普通の弁当箱だ。
「マリー特製♪シャイニー☆弁当よ！ちゃんと玲士好みの味付けにしたわ♪」
「ありがとう鞠莉姉、お昼が楽しみだよ」
「いっぱい食べてね！マリーより愛を込めて♪」
そしていよいよお昼の時間になった。

弁当箱の蓋を開けると僕の目に飛び込んできたのは・・・

『ＬＯＶＥ♥？玲士』

そぼろと桜でんぶでご飯の上にそう表されている。

よく見るとニンジン等の野菜もすべてハートの形に切り揃えられている。

「ま、鞠莉姉ぇ・・・」

僕は恥ずかしさに耐えながら弁当を食べた。

まあ、美味しかったからよかったけど。

Ｍａｒｉｅ，ｓ　ｍｏｎｏｌｏｇｕｅ

私が作ったカレーを美味しそうに食べる玲士の顔を見て、自然と胸がトクトクと高鳴っていくのがわかる。

その笑顔を見て、もっと彼の笑顔が見たい、そばにいてほしい、そんな気持ちが芽生える。

彼のことは昔から一緒にいるから弟みたいな存在だと思ってた。

でも、改めて実感する。

あぁ、やっぱり私は一人の男性として、彼のことが好きなんだ。

もしかして、煮込まれちゃったのはカレーじゃなくって私の方かもね。

でも玲士は果南にしか興味ないみたい。

こうなったらやっぱり、あの手で攻めるしかないのかしら？

開校！スパルタ式黒澤塾！

「かな姉、これは・・・どういう状況？」
いつものごとく放課後に部室にやって来た僕の目に入ってきたのは、腕を組ながら険しい表情をしながら立っているダイヤさんと、その前で椅子に座りながらうなだれている千歌と善子。
大方この二人が何かやらかしたのだろうとは予想がつくが一応聞いてみる。
「あれ」
かな姉はそう言って机の上に置いてある紙を指差す。
よく見るとそれはどうやら数学のテストの答案のようだが、お世辞にも良いとは言えない点数だ。ダイヤさんが怒るのも納得だ。
「千歌さん、善子さん、これはどういうことですの？」
大きな声では無いものの、ものすごい威圧感を感じる声でダイヤさんが二人に問いかける。
「ええっと・・・、昨日の夜に勉強しようと思ってたけど、その前に寝ちゃって・・・」
「あれは範囲を間違えたというか・・・」
ダイヤさんに言われてばつが悪そうにする二人。
「どれどれ、なんだ、こんなの簡単じゃないか」
携帯しているメモ帳にテストと同じ問題を解いて見せる。一応数学は苦手ではないと思っている。
「ほれ、できたぞ」
解いた問題を千歌と善子に見せてやる。
「わー！玲士くんって頭良いー！」
「どんなもんだい」
「玲士君・・・、それ、全部間違ってるよ・・・」
さっきから僕が解いた問題をジーっと見ていた梨子ちゃんが言った。
「ほんとだ、全部違ってるね」
かな姉も同じことを言う。

「あれっ？おかしいな？」
「玲士さん、そこにお座りなさい」
　瞬時にダイヤさんの鋭い眼光がこちらに向けられる。
「はっ、はい！」
　僕の防衛本能が危険を察知し、瞬時に椅子に座る。
「玲士さん、あなたがこの程度だったとは・・・」
「うぅ・・・」
　先ほどまで二人を見ている立場だったのが、叱られる側に早変わりした。今日は人の身明日は我が身とはよく言ったものだ。
「学生の本分は勉強です！その勉強が疎かになってはスクールアイドル活動にも支障がでます！そうならないように私が勉強を教えてさしあげますわ!!」
「ど、どうかお手柔らかに・・・」
「生温いやり方では意味がありません！スパルタ式で厳しくバシバシといきますわ！お覚悟なさい！」
「「そんなぁ～！」」

　翌日、練習はお休みとなり、僕と千歌、善子の三人は黒澤家に集められた。
　黒澤家には小さい頃からかな姉と一緒に何度か訪れたことがあるが、何度来ても伝統ある雰囲気に圧倒される。
「まずはこれですわ！」
　広い和室の客間に通された僕たちに分厚い数学の問題集が目の前に突きつけられたる。
「これが終わるまで休憩は一切無しですわ！」
「「ええーっ!!」」
　思わず声をあげる。

「名付けてスパルタ式黒澤塾ですわ!!」
「何で名付けるんですか?」
「おだまらっしゃい!とにかく始めますわよ!」
こうしてスパルタ式黒澤塾?での勉強会が始まった。

「私は少し席を外しますが絶対に怠けたりしないように!」
始まってしばらくの後、そう念押ししてダイヤさんは部屋を出ていく。
「はぁ〜、疲れたわ〜」
襖が閉まった途端にゴロン、と横になる善子。
「おい善子、まだ3分の1も終わっていないぞ」
「だからヨハネよ!だって仕方ないじゃない!こんなのを休み無しでやれなんていくらなんでも無理よ!」
「そうだよ玲士くん!」
「まったく・・・、まあ、こんなこともあろうかと・・・、ほれ!」
僕は鞄から隠し持っていたお菓子を取り出す。
「リトルデーモン、あなたなかなかやるわね!」
「わーい!お菓子だー!!」
両手をあげて大喜びする千歌。
「馬鹿!声が大きい!」
僕がそう言うのと同時にドタドタドタっと足音がして、大きな音を立てて勢いよく襖が開く。
「しまった!」
「あーなーたーたーちぃー!!!」
ものすごい形相のダイヤさんがそこに立っていた。
「こんなものを持ち込んでいたなんて!!没収ですわ!!」
唯一の頼みの綱のお菓子もダイヤさんにあえなく没収された。
「まったく、千歌のせいで・・・」
「うぅぅ、ごめん・・・」
「そこの二人!手が止まってますわ!」

「はい・・・」
そして、どれくらい時間がかかったかわからないが、ようやく半分が終わった。
「ダイヤさん喉乾いた～」
「まったく・・・、仕方ありませんわね。今持ってきますから。でも、その間、前みたいに怠けたら承知しませんわよ!!」
そう言い残し、ダイヤさんは部屋を出た。
前回のこともあるので、さすがに三人とも怠ける気は起きない。
すると、先程とは違い音をたてないようにゆっくりと襖が開く。完全に開かぬとも、そこから見える赤いツインテールでルビィちゃんだとわかる。

「ルビィちゃん!?」
僕がそう言うと、口の前で人差し指を立てた後、そろりそろりと足音をたてないようにこちらに近づいてくる。
「お姉ちゃんには内緒にしてくださいね」
ポケットから何個かのあめ玉を取り出して机の上に置く。
あぁ、やっぱりルビィちゃんは天使だ。
「よくやったわ、リトルデーモン、ルビィ!」
「ありがとうルビィちゃん!」
三人であめ玉を包み紙から出して口に入れる。
「えへへ・・・」
その時襖が開き、ダイヤさんが戻ってきた。
「お姉ちゃん!?」
「あらルビィ、どうしてここに?」
僕はとっさに机の上のあめ玉と包み紙を隠そうとするが、それを見逃すダイヤさんではなかった。
「玲士さん、手に持ってるものを出しなさい」
「はい・・・」
僕は観念してあめ玉を机に置く。
「これは・・・まさかルビィ、あなた・・・」

あめ玉を見たダイヤさんの疑いの目が、その場にいたルビィちゃんに疑いの目が向く。
せっかく善意で僕たちを助けてくれたルビィちゃんを助けなければならない。
「ち、違います！僕が持ってきたんです！なっ！善子！」
ルビィちゃんを庇うため僕はとっさにそう言った。
「えっ!?そ、そうね！玲士が持ってきた・・・って、だからヨハネよ！」
「れーいーしーさーん!!あなたという人は!!」
またもダイヤさんの雷が落ちる。しかし、なんとか善子が乗ってくれたのでルビィちゃんを守ることができた。
「次やったらこれが終わっても休憩は無しですわ!!」
叱られながらもルビィちゃんに目配せしてこの場から逃げるように促す。
それに気づいたルビィちゃんも小さくペコリ、と頭を下げて申し訳なさそうにそそくさと部屋を出る。
その後はダイヤさんの厳しい監視のもと延々と問題を解き続けた。
間違えたり、少しでも手を抜いたり怠けたりするとダイヤさんから厳しいお叱りを受けた。
「おい、善子、そこ違うぞ」
「えっ、あっ、本当」
もう突っ込みも気力も無くなったようだ。
「お腹減ったよ～」
「頑張れ千歌、後２０ページだ」
そう千歌を励ますが、正直言って僕ももうそろそろ限界に近い。
それでもなんとか耐えて頑張ってきたが、ついに限界がきた。
「も、もう駄目だぁ～」
とうとう空腹と疲労が限界を迎え、僕は机に突っ伏した。
「玲士さん！」
ダイヤさんの雷が落ちると思って目を瞑ろうとしたその瞬間、突然襖が開いた。
「ダイヤ、ちょっと厳しくしすぎだよ」

「果南さん!?」
　その声に振り向いて見てみると襖の開いた先にはかな姉が立っていた。
「あぁっ、かな姉ぇ！助けて・・、あっ・・！足がぁ・・・！」
　かな姉に飛び付こうとしたが、長く正座させられたせいで足が痺れてその場に倒れこむ。
「玲士、大丈夫!?」
　手を取って助けてくれたかな姉の背中に一瞬羽根が見えたような気がした。あぁ、やっぱりかな姉は地上に降りてきた女神なんじゃないのか。
「どうなってるかと思って来てみたら・・・、休み無しなんていくらなんでもひどいよ」
「このお三方の学力向上のためには少々の荒療治もやむを得ませんわ！」
「それでもやり方ってものがあるでしょ。ほら、玲士、千歌、善子、これ食べて。三人ともお昼食べてないんでしょ？」
　そう言って鞄から取り出したおにぎりを僕たちに手渡す。
「わーい！いただきまーす!!」
　真っ先に千歌がかな姉特製おにぎりを手にとって頬張り、僕と善子もそれに続く。
「「おいし～!!」」
　中には大きめのシャケが入っており、ほんのりとする塩味も相まって、いたってシンプルだが勉強と空腹で疲れた体に染み渡るおいしさだ。
「よかった。急いで作ってきてからちょっと形が変になっちゃったから」
「全然そんな事ないよ！」
「それにしてもこれだけやったなんて、三人ともよく頑張ったね」
　そう言ってかな姉は僕たち三人の頭をよしよし、と優しく撫でてくれる。
　かな姉に撫でられると何とも言えない幸せな気分になる。

「えぇい！ハグッ！」
たまらなくなって、かな姉に抱きつく。
「私も!!」
千歌も僕の後に続く。
抱きつかれた本人は少し驚いた様子だったが、先程同様に優しく頭を撫でてくれる。
「あはは、二人とも甘えん坊だなぁ」
「あれ？善子ちゃんは良いの？」
見ると善子ちゃんが少し離れた所から仲間に加わりたそうにこちらを見ている。
「こ、この孤高の堕天使ヨハネにそのようなものは・・・」
そう言いながらもやはりチラチラこちらを見てくる。
「ははーん、さては善子、恥ずかしいんだなぁ？」
「う、うるさい！」
「ほら、善子ちゃんもこっち来て良いよ」
かな姉は僕と千歌が抱きついてないところをポンポンと叩く。
「うぅ・・・」
かな姉に言われて、徐々に近づいてくる善子ちゃん。
そして、ゆっくりとだが、かな姉に抱きつく。
かな姉は抱きついた僕達三人をさらに抱き締める。
「ふぅ～、魔力が回復する～」
ハグされて今までの疲れが一気に吹き飛んだ気がする。
かな姉には何か人を癒す特別なパワーがあると思う。本当に。
「み・な・さ・ん！休んでいる暇などありませんわ！それに果南さん、これは私が始めたことで、手出しは無用ですわ！」
「だからダイヤのやり方はこの三人には合わないって」
「そこまで言うのなら、果南さんのお手並み、拝見させていただきますわ！」
ビシッっとかな姉を指さすダイヤさん。
「よし、三人とも、休憩したからもうちょっと頑張ろうか」
「「はーい!!」」

こうしてダイヤさんが見守る中、かな姉の指導が始まった。
ダイヤさんの時のような威圧感は無く、自然とペンを持つ手がはかどる。
「それで、どこがわからないの？」
各々解らないところをかな姉に伝える。
「なるほど。まずは玲士から。千歌と善子ちゃんも見ててね。この問題は・・・」
かな姉に教えてもらうと、不思議と今までできなかった問題ができるようになる。
「できた！」
「私も！」
「ヨハネも！」
「どれどれ・・・、おっ！三人とも正解。この調子だよ」
かな姉の優しく親切丁寧な指導により、小一時間ほどで残りのページを終わらせることができた。
「なっ・・・なぜですの!?私が指導していたときよりも問題を解くスピードが断然早いではありませんか!!」
「厳しくするだけじゃなくて、誉めて伸ばすってことも大切だよ。それに玲士達も帰ったらちゃんと復習するんだよ」
「「はーい!!」」
その後は夕方までちょくちょく休憩を挟みながらかな姉とダイヤさんから勉強を教わった。かな姉に言われたせいか、ダイヤさんから先程のような威圧感はなくなり、とてもやりやすかった。
そして千歌と善子は先に帰り、夕日が照らす部屋にかな姉とダイヤさん、僕の三人だけが残った。
「よし、そろそろ帰るよ玲士」
持ってきた教科書を鞄に入れたかな姉が言った。
「そうだね。それじゃあ、ダイヤさんお邪魔しました」
「あっ、玲士さんお待ちになって！」
襖を開けようとしたらダイヤさんが声をかけてきた。
「ダイヤさん？」

「その・・・先程は申し訳ありませんでした・・・。私のやり方が間違っていましたわ・・・」
そう言って頭を下げるダイヤさん。
「いいんですよ。もとはと言えば僕達が悪いんですから。ダイヤさんが謝ることはないです。ダイヤさんは僕達の事を思ってやってくれたんですから」
「いえ、ルビィから聞きました。貴方はルビィを庇ってくれたのですね。それも知らずに私は・・・」
「大丈夫ですよ。あんな優しい妹がいてダイヤさんは幸せ者ですね」
「と、当然ですわ！私の妹ですのよ！」
僕がルビィちゃんを褒めると、いつものダイヤさんに戻る。
「ハグッ！」
その時かな姉は突然ダイヤさんに抱きついた。
「ピギャッ!!か、果南さん!?」
「あはは、ダイヤだけハグしないのはかわいそうかなぁ、って思って。ダイヤもハグして欲しそうな表情だったし」
「べっ、別にそんな事ありませんわ・・・」
そう言いながらほくろを掻くダイヤさん。彼女は隠し事をしていているときは決まってそうするのだ。
「ふふ、かわいいなぁダイヤは」
僕達にやったのと同じようにダイヤさんを撫でるかな姉。
「果南さん！」
よく見ると、ダイヤさんの顔は先程よりも紅くなっている。
「ダイヤさん、顔真っ赤ですよ」
「ゆ、夕日のせいでたまたまそう見えるだけですわ・・・」
そう言いながら目をそらすも、ますます顔を紅くするダイヤさんであった。

お姉ちゃんとお出かけ！

「ふぅ〜、今日の練習はちょっと大変だったね」
「本当に、イベント来週だからみんな気合い入ってたもんね」
　Ａｑｏｕｒｓが出演するイベントが来週の日曜日に迫っているため、今日は一日中練習していた。
　いつもより練習量が多かったこともあって、終わる頃にはみんなはもうクタクタになっていた。かな姉だけはケロっとしていたけどね。
「玲士もお疲れ様。一日手伝ってくれて」
「マネージャーとして当然。今度のは結構大きなイベントだからがんばってね」
　練習の手伝いの他にイベントの申し込みや、相手方と連絡を取ったりするのも僕の大事な仕事だ。
「それとね玲士、明日?出かけない?」
「?? ほぇ?明日?何で?どうして?」
「最近忙しくって玲士と一緒に出かけてないなぁって思って。もし、明日はゆっくり休みたいってことならまた別の機会で良いけど??」
「行く!」
　なんという幸せか。かな姉と一緒にお出かけのお誘いなんて。たとえどんなに疲れていても、かな姉と一緒にお出かけできるとあらば疲れなんてすぐに飛んでしまう。
「いつもみたいに遅く起きちゃダメだからね」
「はーい!」
　こうして喜ばしいことに明日かな姉と一緒にお出かけすることが決定したのであった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

　そしていよいよかな姉とのお出かけ当日。張り切りすぎて僕にしては珍しく早起きした。
　いつもならそれほど気にすることの無い服装や髪型も、今日のために調べておいたので、バッチリ決めている。
　そして時刻は午前１０時、いつもよりおしゃれに着飾ったかな姉と

一緒に沼津の街を歩く。
こんなに綺麗なかな姉を一番近くで見ることができるのも弟ならではの特権だ。
胸にはお揃いのイルカのペンダント。昔、今日みたいに二人で一緒に出掛けたときに買ったもので、僕たち姉弟の絆の印だ。
「それで、今日の予定は？」
「いや、特に当てもないよ」
「かな姉らしや」
結局歩いているうちに目についた映画館に入ることにした。日曜日とあって映画館は多くの人で賑わっていた。
前もって何を見るかなんて決めてなかったので、壁に貼ってあるポスターを見てどれにするか考える。
「えーっと、面白そうなのは?!」

「ハグゥ!!」
「うわっ！かな姉!?」
かな姉が唐突に後ろから抱きついてきた。本当に突然の事なのでビックリして瞬時に状況が理解できない。
やっと落ち着きを取り戻して僕に抱きついているかな姉を見ると、小刻みに震えているのがわかる。
抱きつかれながら後ろを見ると、そこにあったのはかな姉の大の苦手であるホラー映画の宣伝パネルだった。かなり怖いと評判らしい。確かに振り向き様にこんなものが目に入ったら誰だって驚く。
「れ、れ、玲士！あ、あっち行こう！」
かな姉に促され後ろから抱きつかれたまま、パネルが見えなくなるところまで移動する。
それにしても先程から周囲からの視線が痛い。言うまでもなく、かな姉にハグしている／されている瞬間は僕にとって最も幸せな時間である。
しかしながら、大勢の人前でする／されると少々恥ずかしいもの

だ。
「かな姉もう大丈夫だよ」
「ほ、ほんとに？」
僕から離れたかな姉は瞳を潤ませながら上目遣いで僕を見る。そのあまりのかわいさに思わずドキッとしてしまう。
いつもはしっかりしているかな姉の意外な一面を見ることができるのも、弟の特権だ。
「大丈夫だって。それより見たいのは決まった？」
「いや、かな姉が決めてよ」
かな姉はう～ん、と少し考え込んだ後、これっ、とひとつのポスターを指さす。
「やっぱり。かな姉はそれを選ぶと思ってたよ」
「それじゃあ決定。買ってこようか」
そう言って二人でチケット売り場に向かった。

～～～～～～～～～～～～～～

上映が終わったので二人でシアターを出る。
「面白かったね」
「うん、いろいろと評判なだけのことはあったよ」
僕たちが見たのは『孤島の少女と不思議な手紙』
主人公は弟と妹の三人で小さな小島で暮らしている少女。
ある日彼女宛に届いた一通の手紙がきっかけとなって繰り広げる冒険ファンタジーだ。
口コミやネットで大変面白いと評判で実際老若男女問わず多くの人が訪れていた。
「それにしても玲士は大きくなったなぁ」
こちらを見てかな姉がそう言うのは、映画の中で姉弟の成長や絆が描かれていたからであろう。
僕にとってずっと見上げる存在だったかな姉が、いつの間にか僕よりも少し小さくなっていた。人間成長するので当然だが、それでも少

し寂しいものがある。
「小さい頃は何かあると私の後ろに隠れたり、よく抱きついてきたりしてた玲士がこんなにかっこよくなるなんて思わなかったよ」
「えへへ、それはどうも」
かな姉に『かっこいい』と言われて少し照れる。
「小学校の時には泣きながら私の教室まで慰めにもらいに来たこともあったよね」
「うぅ?、かな姉??」
たしかに喧嘩したり、忘れ物した時なんかはかな姉のところに行ってたよ。稀によくあったよ、稀によく。
「ふふ、やっぱり玲士はかわいいなぁ。よ～し！小さい頃のお返し！ハグッ！」
本日二回目のハグを頂く。
小学校低学年くらいの頃は一日に数回はされていたが、最近はハグされるのは稀だ。僕としてもかな姉にハグされるのはすごく嬉しい。

が、場所が悪かった。

ここは家族連れで賑わっている日曜日の映画館。しかもちょうど映画の上映が終わり多くの人がシアターから出てきたところである。そこで人目を憚らず抱き合っている二人の男女。端から見れば恋人以外の何物でもない。多くの人の目が自然とこちらに集まる。
かな姉もそれに気がついたのか瞬時に僕から離れる。
「れ、玲士、行こっか??」
「うん??」
二人で顔を真っ赤にしながらそそくさとその場を立ち去った。

映画館を出た先程の事もあって僕もかな姉も黙ったままだ。その

まましばらくあてもなく歩く。かな姉も先程からこちらをチラチラと見てくるが、僕もなんと声をかけて良いかわからない。
「玲士？お腹？空いてない？」
「うん？そろそろお昼だし??」
ぎこちなく話しあった結果、近くの海鮮丼屋に入った。
「玲士、その？さっきはごめん？、人前でいきなり抱きついちゃったりして??」
「別に良いよ謝らなくって」
そうこうしているうちに、頼んでいた海鮮丼が運ばれてきて、食べ始める。
「ほらっ、玲士」
かな姉が箸で掴んだ海鮮丼の具をこちらに突きだしている。いわゆる『あーん』というやつだ。
「かな姉??」
「ほら、さっきの映画の真似」
確かに、先程の映画でも主人公の少女が弟と妹に同じ事をしているシーンがあったなと思い出す。
こんな無邪気なかな姉を見るのは久しぶりだ。いつもの僕なら飛び付いているだろうが、今日は先程の事もあってそうはいかない。
「い、いいよ。かな姉が食べて」
「ありゃ、玲士がいらないなんて珍しい」
かな姉が箸を持った右手を引っ込める。
うぅ??、ここが家ならば？、他のお客さんがいなければ食べれたのに？。
「本当はほしいんでしょ、はいっ」
どうやらかな姉にはお見通しだったようで、再度サーモンをつかんだ箸を突き出した。
人に見られてるが、ええい！儘よ！
僕は少し身を乗りだし、箸で掴まれているサーモンを食べる。
「あ、ありがと??」
「どういたしまして」

結構恥ずかしかったけど、味はおいしかった。

午後はいろいろな店を廻って、いろんな物を買った。
かな姉曰く僕の服装は単純で面白味がないらしく、洋服屋を何件も廻ってかな姉が選んでくれた。

日が傾きかけていたのでそろそろ帰ろうとバス停に向かう。
ふと振り返ると雑貨店の前でかな姉が足を止めていた。
どうやらショーウィンドーを覗いているようだ。
「かな姉？」
「ああ、ごめん、ちょっとこれ見てて」
かな姉が指差す先にはあるペンダントがあった。
それは形は僕とかな姉が持っているのと同じイルカだが、ペアになっており、合わせるとイルカが手を繋いでいるようになるというものだった。
「昔出掛けたときの事を思いだしちゃって」
「僕も今同じこと考えたよ」
僕もあの日のことはよく覚えてる。
僕が小3位の頃だったかな、僕とかな姉は親に内緒で二人だけで沼津へ出掛けた。家の事で忙しくてなかなか出かけようとしない親へのささやかな反抗。その時に象徴として買ったものが二人が今身に付けているペンダントだ。そして帰ってきてこっぴどく叱られたのも含め、今では良い思い出だ。
改めて売り物のペンダントを見ると、たしかにそれほど高価なものではないので二人で割れば買える額だ。
買おうかどうか確認しようと横を向くとかな姉と目が合った。
どうやら考えてるきとは同じだったみたい。
「買っちゃおうか」
予想していたものと同じかな姉の発言に僕は頷いた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「結構似合ってるね、玲士」
「かな姉の方こそ」
早速二人で先程買ったペンダントを着けてみた。
前のものより少し大きく、夕日が反射しているせいもあってとても綺麗だ。
「そろそろ時間だし行こっか」
かな姉に言われてバス停に向かって歩く。
その時スマホを取り出そうとポケットに手を突っ込むと、入れておいたはずの古いペンダントが無いことに気づく。
「しまった！落としたんだ！」
「まったく⁇、すぐに取りに戻って！」
「うん！かな姉ちょっとここで待ってて！」
言い終わらないうちに駆け出し、目を凝らしながら急いで通った道を戻る。

「良かった！あった！」
幸いにも先程の場所からそう遠くない所にペンダントは落ちていた。拾って手にしっかりと握りしめる。

このペンダントは本当に大切なものだ。昔の思いでの品ということ以上に、
あの約束の印としても⁇⁇
無事にペンダントが見つかったので、急いで待たせているかな姉のところに戻ろうと駆け出す。

しかし、近くまで来た僕の目に入ったのはかな姉と一組の男女が会

話している光景だった。僕は隠れるように様子をうかがう。
遠目から見ても嬉しそうにしているのがよく分かる。しばらく話した後、男の子がかな姉と握手をして、二人は深々と頭を下げて去っていった。
二人が去ったのを見計らって、かな姉のところに戻る。
「お帰り玲士、ペンダントあったの？」
「う、うん、大丈夫だよ??。それよりかな姉、さっきの人は？」
「ああ、中学の頃の同級生とその弟さん。なんでも私のファンなんだって」
「そう？」
かな姉から聞いて納得したのと同時に、僕の心の中に複雑な気持ちが芽生える。それは今までに経験したことの無い言葉には言い表せないようなよく分からない気持ち。
なんだろうこれは??、Ａｑｏｕｒｓが有名になるのは良いことなのに??、かな姉のファンが増えるのは嬉しいはずなのに??、何でこんな気持ちになるんだろう??
そんな考えが悶々と頭の中を駆け巡る。
いつの間にか僕は隣にいるかな姉の手を握っていた。
「玲士？どうかしたの？」
少し驚いたようで、かな姉がこちらを向く。なぜだろう、かな姉の顔を直視できない。僕は目を反らす。
「な、何でもないよ??別に」
無意識に手を握る力が少し強くなる。
「変なの」
沈む夕日に照らされながら、僕たちは帰路についた。

Ｋａｎａｎ，ｓ　ｐｅｒｓｐｅｃｔｉｖｅ

先程から玲士の様子が変だ。私が何か言っても曖昧な返事しかしないし、目も合わせてくれない。
やっぱり気にしてるのかな、お昼の事。それとも別の何か？

まあ、一人で考えても仕方ないし、やっぱり本人に直接聞いてみるしかない。そう思い立ち、夜も遅いが彼の部屋に向かう。
「玲士、入るよ」
「かな姉？」
ノックをして部屋に入ると玲士はベッドに腰掛け本を読んでいた。私はその隣に座る。
「お昼の事気にしてるんだったら本当にごめん、玲士に恥ずかしい思いさせちゃって。あの時はちょっとはしゃいじゃって・・・」
「別に気になんかしてないよ??」
そう言って玲士は目を反らして右手で頭を掻く。昔から何かを隠している時にする彼の癖だ。
「本当に？」
彼の顔を覗きこみ、もう一度聞いてみる。
「本当だって??」
明らかに何か隠しているが、これ以上聞いても答えてくれないだろうからここら辺で手を引くことにした。
「心配事があったら一人で悩まないで私に言うんだよ」
「わかってるよ??」
すると突然玲士は横に倒れ私の膝に頭をのせ、私がいわゆる膝枕をしている状態になる。
「どうしたの急に」
「疲れただけだよ??」
「はいはい。今日もお疲れ様」
そう言いながら、膝の上にある彼の頭を撫でてあげると、いつものようにキュっと体を縮ませる。これも昔から変わってない。
しばらくそうしていると、いつの間にか玲士はすうすう、と寝息をたてていた。
「ありゃ、寝ちゃったよ」
そんな玲士を見つめながら今日の事を振り替える。

いつもらなイベントが近い休みの日は自主練してるけど、今日はたまには気分転換にって鞠莉やダイヤが提案してくれたものだ。
映画の看板に驚いて抱きついた時、玲士の背中がとっても頼もしいく感じられた。昔と違ってやっぱり成長してるんだなぁ。
昔から私の事を一番よく理解してくれる大切なかわいい弟。
いつもありがとう、そしてこれからも便りにしてるよ。
そんな彼を見つめていると、私の意識も次第に遠くなっていった。

松浦姉弟と風邪

「ごめんねかな姉、風邪なんかひいちゃって」
　この日、松浦玲士は珍しく風邪をひいた。昨日の夜からなんか体の調子が変だな、とは思っていたが案の定今朝起きたら熱が出ていた。
　しかも運悪く親は不在で、かな姉はＡｑｏｕｒｓの練習だ。
「本当に一人で大丈夫なの?」
「大丈夫。こんなの薬飲んで寝れば直ぐに良くなるよ」
「それなら良いんだけど⁇何かあったら無理しないですぐに連絡してね。お昼は作り置きしておいたお粥あるからそれ食べて」
「了解、いってらっしゃい」

かな姉を見送った後、もう一度熱を測ってみると、さっきよりも高かった。
かな姉の前では隠していたけど正直に言うと結構キツい。
体がさらに熱くなっていくような気がする。
⁇あれ?風邪ってこんなに辛かったっけ⁇
ベッドの上でそんなことが頭をよぎったが、次第に僕の意識は途絶えていった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

休憩の号令がかかると、辺りが騒がしくなる。
「ふぅ〜喉渇いた〜、玲士君水筒取って〜」
「もう、千歌ちゃん!今日は玲士君風邪でお休みだって言ったでしょ!」
「あっ!ごめん、そうだった⁇」
　梨子ちゃんに指摘されて千歌は思い出したようだったが、私は家で寝ているであろう玲士のことを練習中もずっと頭の片隅で考えてい

た。
「まったく、みなさんは少し玲士さんに頼りすぎですわ。聞いた話では最近は後片付けも玲士さんに任せきりだというではないですか。今日に限らずこれからは最低限のことは自分でやるように！」
ダイヤがそう言うと、はーい、と他の皆が答える。
「それと果南さん、全体的に少しステップが遅れていましたわよ」
「えっ、そうだった？ごめん」
「あら、ダンスに関してはいつもｐｅｒｆｅｃｔな果南にしては珍しいわね」
自分では自覚が無かったが、やはり玲士の事を考えていたせいだろうか。
「もしかして玲士さんのことではなくって？」
「うん、ちょっとね??」
さっきからなんだか嫌な予感がする。朝家を出る時も無理して大丈夫そうに振る舞ってた感じがした。
「果南ちゃん！」
呼ばれて振り向くと、声の主である千歌が必死そうな表情をしている。
「お願い！近くで玲士君を看ててあげて！もし玲士君に何かあったら私??」
「千歌っちもそう言っていることだし、今日は玲士のところに居てあげたら？」
そう千歌や鞠莉に促されて迷っていた私もようやく決心がついた。
「うん、わかった。みんなごめんね」
私そう言って私は屋上を後にし、急いでフェリー乗り場に向かったのだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

僕は今、何処にいるのだろう？

辺りには吸い込まれそうな闇が広がる音も光も何もない暗い、暗い空間。

誰かいないかと辺りを見回しても誰もいない。

その時突然地面の感覚がなくなり、ドボンと大きな音がして僕の体は水の中に落ちる。

暗く冷たい水の中、体がどんどん沈んでいく。

息が苦しい。

子供の頃、海で溺れた時の記憶がよみがえる。

もがいてももがいてもどんどん体は沈んでいくあの感覚。

昔と違って今は周りに誰もいない。

だから誰も助けてくれない。

嫌だ！嫌だ！怖い！誰か助けて！

最後の力を振り絞り、上に手を伸ばす。

すると、誰かが僕の手を掴んだ。

体がぐんぐん引き揚げられていく感じがする。

あぁ、助かった??

「??し！玲士！玲士！」

～～～～～～～～～～～～

連絡船を降り、急いで家へ向かい玲士の部屋に入ると、私の不安は的中していた。
ベッドで寝ている玲士は、息づかいが荒く、かなりうなされている。
これはかなりまずい状態だ。私はベッドに駆け寄って玲士の手を握り、起こそうと揺すりながら声をかける。
「玲士!・玲士!・玲士!」

私の声が届いたのか、玲士の瞼が徐々に開いていく。

「??かな姉?、うぅ!」
目が覚めた玲士に思いっきり抱きつかれる。今までにないくらいの強い力だ。よく見ると涙を流している。よほど怖い夢を見ていたのだろう。
「よしよし、怖かったね。怖かったね。もう大丈夫だよ」
そう言いながら頭を撫でて玲士を落ち着かせる。
しばらくすると玲士は私から離れて顔をあげた。
火照った肌と眠りから覚めたばかりのトロンとした目。
ちょっとかわいいと思ってしまう。
かなり汗をかいていたのでタオルで汗を拭いてあげる。
「はい、これ飲んで」
持っていたスポーツドリンクが入ったペットボトルを渡すと、喉が乾いていたのか一気に半分ほど飲み干した。
「ありがとうかな姉。ごめんね、わざわざ戻ってきてもらって、それに??」
「こら、そうやってなんでもすぐに謝らないの!・みんなも心配してるから、今は治すことに専念して」
そう言うと玲士はうん、と小さく頷いた。
「お昼までまだ時間あるからまだ寝てていいよ。今度は私がついてるから安心して」

「??ありがとうかな姉、おやすみ」
「はい、おやすみ」
しばらく経つと、玲士は寝息をたてた。先程とは違って穏やかな寝顔だ。

玲士を寝かしつけた後、何をしようかと考えていると何やら表が騒がしい。
「あっ！果南ちゃん！」
外に出てみると千歌を先頭に、Ａｑｏｕｒｓのみんなが勢揃いしていた。それに全員手に何かを持っている。
「どうしたの？みんな揃って？」
「玲士さんのお見舞いに来たのですわ。私は大勢で押しかけるとご迷惑だと言ったのですが、みなさんがどうしてもと聞かなくて」
申し訳なさそうにダイヤが言う。

「いつも玲士にお世話になってるから当然デース！みんなでお見舞いの品を持ってきたのよ！マリーはこれ！とってもｒｅｆｒｅｓｈできるわよ！」
そう言って見せてきたのはおそらく外国製であろう紅茶の茶葉。起きたら玲士に飲ませてあげよっと。
「私はこれを。風邪の時は喉に通りやすいものが良いでしょうから」
そう言って持ってきたのはダイヤの好物である抹茶味のプリンだった。
「ありがとう、でもこれってダイヤが好きなやつなんじゃないの？」
「練習が終わった後に食べようと思っていたのですが、玲士さんに食べてもらった方が良いですわ」
「ルビィはリンゴを持ってきました！玲士さんが食べやすいようにウサギさんの形にしてきたの！」
「マルは玲士さんが退屈しないように本を持ってきたずら！短編だからとっても読みやすいずら」

「ヨハネはこれよ！我が魔力が込められたこれさえあれば、このヨハネが張り巡した結界の力と共に邪気からリトルデーモンを守るわ！」
善子ちゃんが差し出したのは、いろんな飾りが付いたストラップ。これで玲士の悪夢も良くなる??のかな？
「千歌はこのミカン！ビタミンCパワーがあれば風邪なんてすぐに治っちゃうよ！」
千歌から受け取ったミカンを見るとどれも色が濃く、皮のきめも細かい。ただ持ってきたんじゃなくってちゃんと選んできたんだろうと推察できた。
「私はアイスを買ってきたの。これ、玲士君が好きだったら良いんだけど??」
そう言って見せてきたアイスはまさに玲士の好きなものだった。梨子ちゃんって玲士のことよく見てるんだな。
「私はこれっ！曜ちゃん特製の船乗りカレー！それと??これ！玲士君とっても喜ぶと思うよ！」
そう言ってカレーが入ったタッパーと、もうひとつ何かが入った紙袋を手渡した。

～～～

その時、部屋のドアが開く。目をやると僕の目に入ってきたのは、

ナース服を身に纏ったかな姉だった。

「玲士、起きてたんだ。熱はどう？」

「あぁ、かな姉。どうやら僕はまだ寝てなきゃダメみたいらしい。だって幻覚が見えるんだもん」

「えっ！幻覚!?大丈夫!?」

「うん、かな姉がナース服着て見えるもん」

「びっくりした～、それは幻覚じゃないよ」

「ほぇ？」

かな姉に言われて目をこすったり、耳を引っ張ってみてもそのままなのでどうやら本当らしい。よく見ると以前曜ちゃんの家で着ていたときのと同じようのものだ。

「玲士が喜ぶからって曜が持ってきたんだけど??」

でかしたぞ曜。後でなんか奢ってあげようかな。

ちょうどその時僕のお腹が鳴った。

「ほら、お昼まだ食べてないんでしょ。お粥暖めたから食べて」

時計を見ると1時をとっくに過ぎていた。

かな姉に着いていくと言った通りにお粥は暖められており、それを見てますますお腹が減ってきた。

「いただきます」

一口食べただけで口の中に味が広がる、風邪をひいた体に染み渡る味だ。

いっそのことダイビングショップに食堂を併設したらどうであろうか？そうしたらお客さんも??

いや、駄目だ！申し訳ないけどかな姉の料理をほぼ独占して食べられるなんていう特権を手放すのは惜しいもんね。

玲士、と呼ばれて顔をあげ目の前のかな姉を見るとお粥をスプーンで掬って僕の前につき出す。
僕はテーブルから少し身をのりだし、そのスプーンの先端にのったお粥を食べる。
今回は前みたいに大勢の人がいるわけでもなく、ここに居るのは僕とかな姉の二人きり。だからなんの遠慮も要らないのだ。
「どう？美味しい？」
自然な笑顔で聞いてくるかな姉を見て、あぁ、やっぱりかな姉の弟でよかった、そう心から感じる。
「うん、すごく美味しいよ」
かな姉に食べさせてもらうと、自分で食べたときよりいっそう美味しく感じる。これはいったいどういうことであろうか？詳しく調べる必要がある。
「かな姉もう一回！」
「ダメ、一回きり」
「そんなぁ～」
もう一度してもらえることはできなかったが、きっとかな姉の優しさの味といったところだろう。これも弟の特権！
お粥を食べ終えると、特にやることがなくなった。先程たっぷり寝たので寝ようにも寝られない。
「それにしてもこんなにお見舞い貰ってなんかみんなに悪いなぁ」
「それぐらいみんながいつも感謝してるってことだよ。それにしても玲士が風邪をひくなんて久しぶりだね」
「たしかに。昔はよくひいてたけど、その時はいつもかな姉に看病されてたね」
「ふふっ、そうだったっけ」
そう言ってかな姉は僕を撫でてくれる。
こんなことなら風邪をひくのも悪くないな、そんなことを思いながら僕はかな姉と一緒にゆっくりと午後を過ごすのであった。

かな姉の怖いもの

「ここでこうステップ、??そしてここでターン！どうかな？」
Ａｑｏｕｒｓの振り付け担当であるかな姉は、今日もアイデアノートに書いた事を実演してみせる。なんとも見事だ素晴らしい。
かな姉はダンスに関してはＡｑｏｕｒｓの中で一番だと思っている。
かな姉はすごい、やっぱりすごい。
「やっぱり果南ちゃんは格好いいずら～！」
「やはりこのヨハネがリトルデーモンにふさわしいと見込んだだけのことはあるわ！」
「何を言うんだ二人とも、こんなの当然さ！だってかな姉だもん！」
善子ちゃんが言うリトルデーモンにふさわしいかは置いておいて、二人が誉めた通りかな姉はカッコいい。小さい頃からいつも僕を守ってくれた。
ファンの間ではＡｑｏｕｒｓの中でも一二を争うカッコよさだと評判らしい。この前も沼津の駅前を歩いていたら女子高生にサインを求められたと言っていた。
こんなに多くの魅力を持つかな姉は僕の自慢の姉だ。
「あはは、二人とも大袈裟だなぁ。でも、ありがと」
そう言ってかな姉は二人の頭を撫でる。
「じょっ、浄化されてしまいそうだわ」
「果南ちゃんに撫でられると落ち着くずら～」
こういう周りを包み込むような自然な優しさも、かな姉が皆から好かれる理由の一つだ。
「あ～ら、そんな　ｃｏｏｌ　な果南にも　ｗｅｅｋ　ｐｏｉｎｔがあるのよ！」
すると僕の後ろからひょっこり現れた鞠莉姉が割って入ってきた。そしてなぜか僕に後ろから抱きつく。
「ちょっ、鞠莉姉、いきなり抱きつかないでください」
「いいじゃないの、別に減るもんじゃないんだし♪　ハグハグ～♪」

「うう??、かな姉??」
　しばらくの間抱きつかれた後、僕は一瞬の隙をついて逃げ出すことに成功した。
「たしかに、果南ちゃんの弱点なんて見たこともないずら」
　それにしてもかな姉の弱点とは一体なんのことであろうか？　弟の僕でもピンとくるものがない。
「こら鞠莉、変なこと言わないで」
「あら、だって本当の事じゃないの。そうやって強がっちゃｎｏｎｏｎよ！」
「かな姉の弱点？何のことです？」
「あら玲士、あなたもよ～く知ってるはずよ！」
　僕もよく知ってる？鞠莉姉に言われて再度考えるが見当がつかない。
「だから私にそんな弱点なんてないってば」
　当の本人は腕を組んで少し怒った様子を見せる。
「隠し事はよくないわ、リトルデーモン」
「よ、善子ちゃん!?」
　予想してなかったのか、善子ちゃんに詰め寄られてかな姉はたじろぐ。
「来るべき究極（アルティメット）なる神々の黄昏（ラグナロク）に向けてリトルデーモン達を預かる堕天使ヨハネが知っておく必要があるわ！さぁ、教えなさい！リトルデーモン果南!!」
　それにしても、かな姉は善子ちゃんには弱い気がするのは僕の気のせいだろうか？　たしかこの前も同じように迫られてゴスロリ風衣装を着せられていた。もちろんバッチリ写真に納めて保存済みだ。でかしたぞ善子。
　もしかして鞠莉姉が言っているのはこの事なのだろうか？
　いやそんなはずはないだろう。
「たしかにマルもちょっと興味あるずら」
「えぇ!?は、花丸ちゃんまで」
「ほ～ら、かわいい後輩もそう言ってることだし、認めちゃいなさい

！」
　回りを囲まれて困惑するかな姉に、鞠莉姉はさらに詰め寄る。
「ええっ、そう言われても本当に思い当たるものがないよ……」
「じゃあ、マリーが教えてあげるわ！今度の土曜日にホテルに集合デース!!」

～～～

「ふぇっ!?」
突然耳元で予想もしなかったことを囁かれ、調子を狂わされてしまう。
「べ、別にそんな事思ってるわけないじゃないですか、第一僕は??」
「あら？　ホントかしら？」
その瞬間、鞠莉姉は僕の耳にふうっ、と息を吹き掛ける。
「ひゃぁ！」
しまった！　と思ったときにはもう遅かった。一瞬にして身体中にしびれるような感覚が走り、思わず変な声も出てしまった。
「やっぱり玲士も果南と同じで耳がｗｅｅｋ　ｐｏｉｎｔなのね♪
あぁん、やっぱり玲士はかわいいわ♪」
そう言ってなれた手つきで僕の頭を撫でる。
「ま、鞠莉姉ぇ??」
「ついでに顎の下もナデナデ～♪」
「にゃぅ～」
ダメだ、体から力が抜けてしまい、立ってるのもやっとな状態だ。
昔からなのだが、僕はどうしても鞠莉姉に勝てない。いつもこうやって丸め込まれてしまうのだ。
「いとも簡単に解きほぐされたわね」
「まるでペットみたいずら」
「うう??」
なんとも屈辱的な事を言われたが残念ながら認めるしかない。
しばらく鞠莉姉に弄ばれた後、体勢を立て直しかな姉の背中に逃げ帰った。
「ルールはとってもｅａｓｙ、これを見て果南が最後まで泣かなかったら果南の勝ち、も～し少しでも泣いちゃったらマリーの勝ち」
「そ、そんなことして
なんのメリットがあるんですか。第一かな姉がそんな勝負受けるわけ……」
当然断るだろうとかな姉の方を見る。
「いいよその勝負、受けてたとうじゃない」

「かな姉!?」
「べ、別に、ここ怖くなんかないからね！こんなのぜ、全然平気だし！」
　そうは言うものの目が泳いでいたり、落ち着きのないしぐさを見せていることからものすごく動揺していることがわかる。
「そ、その気になれば一人で見れるから！」
「あら、それなら果南には特別に個室を用意するわ♪」
「こ、個室!?」
　さらに顔と声がひきつる。

「かな姉無理しないで、ここは大人しく……」
「だ、大丈夫だよ！　映画なんて、ぜ、全部作り物なんだし。だから怖くなんかないからね！」
「でも……」
「いいの！私が勝負を受るって言ったんだし！」
　いつもは女神のように優しいかな姉だが、こうやって時に頑固で意地っ張りな一面を見せる。こうなってしまうと僕にもどうしようもできないのだ。
「花丸ちゃんと善子ちゃんはお化けとかって怖くないの？」
　話が急に進みすぎて若干ついていけてない二人に大丈夫か聞いてみる。
「たしかにオラも昔は怖がってたけど、色んな本を読んでいる内に幽霊もただ人を怖がらせるために現れるんじゃなくて、何か伝えたいことがあるからこの世に現れるんだな、って思ったずら。だから無条件に怖がるんじゃなくてまずは話を聞いてあげて、
　そうすれば安心して成仏できると思うずら」
「す、凄いね……」
　さすが文学少女でお寺の娘なだけのこともある。ここまで深く考えているとは驚いた。
「善子ちゃんは？」

「ま、魔界を見てきたヨハネにとって、こ、このような下界の作り物など、恐ろしくもなんともないわ！」
しかし善子ちゃんもかな姉と同様に目が泳いでる。
「あれ～そういえば幼稚園のころ、お化けの話をするといっつも怖がって隠れてた子がいたような～」
善子ちゃんの方を見て言っていることから、どうやら彼女のことようだ。
「う、うるさい！堕天使に怖いものなんかないんだからね！」
どうやら善子ちゃんもかな姉と同じみたいだ。
「じゃあそろそろ始めるわよ」
「かな姉本当に大丈夫？」
「だ、大丈夫だよ！映画なんて、ぜ、全部作り物なんだし」
「寝られなくなっても知らないわよ！　みんな準備はいいわね、Ｌｅｔ，ｓ　ｓｔａｒｔ！」
鞠莉姉がリモコンの再生し、いよいよ映画の上映が始まった。
作品は外国製のホラー映画で、後々から考えるとずいぶんとベタなシーンが多いようだが、それでも怖い。
「あーあー、そんな空き家に入るなよ」
「懐中電灯の電池ぐらい代えておきなさいよ！」

鞠莉姉は映画よりもこちらを見てニヤニヤいる。
花丸ちゃんはどうかと様子を見てみると、怖がる様子もなく美味しそうにポップコーンを食べている。
よく食べるなぁ、と思い油断し画面に目を向けると運悪くちょうどお化けが出てきたところだ。
驚いてビクッと体を震わせた次の瞬間、いきなりからだに衝撃が走る。
「ひいっ！」
「ハグゥ！」
左にいるかな姉と右にいる善子ちゃんが驚いて僕に抱きついてきたのだ。いつもならかな姉に抱きつかれるのは嬉しいが、今回ばかり

は心臓が止まるかと思った。
「あらあら玲士ったら、両手にｆｌｏｗｅｒね」
「絶対寿命が縮みましたよ??」
その後どんどん話が進んでいき。いよいよ話の山場の一番怖いシーンに入った。
かな姉も怯えているのか先程より僕に抱きつく力が強くなる。顔は僕のかたに埋めていて見えないが、今にも泣きそうなのだろう。
「大丈夫、僕がいるから安心して。もう少しの辛抱だから」
そう耳元で囁き、抱きついている手を握る。そして、映画が終わるまでその手を離さなかった。

「ふぅ～、面白かったわ～」
「ポップコーンおいしかったずら～！」
「ほらかな姉、映画は終わったからもう大丈夫だよ。顔あげて」
「うん……」
皆が注目する中、かな姉は顔をあげる。

その瞳は濡れておらず、ずっと顔を埋めていた僕の肩にもその跡はついていない。
「あら、果南も成長したわね。マリーの敗けを認めるわ」
「だって、よかったねかな姉」
かな姉は何も言わずにウンウンと頷くだけだ。本当によく頑張ったと思う。
「それにしても善子も怖がりなんて……あら？　果南、善子どうしてそんな顔してるの？」
かな姉も善子ちゃんも、険しい表情で鞠莉姉に迫っている。理由は言うまでもないだろう。
「Ｏｈ、こ、これはちょーっとピンチみたいね……。玲士ｈｅｌｐ……」
「嫌です」

「ほら！さっき撮った二人の写真あげるから！」
「「まぁ～りぃ～!!!!」」
「し、ｓｅｅ　ｙｏｕ！」
「「まぁてぇー!!」」
　鞠莉姉は部屋から逃げ出して、かな姉と善子ちゃんはその後を追いかける。
「まったく……、三人とも元気なんだから……」
「あっ、玲士さん」
　僕も部屋からで抵抗とすると花丸ちゃんに呼び止められた。
　そして優しくゆっくりと背中をさすれる。
「玲士さんもよく頑張ったずら」
「あ、ありがとう……」
「早く三人を追いかけるずら。あの調子だと鞠莉ちゃんが何されちゃうかわからないし……」
「あはは……」

～～～

(??なんだあれ?)
そしてそれはゆっくりとこちらに近づいてくる。
(もしかして??)
そう考えた途端に急に怖くなり、頭から毛布と掛け布団のなかに隠れるようにくるまり、寝ようとする。
しかし皮肉なことに、頭の中で寝よう寝ようと意識すればするほど頭の中に恐しいイメージが浮かんでしまう。
(眠れ眠れ眠れ眠れ眠れ)
強く目を瞑り念じるが、体の震えが止まらない。
そして「何か」の気配は徐々に近づいてきて、ついに僕のベッドのすぐ脇までやって来た。
僕は布団の中で息を殺して恐怖に耐える。体の震えも一層強くなる。
そしてついに「何か」は僕がくるまっている布団に手をかけた。
「ひゃぁう?!!」
「ハグゥ!?!」
僕はとうとう恐怖に耐えかねて思わず変な声を出してとび起きてしまった。
するとその「何か」も叫び声を出してベッドの前から逃げ去った。
え??「ハグゥ」??
僕は恐る恐る移動して机の上のスタンドをつける。
「ひゃっ!」
灯りが着いた瞬間に小さな叫び声がした。
方を見てみると、薄明かりの中に照らし出されたのは部屋の隅でイルカのぬいぐるみを抱き締めながら体を震わせているかな姉であった。
よく見ると今にも泣きそうな顔だ。
「か、かな姉!?!?」
「れ、玲士!?おっ、起きてたんだったら言ってよ!!」
「か、かな姉だってどうしてこんな夜中に??」
途中まで言ったところでかな姉が部屋に来た意味がわかった。か

な姉も僕も同じで映画のことを思い出して怖かったのだろう。
　昔は僕の方が一人で眠れなくなってかな姉の所に行っていたが、まさかそれが逆の立場になるとは驚いた。
「やっぱり、鞠莉姉の言った通りになったじゃないか、一人で眠れなくなるよって。何であんなに無理して強がったりするのさ」
「だって、鞠莉があんなに言うから??」
　かな姉は恥ずかしそうに僕から目をそらす。
「まったく??、これからは無理に強がったりしないでよ」
「はーい」
　かな姉は少し拗ねた様子で答える。それもかわいい。
「それで、どうするの？」
「ええと……、このまま玲士のところで寝てもいい？」
「えっ!?!? で、でも一緒だと狭いし??」
　いつもなら飛び上がって喜ぶことだが、なんだか急に恥ずかしくなってそう答えてしまう。
「昔いっつも私の布団に潜り込んでたのはどこの誰かなん？」
「僕です」
　この話を持ち出されると僕も弱い。
　だって仕方ないじゃないか、かな姉の布団気持ちいいんだもん。
「それにしても本当によく潜り込まれたなぁ。朝になってビックリしたんだから」
　そう言ってかな姉はベットの上に寝そべり、僕もそれに続く。
　思い出してみるとかな姉と一緒に寝るなんて久しぶりだ。
「ふふっ、玲士は暖かいなぁ、ハグッ！」
「ふにゃぁ！」
　かな姉にハグされると何とも言えない素晴らしい香りが鼻孔をくすぐり、この上なく暖かな気分になる。
「玲士、今日はありがとね。頼もしかったよ」
「か、かな姉のためなら当然だよ……」
　その柔らかい声に、匂いと眠気が合わさって言い様のない心地よさに包まれる。ああ??体がとろけてしまいそうだ。

「おやすみかな姉」
「ふふっ、おやすみ」
その声を聞いて、これ以上に内幸福感に包まれながら僕は眠りについたのであった。

玲士くんが寝そべりにはまって果南ちゃんが嫉妬する話

最近、玲士がおかしくなった。

「かわいいかわいい！みんなかわいいよ！ナデナデ！」

「玲士、ご飯の時間・・・って、またやってる・・・」

お昼ご飯ができたので呼びに部屋に入ると、玲士がまたベッドの上でぬいぐるみと遊んでいたのだ。

しかもただのぬいぐるみではない。Ａｑｏｕｒｓメンバーをかたどったの寝そべりぬいぐるみだ。それもかなり大きめの。

これはもともとＡｑｏｕｒｓの知名度アップ作戦の一環として地元企業とのタイアップで作られたものなのだが、どうも玲士はえらく気に入ったらしく、ここの所毎日こうやって寝そべりぬいぐるみと遊んでるのだ。

「かわいいかわいい！」

「こら玲士！」

「ぴゃぁ！ってかな姉、どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ。まったくいつまでも遊んでるんだから・・・」

「あのねかな姉！僕お話してたの！」

「お、おはなし？ど、どんな？」

「みんながかわいいって話！」

完全に幼児退行している。

確か玲士は最近よく疲れたと言っていた。もしかしてそのせいなのだろうか？

「だってみんなかわいいんだよ!!梨子ちゃんもおすまし顔でもちもちしてて口もキュッって感じになってて、曜ちゃんは目とか眉毛がそっくりだし、善子ちゃんなんか三角の口と釣り目とお団子でとってもかわいいし!!」

普段はかわいい玲士だが今回だけは違う。怖い。自分の弟に対して恐怖に似たような感情を感じるのはこれで初めてである。
「ルビィちゃんはツインテールとか顔とかとってもうゆかわ！だし、花丸ちゃんは口開けておなかすかせてそうな顔してるし、千歌なんかいかにも千歌っぽい顔してるじゃん！」
「そ、そうだね・・・」
「ダイヤさんのはほくろが全部再現されてるし、鞠莉姉のなんか見てよ！このたれ目と波線の口!!髪型の編み込みとかわっかも全部再現されててすごいよ！しかもみんなとてももちもちふわふわ！かわいいかわいい！かわいいよ！」
「私のは？」
気になっていたので私の評価も聞いてみた。
「かな姉のなんて一番だよ!!みんなの中で一番もちもちしてるし、顔もとってもかわいいし、ポニーテールもふわふわして楽しいしなんたってかな姉と同じ匂いがするんだもん！」
そう嬉しそうに語る玲士を見てるとなんだか心の中にもやもやとしたものが出てきた。本当の私はここにいるのに・・・
「寝そべりぬいぐるみばっかりかまって・・・私もかまってよ・・・」

「よーし、じゃあ、ハグ！ハグ！ハグ！」
私が言うと玲士が瞬時にこちらへやってきて私に思いっきり抱き着いた。
「むー、やったなぁ！私もハグハグ！」
私もお返しに玲士を思いっきり抱きしめる。
「やっぱりかな姉が一番いいや」
「でしょ」
こうして私たちは昼食が冷めるのも気にせずハグをするのだった。

〜〜〜

姉たちの休暇計画　【松浦玲士の休日　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ】

「??ということなので、明日から三日間、練習はお休みですわ」
「えー!そんなぁ～」
　ダイヤの言葉に声をあげてわかりやすくうなだれる千歌。明日からは三連休。三日間みんなと練習できないとなると千歌の気持ちもわからなくはないが、こればっかりは仕方がない。まあ、自主練すれば良い話なんだけど。
「そう言われましても、屋上の設備の整備点検があるから、仕方ありませんわ」
「じゃあ、体育館かグラウンドは?そこなら屋上より広いし??」
「私もそう思ったのですが、確認したところもうすでに他の部活から利用申請が出ていますので、使えませんわ。????あら、玲士さん?聞いてますの?」
　私も玲士の方を見ると、手帳にメモをする手が止まっており、まっすぐ手元を見つめている。
　目は開いているが心ここに有らずといったような状況だ。
　ダイヤに呼ばれると、ビクッと身体を震わせる。
「えっ、あっ、はい。明日も練習じゃないんですか?」
「玲士さん、あなたは何を聞いていたのですか。今さっき連休中はお休みと言ったではありませんか!」
「あっ、すいません!」
　玲士は慌てた様子でメモを取る。
「もう一度言いますが、次の練習は連休明けからで、連休中は学校に来ても練習はできないのでくれぐれも間違えたりしないように!」
　はーい、と私達は返事をし、その場は解散となった。

～～～～～～～

「ねえ果南、もしかして玲士何かあったの？」
学校を出てバス停に向かう途中、鞠莉が小声で聞いてきた。当の本人は手前で千歌達と話している。
「いや、私が知る限りでは特に何も。どうかしたの？」
「ん～、ちょっとさっきのことが気になってて」
実を言うと私も少し気になっていた。いつも誰かが言ったことをすかさず詳細にメモを取り、後でまとめている玲士がボーッとして話を聞いていないなんて変だなと思った。
何か悩みごとでもあるのだろうか？
「もしかして玲士さんはお疲れなのではありませんか？」
隣にいたダイヤが言う。
「う～ん、最近は土日もお客さんが多くてお店の手伝い忙しいし、疲れが溜まってるのかなぁ？」
最近うちのダイビングショップが何かで紹介されたらしく一気にお客さんが増えた。潜る私だけでなく、玲士も予約の電話の応対や、道具の準備とかで忙しい。
時折心配して声をかけるが、本人は「大丈夫」としか答えない。
「学校でもいろいろと手伝いとか頑張ってるみたいだし、いろいろと大変みたいね」
「なんで鞠莉がそんなこと知ってるのさ」
「ふっふっふっ、理事長の情報力は伊達じゃないわよ～」
鞠莉は得意そうに腕を組む。
「玲士さんは昔から頼まれたら何でも引き受けてしまうような人ですから、そのために無理をしているのかもしれませんわ」
「う～ん、たしかにねぇ??」
ダイヤが言ったとおり、玲士は頼まれたら断るということをあまりやらない。そのせいで見ていて大変そうだなと思うこともあった。
「そうだ！良いこと思いついたわ！」
そう言うと鞠莉は私とダイヤを引き寄せて耳打ちをした。

「????って考えなんだけど、どうかしら？」
「良いんじゃない？連休中は予定無いって玲士も言ってたし。ダイヤはどう？」
「私も特に異論はありませんわ」
「じゃあ決定ね！明日が待ちきれないわ！」
「こら鞠莉さん、はしゃぎすぎですわよ！」

そんな二人の声を聞きつつ、一体どんな反応をするのだろうと考えながら前を歩いている玲士を見つめるのだった。

～～～

「玲士～、Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ♪」
　リビングでは練習に行っているはずのかな姉が食器を片付けており、何故か鞠莉姉もいた。
「早くご飯食べて。そうしないと片付けられないから」
「食べないんだったらマリーが代わりに食べちゃうわよ？」
　特に急いでいる様子もなくゆっくりとしている二人を見て訳がわからなくなる。
「えっ？あれっ？練習は？」

「まったく??、連休中は休みだって昨日言ってたでしょ」
　かな姉は呆れたような顔でそう答えた。
「あっ、そうだった??」
　かな姉に言われて、昨日ダイヤさんに言われたことを思い出す。
　なんか最近忘れっぽいな。
「それより早くご飯食べて」
「あぁ、ごめん」
　かな姉に促されて急いで椅子に座り朝食をとる。
　それにしてもかな姉特製の朝食はおいしい。本当においしい。
　その朝食を食べ終えて食器を片付け歯を磨く。
「あれっ？そういえばなんで鞠莉姉がいるの？」

「ふっふっふっ、よくぞ聞いてくれマーシタ！玲士、今日はマリーと一緒に、と～っても楽しいことしましょ？」
　鞠莉姉は僕を見てニヤリと笑う。
　長い付き合いだからわかる。この顔は何か良からぬことを企んでる時の顔だ。
　そういうことなので、僕はとっさにかな姉の後ろに隠れ、横から顔を出す。
「なんで隠れちゃうのよ」
「防衛本能ですよ。過去にトラウマ作られましたからね」

実際僕が小学生の頃にこの表情を見た時は、ひどい目に遭っている。
あの日の事は忘れもしない。
学校が終わった後、鞠莉姉に面白いことしよう、とかなんとか言われて呼び出された。
それで鞠莉姉の部屋まで連れていかれると僕に似合いそうだからという理由でまるで着せ替え人形のようにウィッグや女の子用の服を着せられた。
あれは僕のトラウマなんだぞ！

「あぁん、酷いわ！マリーはまだ何も言ってないのに！」
鞠莉姉はわざとらしく言ってみせるが、僕はそんな手にはのらない。
「こら玲士、ちゃんと鞠莉の話を聞いて」
「うぅ??かな姉??」
かな姉が言うならしかたないので、しぶしぶ鞠莉姉の話を聞くことにした。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ果南！それじゃあ早速だけど、マリーについていらっしゃーい!!」
「えっ、ちょっと鞠莉姉!?」
そう言うと鞠莉姉に手を引っぱっていく。
こうして松浦玲士の三連休は幕を開けたのであった。

鞠莉お姉ちゃんの想い　【松浦玲士の休日　Ｄａｙ１】

言われるがまま鞠莉姉に連れられて、やって来たのはホテルオハラ。いつも思うが本当に豪華だ。そのまま最上階にある鞠莉姉の部屋に通される。入ったのは久しぶりだが、やはり以前と同様とても良い香りがする。

「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｍｙ　ｈｏｍｅ！」

「で、何の用です？」

「ちょーっと待ってて♪」

僕が聞くと鞠莉姉は背後にある大きなクローゼットから一着の服を取り出す。

ピンクと白を基調としたふりふりヒラヒラのついたいかにも女の子らしい服。

このデザインには見覚えがある。

そう、以前僕が着せられたあの忌々しい服なのである。

鞠莉姉もそれをわかっているのであるらしく、ニヤニヤしている。

「い、嫌です！・嫌です！・絶対嫌です！」

僕はとっさに身構える。

「良いじゃな～い、絶対似合うわよ！・そ・れ・に！・果南は了解済みよ！」

「えっ
??????」

僕はその言葉を聞いてその場でガックリと膝をつき、頭が真っ白になる。

かな姉が了解した？・僕があんなに嫌がってたあの服を着るのを？・

何がなんだかわからなくなる。

もしかしてかな姉はあのことを忘れていたのであろうか？

いやそんなはずはない。僕が何度も言っていたからかな姉が知らないはずがない。

あぁ、とうとう僕はかな姉に見捨てられたのか。

小さいころからかな姉はどんな時も僕を慈しみ、助け、守ってくれた。

しかし、そのかな姉がとうとう僕を見放したのだ。

今考えれば、僕はかな姉にいろいろと無理をさせていたのかもしれない。本当は嫌な頼みごとも、その女神のような優しさで無理してやっていたのかもしれない。

そうだとしたら僕はなんて悪い弟なんだ。

きっとこれはその報いだ、そうに違いない。甘んじて受け入れよう。

かな姉の思し召しとあらば、この松浦玲士は例え火の中水の中、どのような恥辱にも??

「Ｉｔ，ｓ　ｊｏｋｅ！も～う玲士ったら本気にしちゃって～♪」

「????え？」

ジョークってことは????えっ、ウソ？

言葉の意味を理解した瞬間、一気に体の力が抜ける。

見上げると鞠莉姉はニヤニヤしている。

あぁ、またしても鞠莉姉にしてやられた。

僕はやっとのことで立ち上がり、鞠莉姉の方を向く。

「で？本当は何なんです？用が無いんなら帰りますよ」

「も～う玲士ったら、そんな顔しないで。せっかくのかわいい顔が台無しよ！本当はと～っても良いことなんだから、安心して！」

とっても楽しいこと？一体なんだろうか？

あと、女の子からかわいいって言われると男と少し複雑な気分になる。

あっ、かな姉に言われるのは別だぞ。かな姉に誉められると本当に幸せだ。

「今日は一日ここに泊まってもらいマース！ちなみに、これは果南も了解済みよ！」

変なことじゃなくってよかったと思うと同時に、意外なことだったので少し驚く。

「えっ？今日？ここに？良いんですか？」

「玲士のためならＮｏ　ｐｒｏｂｌｅｍデース！あなたに楽しんでもらえるようにとっておきのｐｌａｎを用意したわ！」

「あっ、ありがとうございます」

「今日はマリーをお姉ちゃんと思いなさい！果南の代わりにかわいがってあげるわ！」

かな姉は唯一無二で誰にも代わりなんかできない、と思ったがせっ

かく僕のために色々してくれた鞠莉姉に悪いので心の中に止めておいた。
「そ・れ・と、今日だけ玲士のこと『れーちゃん』、って呼ばせて」
れーちゃん、というのは僕が昔一時期鞠莉姉からそう呼ばれていた。
なぜ急にそんな昔のことを持ち出すのか僕にはにはわからなかったが、特に嫌という訳でもないので了承することにした。
「えっ？別に良いですけど??。あっ、そういえば僕はどこで寝ればいいんです？この部屋じゃダメでしょうから」
「Ｎｏｎ　ｎｏｎ、そこのベッドよ」
鞠莉姉はちょんちょん、と部屋にあるベッドを指さす。
「えっ？あれって鞠莉姉のやつでしょ???ってことはまさかか??」
「Ｔｈａｔ，ｓ　ｒｉｇｈｔ！今夜は寝かせてあげないんだから！」
寝かせないって??鞠莉姉はいったい僕をどうするつもりなんだろうか。
「泊まらせてもらう以上、文句は言いませんけど、あんまり変なことしないでくださいね」
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！それじゃあ　れーちゃん、今日はいっぱい楽しんでね♪　Ｌｅｔ，ｓ　ｅｎｊｏｙ　ｈｏｌｉｄａｙ！」

その後のホテルでのおもてなしは鞠莉姉の言葉にふさわしいものであった。
音楽ホールでプロのピアノ演奏を聞いたり、海を眺めながらお茶したりと、まさに至れり尽くせりの対応であった。
そして夕食は豪華フランス料理のフルコース。恐らく今までの人生で食べてきたものの中で一番高価なものだろう。味も抜群に美味しい。
さらには営業時間が終わってからではあるが、貸し切りで露天風呂にも入らせてもらえることになった。

「やっぱ広いな」
温泉に浸かりながらそう独り言を呟く。
振り替えれば眼前に広がる夜の内浦の海。遠くからは寄せては返す波の音。ちょうど今宵は満月でその煌々とした光がうっすらと海面を照らす。なんとも風流だ。
柄でもなくそんなことを思っていると、後ろの方で戸が開く音がした。
営業時間は終わっているのできっとホテルの人だろう。
さっきちょっとだけ泳いでいたところを見られなくてよかったと少し安心する。
挨拶をしないと失礼になると思い振り向くと??
「あら、見つかっちゃった♪」
そこには部屋にいると言っていた鞠莉姉であった。
「まっ、鞠莉姉!?」
幸いにも僕も鞠莉姉も身体にはタオルを巻いている。
風呂に入る前にバスタオルと一緒に腰から下に巻くようにと言われて渡されたのだ。その時は少し疑問には思ったものの、きっと格式の高いホテルではそのようにするのがマナーなのであろうと納得していた。
鞠莉姉はイタズラな笑顔でそのままゆっくりとこちらに近づいて、僕の隣で腰を下ろした。

当の僕はというと、あまりにも予想外な出来事に混乱してその場から動くことができない。
「ねえ、れーちゃん」
「ふゃぁい!?」
いろいろと緊張していたので思わず変な声を出してしまった。
「どう?ゆっくりできた?」
「えっ、ええ、こうやってなにも考えずにゆっくりお風呂に入れたのも久しぶりです」
思い返せば最近はいつも何か考え事をしていて、お風呂に入っているときも例外ではなかった。
「ふふっ、それなら良かった」

気恥ずかしく、鞠莉姉の方を向かないようにしているが、それでもやはり気になってしまいチラチラと見てしまう。
つくづく思うが、鞠莉姉は本当に美人だ。
透き通るような透明感のある肌、ふさふさとした美しいブロンドの髪、見るものを魅了する美しく健康的な体つき、それに??

「あら?どうかしたの?」
急に呼ばれたのでビクッとする。どうやらチラチラ見ていたのが気づかれたようだ。
「い、いや、鞠莉姉の肌、すごく綺麗だなぁって思って」
「ふふっ、ありがと。それじゃあ??もっと近くで見てみる?」
そう言うと鞠莉姉は先程と同じくイタズラな笑顔でさらにこちらに近づいてきて、肩が触れあう距離まで迫ってきた。
その大胆な行動に、僕の胸の鼓動がいっそう早くなる。

すると鞠莉姉はおもむろに僕の胸に手を当ててきた。
「まっ、鞠莉姉??」
「ふふっ、れーちゃんの胸、すっごくドキドキしてる」

突然の行動にまたさらに鼓動が早まる。
「果南お姉ちゃんはこうやって一緒にお風呂入ったりなんかしてくれないでしょ?」
「たしかにそうですけど??」
「言ったでしょ、マリーをお姉ちゃんだと思いなさいって。だから今日は果南がしてくれないこと、い～っぱいしてあげちゃうんだから♪」
かな姉がしてくれないことねぇ??
まぁ、たしかに普段表には出さないが、かな姉にやってほしいと思っていることは色々ある。
例えば疲れたから膝枕してほしいとか、甘えたい気分だからハグさせてとか、良い匂いがするからかな姉のベッドで寝たいとか??
でも、そんなことはできない。
僕がそんな風に甘えてばかりいたら、ただでさえＡｑｏｕｒｓの活動やお店で忙しいかな姉の負担が増えるだけだ。
ましてやそれを鞠莉姉にやってもらうなんてできない。
「別にそんなことしなくったっていいですよ??。それに、わざわざ言わなくったって昔から僕は鞠莉姉のことを姉みたいなものだと思ってますよ。てか、実際そう呼んでるわけですし」
「ふふっ、そうだったわね。私もれーちゃんのことかわいい弟だと思ってるわ」
鞠莉姉は僕の頭を撫でる。
鞠莉姉の行動にもういろいろと訳がわからなくなる。
「あら、顔真っ赤よ」
お湯に写る顔を見るとたしかに赤くなっているのがわかる。
「の、のぼせたんですよ??。もう上がります」

そう言って僕はそそくさと風呂を出たのであった。

～～～

鞠莉姉はこちらを見つめて先程よりもトーンが下がった声で答える。

鞠莉姉の言っていることは正しい。

疲れていないと言えば嘘になる。最近はＡｑｏｕｒｓのマネージャー以外に店の手伝いや、宿題、学校での仕事等なにかと忙しい。でも家のことはかな姉や旅館の手伝いをしてる千歌だって同じだし、鞠莉姉は浦の星の理事長としての仕事がある。ダイヤさんだって生徒会やお稽古があるし、ほかのみんなだって同じはずだ。

「大変なのはみんな同じですよ。だから、自分だけ楽をするなんてできません。Ａｑｏｕｒｓのマネージャーだって、自分から引き受けたんですから、しっかりやらないとわざわざ僕を選んでくれた千歌に悪いです。それに??」

僕が言い終わらないうちに、鞠莉姉は僕の頬に手をを当てる。

そして、まっすぐ僕を見つめる。

「玲士??あなたは??ストイックすぎるのよ??」

その目は一途に悲しげだ。

「別に良いじゃないですか??」

さらに悲しそうな目になる鞠莉姉。僕はその目に耐えられなくなって思わず目をそらしてしまう。

「あなた??、そんなんじゃ??壊れちゃうわよ?」

「大袈裟ですよ??」

「みんな心配してるのよ。特に果南なんか、この前あなたが風邪をひいた時なんか心配で練習が身に入らなかったのよ」

「僕のことでかな姉や皆に無用な心配をかけたくないんです。それに、鞠莉姉達の方が僕に比べたらよっぽど立派ですよ??」

たしかに僕はかな姉の事が好きだ。大好きだ。

でも、だからといって甘えてばかりいるのは違う。

皆を補佐するためのマネージャーが逆に皆を心配させたりなんかできない。

「玲士、そうやってすぐ自分を卑下するの、あなたの悪い癖よ」

何も言えない僕に、鞠莉姉は言葉を続ける。

「あなたのやっていることだって十分立派よ。こうして私がもう一度ｓｃｈｏｏｌ　ｉｄｌｅをできたのも、あなたが私たち３年生を助けてくれたおかげ、本当に感謝してもしきれないわ」

鞠莉姉に言われて、かな姉達３年生がＡｑｏｕｒｓに入ったときのことが頭に浮かぶ。あの時は本当いろいろとに大変で、かな姉と喧嘩したりもした。

「だから、今度は私たちがあなたを助ける番。今日は目一杯マリーに甘えて」

鞠莉姉は少し後ろに下がり両手を大きく広げる。その表情は慈愛に満ちている。

あれ、なんでだろう。目頭が熱くなる。頭の中をいろんな感情が駆け巡る。もういろいろとワケわかんなくなる。

「??やっぱり果南じゃなきゃダメ?」

鞠莉姉の笑顔に少し陰りが見える。

ダメじゃない、ダメじゃないんだ。飛び付きたいんだ。

でも、体が動かない。

鞠莉姉に心配かけたくない、その一心が見えない鎖のように僕を踏みとどませる。

「私は大丈夫だから。??玲士??来て」

僕の頭のなかを見透かしたような言葉を聞いて、心の中で僕を繋ぎ止めていた鎖のようなものが切れた。

僕は思い切り鞠莉姉の胸に飛び付いた。

鞠莉姉は僕を受け止めてくれたが、勢い余って二人同時に後ろにあったベッドに倒れてこむ。

ベッドの上で、僕は思いの丈を全て話した。

最近疲れてること、でもかな姉を不安にさせたくないからそれを黙っていたこと等々全部話した。目からは涙が流れる。

「ごめんね、もっと早くに気づいてあげれなくって」

鞠莉姉はさらに強く抱きしめる。

あぁ、昔から変わらない良い匂いだ。

「果南に言えないことがあったら、私に言って。相談にのるから。

一人で抱え込んじゃダメよ?」

泣きながら何も言わずにただ頷くだけの僕を鞠莉姉は優しく撫で続けた。

しばらくして顔を上げる。
あぁ、今ひどい顔してるだろうな。
「??ごめん鞠莉姉いろいろと言っちゃって??」
「いいのよ、気にしなくて」
その優しい笑顔を見てもう止まった涙が溢れ出そうになる。
「いろいろ話して疲れたでしょ、だからもう寝ましょ?」
僕は頷いて、二人で同じベッドに横になる。
泣きつかれたせいか、すぐに眠りに落ちた。

それにしても、意識が途切れる直前、頬に何か暖かく柔らかい感触を感じたのはまどろみの夢だったのだろうか?

〜〜〜

「う～ん??玲士??Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ??」
寝起きの鞠莉姉の姿はどこかあどけなく、自然と子供の頃の姿が思い出される。
「おはよう鞠莉姉、そろそろ朝食の時間ですから行きましょう」

いつもより格段に豪華な朝食を食べ終え、ホテルの周りを散歩していると向こう側から見慣れた人物がやって来るのが見える。
遠くからでもわかる上品な佇まいと艶やかで美しい黒髪。
「おはようございます、鞠莉さん、玲士さん」
言うまでもなくダイヤさんである。
「ああ、おはようございます。ダイヤさんが淡島に来るってことはかな姉か鞠莉姉に用があるってことですね」
「いえ、玲士さんをお迎えに上がったのですわ」
「ほえ?」
その言葉を聞いて頭の中に?が浮かぶ。ダイヤさんやルビィちゃんと何か約束をした覚えはないのだから。
「その様子だと、鞠莉さんから聞いてらっしゃらないようですね」
「はい、何も??」
「まぁ、良いですわ。それで玲士さん、昨日はゆっくりできましたか?」
「えぇ、鞠莉姉のおかげで今までの疲れが無くなりましたよ」
間違ってもダイヤさんの前で一緒にお風呂に入ったなんて言えない。言ったらどうなるかは火を見るより明らかだ。

「マリーもと～っても楽しかったわ！玲士と一緒にお風呂に入ったりもしたのよ～♪」
言っちゃったよこの人！
「なっ、なんですって！」
「まっ、鞠莉姉、そのことは??」
「あら～、玲士も昨日の夜はマリーを押し倒したりして、ずいぶんとダ

イダンだったじゃないの～♪」
「はっ、破廉恥ですわ!!!」
たちまちダイヤさんの顔が赤くなる。
「鞠莉さん！一体どういうことなのですか！」
「さぁて、どういうことなのかしらねぇ？詳しくは玲士に聞いて♪マリーはこの後用事があるから、それじゃあ二人とも、チャオ～」
「鞠莉さん！」
「鞠莉姉！」
呼び止める声に耳を貸すこと無く、鞠莉姉はホテルへと戻っていった。
「玲士さん」
「はっ、はい！」
「立ち話もなんですので、まずは私の家に行きましょう。そこでじ・っ・く・り・と聞かせていただきますわ」
そう言うとダイヤさんは不自然な笑顔を見せる。
この笑顔はそう、ものすごく怒ってるときの笑顔だ。
「ひえっ！」
その笑顔に戦々恐々としつつも、ダイヤさんの誤解を解かなければと思いながら後をついていくのであった。

Ｍａｒｉｅ，ｓ　ｍｏｎｏｌｏｇｕｅ

最初はただ、彼の気を引こうと思っただけ。
玲士を泊まらせようって提案したのもマリーに振り向いてほしいって思ったから。
でも、彼の話を聞いて、その気持ちが変わっていった。
彼がこんなに苦しんでいたなんて??

気を引こうなんて考えはなくなり、彼を守りたい、助けたい、癒してあげたいという強い想いが芽生える。

だって、彼は私にとっての王子様なんだもん。

籠の中に閉じ込められていたような私を、広く自由な外の世界へと連れ出してくれた。

そして、バラバラになりかけた私達三年生をもう一度ひとつに繋ぎあわせてくれた時から、私の気持ちは止まらなくなった。

彼ともっと一緒にいたい、マリーのそばにいてほしい。

でも、ライバルは多いことは知っている。　千歌っちも、梨子も、曜も玲士のことが好きみたい。もしかしたら他のみんなも？

彼に告白しようと考えたことも何度もあった。

でも、できなかった。

もし、玲士が私を選んでくれなかったら??

二度と玲士が私に振り向いてくれなかったら??

??嫌！嫌！怖い！怖いの！あの時みたいになるのは嫌！

思い出されるのは留学している間、果南や玲士と会えなかったあの時はみたいに??

だから、彼に振り向いてもらいたくて必死なの。

ちょっかいを出すのも彼に振り向いてほしいから。

お願い玲士、マリーの想いに気づいて??!

ダイヤお姉ちゃんのお願い【松浦玲士の休日　Ｄａｙ２】

「着きましたわ」
僕は今ダイヤさんと共に黒澤家の門前にいる。
淡島での会話以来、ダイヤさんとは昨夜のことについて話してない。
移動中に話そうともしたのだが、なかなかタイミングがつかめず今に至るのである。

やはりいつ来ても、沼津有数の名家というだけあって自然と恐縮してしまう。
特に、その重厚な門は歴史の重みを感じさせる。
「玲士さん、どうかしましたの？」
「いっ、いえ！何でもないです！」
門をくぐってお屋敷に入り、広い座敷に通される。
「お、おじゃまします」
僕はダイヤさんに促されて、敷かれている座布団の上に正座する。
「さて、玲士さん。先程のこと、どういうことか聞かせていただけますか？」
笑顔でダイヤさんが問いかけてくる。
下手に誤魔化そうとしても怒られるだけだろうから、僕は昨夜のことの顛末を包み隠さず全て話すことにした。

～～～～～

「??という訳なんです」
全てを話し終え、ダイヤさんの方を見つめる。
「??なるほど。大体事情はわかりましたわ。鞠莉さんのことですから

大袈裟に言ったとは思ってはいましたが、そういうことでしたのですのね」
　その言葉を聞いて、なんとかダイヤさんにわかってもらったことに安堵する。
「はい、一緒に風呂に入ったのは事実ですし、押し倒したと言われても仕方ないですから」
「わかりました。それにしても玲士さん、やはり　かなりお疲れだったようですわね」
「はい、お恥ずかしながら??」
「あなたが頑張っているのはよく知ってます。昨日は鞠莉さんの番でしたので、本日は私が玲士さんのお相手をしましょう。昨日たっぷり休んだ分、今日は私がお勉強を見てさしあげますわ」
「あっ、ありがとうございます」
　たしかに最近は疲れていて宿題をしている途中で寝てしまったり、忙しくて宿題をやるのを忘れて朝大慌てでやったりもした。
　しかし、ダイヤさんと勉強となると以前に千歌と善子の三人でやった時のことが自然と思い出されてしまう。
「今回はこの前のような強引なやり方はいたしませんので、安心してください」
「いえいえ。そういえば、ルビィちゃんはお出かけですか？」
「ええ、ルビィは花丸さんと善子さんと三人でお買い物に行くと言っていたので、おそらく夕方まで帰ってきませんわ」
「なるほど。それじゃあダイヤさん、今日はよろしくお願いします」
　僕がそう挨拶して頭を下げると、急に会話が途切れて静かになる。

「あの??玲士さん、その??ひとつよろしいでしょうか？」
「はい、なんです？」
　先程とは違い、少し元気のなさそうな様子でダイヤさんが問いかけてくる。
「??私と玲士さんとは昔からの仲です」
「はい、そうですね」

「その??ですから??私はあなたのことを弟のようなものだと思っております」
「僕だってダイヤさんのことは姉みたいなものだと思ってますよ。どうしたんですか急に?」
急に歯切れが悪くなるダイヤさん。いったいどうしたのだろうか?
「れ、玲士さんにお願いしたいことがあるのですが??」
「お願い?いいですとも。ダイヤさんのお役に立てるなら、できることは何だってしますよ」
僕がそう言うと、少し間を開けてダイヤさんはゆっくりと話し始める。
「ありがとうございます。その??もし、玲士さんがよろしければ??私も鞠莉さんと同じように??接してはいただけないでしょうか?」

「??へ??」
質問の意味が理解できず、思わず固まってしまう。
「??ですから、私も鞠莉さんのように??」
よく見ると先程まで普通だったダイヤさんの顔色は真っ赤になっている。
「?鞠莉姉のようにって??要は『ダイヤ姉』って呼べばいいってことです?」
「そ、そういうことですわ??」
目をそらして顔をさらに真っ赤にさせるダイヤさん。
なぜそうしてほしいのかは全く理解ができないが、とりあえず呼んでみることにする。
「だ、ダイヤ姉」
僕が恐る恐る言ってみると、ピギャっと声を出し、分かりやすく反応するダイヤさん。
「??あっ、ありがとうございます」
「それにしてもなんで急にこんなことを?もしかして、何かあったんですか?」

僕が疑問に思って聞いてみると、ダイヤ姉は部屋で二人きりのはずなのにキョロキョロと周りを見回す。
「だっ、誰にもしゃべってはいけませんわよ」
「ええ、もちろんです」

「う、羨ましかったのですわ、果南さんと鞠莉さんが」
「??ほぇ?羨ましかった?かな姉と鞠莉姉が?」
「ええ、実は??」

ダイヤ姉の話を要約すると、同じ三年生であるかな姉と鞠莉姉が千歌達の一・二年生達から『ちゃん』付けで呼ばれ、親しげに接されているのに対して、自分だけ『ダイヤさん』と呼ばれ、二人よりも親しげに接されていないことを寂しく感じていたということであった。

「それに??、あなたからもそのようにされたのは、特に寂しかったですわ」
そう語るダイヤ姉は悲しそうな目をしている。
僕はダイヤ姉を寂しがらせてしまったという罪悪感で胸が苦しくなる。
「なるほど、わかりました。少し話していいですか?」
ダイヤ姉は、「はい」とだけ言って頷いた。
僕は慎重に言葉を選びながら僕の考えを話し始める。
「僕はですね、親しみの表現ってのはなにも人の呼び方だけじゃないと思うんです。千歌達が『ダイヤさん』って呼ぶのも、それは決してダイヤ姉との間に壁があるとかいうことじゃなくて、尊敬しているからそう呼んでるです」
真剣そうな目でこちらを見るダイヤ姉に、僕は言葉を続ける。
「ダイヤ姉がＡｑｏｕｒｓのことを思って厳しくしているのはみんな知ってます。だから、みんな感謝してるんです。そして、ダイヤ姉がみんなにとって身近な存在だからこそ、親しみと尊敬を込めたのが『ダイヤさん』って呼びかたなんです。

だから、気にすることはないと思います。もし、どうしても嫌なら僕が千歌達にそれとなく言っておきますから??」

ぜんぜん上手くまとまってないと思うが、自分の考えを言ってみた。

ダイヤ姉の方は、何かハッとしたような表情になり、そのあとすぐに綺麗でやさしい微笑みを浮かべた。

「??そういうことでしたのですのね。わかりました。??玲士さん、ありがとうございます。あなたの言葉とその想い、しっかりと伝わりましたわ」

「そう言ってもらえて嬉しいです」

「あと、なんと言うか??なんか、僕が『お姉ちゃん』って呼んだらルビィちゃんに悪いかな、って思って??」

僕達がダイヤ姉の家を訪れたときは、ルビィちゃんはなかなか姿を見せてはくれず、柱の後ろや少し開いた襖の間から綺麗な紅色の髪がチラチラと見える程度であった。

そして小学生だったある日、たまたま遠くから姉妹二人仲良くしているのを見て、だんだんと弟でもない僕が『ダイヤ姉』と呼ぶのはおかしいし、ルビィちゃんに悪いなぁ、と感じはじめ、自然と他の皆が使っていた『ダイヤさん』という呼び方を使うようになっていったのだと記憶している。

「良かれと思ってやっていたんですが、結果的にそれがダイヤ姉を傷つけていたなんて、申し訳ないです」

「いえ、お気になさらないで下さい。やはり玲士さんはお優しいのですね。さあ、話もここまでにしてそろそろ始めましょうか」

「そうですね。早くやってしまいましょう」

こうして、ダイヤ姉とのお勉強回が始まった。

勉強道具は昨日ホテルに泊まった時にかな姉が着替えと一緒に持ってきたのだが、かな姉は今日ダイヤさんと勉強することを知っていたのだろうか?その割には僕に何も知らせてくれなかったしな??。

ダイヤ姉の「昨日は鞠莉さんの番」という先程の発言も気になるところだ。何が鞠莉姉の番だったというのか？謎は深まるばかりだ。

それにしても、かな姉に丸一日会ってないのは久しぶりだ。帰ったら真っ先にハグしてもらって、たっぷりとかな姉成分を補充しなければ??

「どうしましたの玲士さん、手が止まっていますわよ。どこかわからないところがあるのですか？」

「いえっ、この問題の答えはこれですよね」

「正解ですわ。よくできましたわね」

以前とは違って気楽に楽しく勉強することができた。

集中していたで時間はあっという間に過ぎ、宿題と復習を終わらせることができた。

「ダイヤ、玲士さん」

「あっ、こんにちは」

しばらく時間がたつと、襖が開き、ダイヤさんのお母さんが現れた。

ダイヤさんと同じく長い黒髪とスラッとした体に和服がとてもよく似合っている。

「お昼ができましたから二人でお食べなさい」

「あっ、ありがとうございます」

時計を見るともう１２時をとっくに過ぎていた。

「それにしても玲士さん、しばらく見ない間に大きくなりましたわね。いつもダイヤとルビィから聞いていますわ、お手伝いありがとうございます」

「いえいえ、とんでもないです。僕も二人にはお世話になってます」

その姿や様子を見て、ダイヤ姉も大人になったらこんな女性になるんだろうな、と想像した。

「それとダイヤ、私はこれから出かけますので留守番を頼みます」

「わかりましたわ。それでは玲士さん、お昼にしましょう」

テーブルの上の勉強道具を片付け、台所から持ってきたお昼を食べ

る。

「玲士さん、お味はいかがですか？」
「はい、とっても美味しいです。それと、なんか懐かしい味ですね。昔ここでかな姉達と四人でお昼を食べたことを思い出します」
「あら、覚えてらっしゃったのですね。果南さんと鞠莉さんと三人で初めてこの家に来たときのことを」
「ええ、覚えてますとも。鞠莉姉が珍しいがって随分と興奮していましたね」
「ふふっ、そうでしたわね」
　話をしていていろいろと昔のことを思い出す。あの頃の僕はどこへ行くにもかな姉の後ろに引っ付いて離れなかった。
　そのかな姉が鞠莉姉をいろんな所に連れ回して、僕とダイヤ姉がハラハラしながら二人に付いていくなんてことがよくあった。
　今となってはとても懐かしい。
「それでその後、鞠莉姉が床の間にあった生け花を倒してみんなで大騒ぎしたんですよね」
「ええ、あの時は何もしてないあなたが急に大泣きして、あまりの大声お母様が血相を変えて飛んできましたわね」
「ははは、お恥ずかしい??」
　自分で言うのもなんだが、あの頃の僕は本当に泣き虫だった。ダイヤ姉に『れいしさんは男の子なのになさけないですわ！』なんてこともよく言われたっけ。

「あの時果南さんの後ろにくっついて泣いていたあなたが、今Ａｑｏｕｒｓのマネージャーとして私達を助けてくださるなんて夢にも思いませんでしたわ」
「僕も同じです。またこうやって一緒にいれて本当に嬉しいです」
　あの頃は毎日が楽しかった。
　毎日かな姉達と日が暮れるまで遊んだ。
　みんなで淡島を抜け出して遠くまで行ったり、海岸で遊んで服を盛

大に汚したりして怒られることなんてよくあった。
今日の楽しさと明日への希望でキラキラと輝いていた毎日。
あの時間が永遠に続いていればよかったのに、なんて思ったときもある。
一時期は離れ離れになってしまったけど、今こうして新たな仲間も加わってＡｑｏｕｒｓとして活動できて本当に幸せだ。

しかし、いつまでも感傷的になっていても仕方ないので、残りを食べあげてしまう。

お昼を食べ終え、特にやることがなくなってしまった。
「午後はどうしましょうか？宿題と復習はあらかた終わりましたし」
「そうですわね、それではひとつ私の舞踊をお見せいたしましょう」
「ありがとうございます。ダイヤ姉が日本舞踊を習っているのは知ってますが、舞っているところをあまり見たことがないものですから」
ダイヤ姉は小さい頃からいろいろなお稽古をしていた。それで年が上がるにつれて、お稽古の種類や時間も増えて、だんだん遊ぶ時間が少なくなっていき、寂しく感じたのを覚えてる。
Ａｑｏｕｒｓとして踊っているダイヤ姉はマネージャーとして何度も見ているが、それ以外ではあまり見たことのないので
「昔みたいに途中で寝たりなんかしたら、ぶっぶーですわよ」
「あはは、さすがに今はそんなことはしませんよ」
「玲士さんを信じますわ。それでは、いきますわよ」

先程ダイヤ姉が持ってきたＣＤプレイヤーから音楽が流れ、ゆっくりとダイヤさんが舞いはじめる。

ダイヤ姉の舞を見て、息を飲むとはまさにこういうことを言うんだと実感した。
ダイヤ姉の一挙手一投足の全てに美が凝縮されているといってもいい。

スクールアイドルＡｑｏｕｒｓとしてステージで踊っている時とは違う優雅で、繊細で、滑らかな、見るものを魅了する動き。

思わず時間を忘れて見入ってしまった。

「いかがでしたか、玲士さん？」

「えっ、はい、とっても美しかったです。見惚れちゃいました」

「ふふっ、あなたのために舞ったのですから、当然ですわ」

その後は、ダイヤ姉がたてたお茶をいただいたり、琴の演奏を聞いたり、μ’ｓなどのスクールアイドルの話をして盛り上がったりと、とても楽しい時間を過ごした

ずいぶんと時間がたったことに気づいて、ポケットからスマホを取り出し時刻を見ると、もうすぐ５時というところだった。

「それじゃあダイヤ姉、僕はそろそろお暇します。今日はありがとうございました」

「いえいえ。玲士さん、今日はよく頑張りましたわね」

ダイヤ姉はおもむろに身をこちらに寄せて、僕の頭を撫でる。

かな姉とは少し違う、小さい子をあやすような撫で方。

いつも撫でられているルビィちゃんは幸せ者だな、と思う

「あっ、ありがとうございます」

「ふふっ、ルビィには内緒ですわよ。それより玲士さん、バスと連絡船の時間は大丈夫ですの？」

時刻をみると、予定していたバスの時間が迫っていた。

「ダイヤ姉、今日はありがとうございました！」

「ふふっ、どういたしまして。お気をつけてお帰りになってください」

「はい、おじゃましました！」

そう挨拶をして、急いで部屋を出た。

それゆえ、その時奥の襖が少しだけ開いていることと、そこに動く小さな影に僕が気づくことはなかった。

「うゆ??お姉ちゃんと玲士しゃんが??」

果南お姉ちゃんとの休日【松浦玲士の休日　Ｄａｙ３】

ゆらゆらと揺れて少し不安定な船の上からゆっくりと桟橋に降りる。
「ただいまかな姉」
「おかえり、今日は厳しくされなかった？」
淡島に着くとかな姉が桟橋で待っていてくれた。
いつもと変わらぬ自然で優しい笑顔で僕を迎えてくれる。
「優しくしてもらったから大丈夫」
「あはは、よかったよかった」
そう言って笑うかな姉に、僕は帰ったらやると決めていたあることを実行する。
「ハグっ！」
その言葉と同時に、僕はかな姉に思いきり抱きつく。ここなら誰も見てないだろうから、周りの目を気にする必要もない。
抱きついた瞬間に何とも言えない素晴らしい香りが鼻孔を擽り、肌の柔らかな感触を感じる。
こうやってかな姉に抱きついていると今までの疲れが全てなくなり、自然と心が落ち着く。何より、あぁ　帰ってきたんだなぁ、ということを強く感じる。

かな姉は一瞬驚いたような声を出したが、すぐに状況を理解したのか、いつもと同じように僕を優しく抱き締めてくれた。
「こらこら、いきなりどうしたの？」
「だって、丸一日会ってなかったから??」
いつも一緒にいると、一日会わないだけでも寂しく感じてしまうものである。
今朝淡島から出る前に家に寄ったのだが、運悪くかな姉は日課のランニングで不在で会えなかったのだ。

やっぱりかな姉に抱きついていると安心する。
「あはは、玲士はいつまでたっても甘えん坊だなぁ。私も玲士がいなくて少し寂しかったよ」
よしよし、とかな姉は頭を撫でてくれる。昨日今日と鞠莉姉、ダイヤ姉に撫でられたが、やっぱりかな姉に撫でられるのが一番だと実感する。
「やっぱりかな姉のが一番良いや」
しばらく抱きついてかな姉成分をたっぷり補充したところで、かな姉から離れる。
「ほら、もうご飯の準備できてるから、そろそろ戻るよ」
「はーい」
かな姉に促されて家に入る。するとすぐにどこからともなくおいしそうな良い匂いがするのを感じる。
リビングに入るとその正体がわかった。
テーブルにはお刺身をはじめ、僕の好物が多く並んでいた。
「今日は玲士が好きなお刺身だよ、いっぱい食べて」
この豪華な料理をかな姉が僕のためにつくってくれたと思うと、かな姉の弟で良かったと改めて感じる。
「いただきます！」
早速椅子に座ってかな姉特製の夕食をいただく。思えば最近は夕食の時も考え事をしていて、あんまり味わってなかったっけ
どんな凄腕の料理人が、どれだけ高級な食材を使って作った料理でも、僕にとってはかな姉の手料理に敵うものはない。
「お味はいかがかなん？」
「美味しいよ、やっぱりかな姉の料理は一番だね」
「あはは、喜んでくれてよかった」

しばらく美味しく食べていると、僕はあることに気づいた。
左手の指に絆創膏が貼ってあったのだ。
「あれっ、かな姉その指どうしたの？」
「ああ、これ？」

箸を置いて手を見るかな姉。
「もしかしてこれを作っている途中に包丁で??」
考えを口に出した途端一気に不安になる。
僕にとってかな姉は何よりも大切な存在だ。
もしかな姉が僕のために何かしてるときに怪我でもして活動に支障が出るようなことになれば死んでも死にきれない。
「違う違う。衣装整理してたらボタンが取れそうなのがあって、直してたらちょっと針が当たっちゃっただけ。こら、そんな心配そうな顔しないで」
「よかったぁ～」
かな姉の言葉に安堵する。それにしても僕はそんなに変な表情だったのだろうか。
「それよりも玲士、鞠莉から聞いたよ。結構疲れてるのに、無理して頑張ってたんだって？」
まさかのカウンターに少しギクリとする。鞠莉姉はもう話してたのか??
なるべくかな姉には知られないようにしようと思っていたが、もう隠しきれることではないので、僕は小さく頷く。
「ごめん、みんなに心配かけてたみたいで??」
「こら、そうやって何でもすぐ謝ないって前にも言ったでしょ。こっちこそごめんね、一番近くにいるのに全然気づいてあげれなくて」
「かな姉が謝ることないよ！悪いのは無理してた僕なんだし??」
僕はかな姉に心配をかけてしまった申し訳なさと、なによりその優しさと胸が一杯になり、目をそらしてしまう。
「これからは無理しないで、疲れてたり何かあったら私に話して。相談にのったり、助けてあげたりするから」
「あっ、ありがとう??」
僕はかな姉の優しさに胸がいっぱいになる。
「なんでも一人でやるのは立派だけど、たまにはお姉ちゃんを頼って。それと、母さんたち、向こうの店が一段落したから近々帰ってくるから、だから家のことは楽になると思うよ」

「へえ、そりゃ良かった」
そんな会話をしながら僕とかな姉は夕食を食べ夜を過ごしたのであった。

～～～

たしかに僕はかな姉と違って地上勤務が主なので、お客さんがいないときにたまに潜るといった程度だが、しかも最近は忙しくてその時間さえなかったのだ。
「その久しぶりに潜るのがかな姉と一緒で光栄だよ。なんたって家の自慢の看板娘なんだからね！」
以前小耳に挟んだ話によればかな姉は女性ダイバー界隈である程度名の知れた存在らしい。
さらにかな姉がＡｑｏｕｒｓの一員として有名になったこともあって、スクールアイドルとしての話を振られることも多くなり、Ａｑｏｕｒｓのお手伝いをさせてもらっている僕としても嬉しいかぎりだ。
しかし、噂によればダイビングよりかな姉目当てにお店に来る客がいるとかいないとか??
もし万が一僕の愛しのかな姉に良からぬことを企む不届き者が来ようものならこの松浦玲士がただじゃおかないぞ！
メタメタのケチョンケチョンにしてやるんだから！
「こらこら、そうやってお姉ちゃんをからかわないの」
「からかってなんかないよ！だって本当のことだもん！」
「はいはい。早く準備して、そろそろ行くよ」
準備した僕たちは小舟で海へ出る。
かな姉はボードの操舵もできるのだが、二人で潜ってしまうと無人になってしまうので残念ながら今回は使わない。
ちなみに僕は来るべき試験に向けて絶賛勉強中だ。
しばらくして今回潜る場所についた。
「玲士、いくよ！」
「ＯＫ！」
「「せーのっ」」
ドボンっという大きな水音がして大量の泡で視界が遮られるが、その泡が消えると水の冷たさを感じ、綺麗な青色が視界いっぱいに広がる。

かな姉はこちらに手招きをしてどんどん深く潜ってく。
僕は遅れまいとその後をついていくと、ほどなくして海底が見えてきた。
海底には様々な貝が所々にあり、小さな魚の群れが周りを泳いでいる。
その美しい海の中をかな姉は慣れたように優雅に泳ぐ。
姿はまるで人魚姫のようだと昔から思っている。
しばらく泳いだ後二人同時に海面に顔を出し、ゴーグルをとって顔を見合わせる。
向き合ったその顔は笑顔に満ちている。
スクールアイドルとしてステージの上で踊っているときの笑顔とは違う自然な本当に美しい屈託のない笑顔。
「どう？久しぶりだけど疲れない？」
「全然！かな姉とだったらまだまだ、何時間だって泳いでられるよ！」
「よしっ！じゃあもう一度いくよ！」
「うん！」
それからしばらく僕はかな姉と一緒に美しい海の中を泳いだのであった。

陸に戻ったあとはボンベなどの手入れや後片付けを念入りにする。これを怠るといくら優しいかな姉といえども僕を叱る。
まあ、商売道具なわけだし、僕もしっかりしないとね。
そしてようやく全ての作業を終えて一息つく。
「どうだった？久しぶりに潜ってみて」
「やっぱり海の中は良いね。海の中は冷たくて気持ち良いし、何よりスッキリするよ」
「あはは、私と同じだね」
「そりゃ僕はかな姉の弟だからね」
かな姉も僕と同じことを感じていると知って少し嬉しく感じる。
「確かにね。そろそろお腹も空いただろうしお昼にするよ、準備して」

「はーい」
言われて食器などを準備をして昼食をとる。
お昼はかな姉特製冷やし中華。ほどよい酸味がきいており格別に美味しかった。

さて、普通午前中に運動をしてお昼を食べた後に人間はどうなるだろうか。そう、眠くなるのが常である。
「??ダメだ、眠い」
僕も例に漏れず現在強烈な睡魔に襲われている。
あまりの睡魔に、自室で昼寝をするために部屋に入ろうとドアノブに手をかける。

ふと何の気なしに横を見るとかな姉の部屋のドアが目に留まった。
いつもなら特に何もない限り気に止めることはないが、今回だけは違った。

今かな姉のベットで寝たらどんなに気持ちいいことだろう。

あとから考えるに、多分たぶん眠さと疲れでどうにかなってたんだと思う。端から見れば異常な考えだ。

しかし僕はそのままかな姉の部屋のドアの前まで移動し、ドアノブに手をかけゆっくりと開ける。
そこにかな姉は居なかったが、特有の良い薫りがする。
きれいに掃除・整頓された部屋。
所々に海や貝殻、海洋生物をあしらった飾りがある。

部屋の脇にあるベッドの上には僕の部屋にあるのとおそろいのイルカのぬいぐるみがひとつ。子供の頃に淡島マリンパークの売店でセットで売られていたものをかなりねだって買ってもらったものだ。

そのベッドに向かって僕は一歩一歩ゆっくりと歩を進める。まるで蜜を求める昆虫が花園に引き寄せられるように。
しだいに心臓の鼓動が早くなっていくのがわかる。
あと少し??
いよいよ腰を屈め目の前にある楽園のような空間に飛び込む体制に入ろうとした。

「玲士!」
「わっ!かっ、かな姉!?」
僕は驚いて腰を抜かす。
「どうしたの、私の部屋なんかに来て」
「なっ、何でもないよ??」
はぐらかそうとするが、かな姉には全てお見通しだった。
「嘘だね。玲士、別に怒ったりしないから正直に話して」
かな姉はじっとこちらを見つめる。
どういうわけか僕は昔からかな姉に対して隠し事ができない。
この目を向けられたら僕は全てを話すしかないのだ。
「じ、実は??」
僕は正直に今やろうとしていたことを白状した。
「はぁ??、まったく??いつまでたっても子どもっぽいというかなんというか??」
話を聞き終えたかな姉は当然のことながら呆れたような顔で僕を見る。
「すみません??」
自分でも今回はやり過ぎたと分かりやすくうなだれる。
「仕方ないから、これで我慢して」
そう言うとかな姉はおもむろにかなりはクッションの上に座り、膝をぽんぽん、二回と叩く。
この行動が意味するもの、そう『膝枕』である。
「ふぇっ!えっ!?いっ、いいの!?」
予想もしていなかった反応に一瞬なにがなんだかわからなくなる。

あまりの衝撃にこれが現実なのかと思いかなり強く頬をつねってみるがやはり痛い。夢なんかではなく本当に現実のようだ。
次に、もしかしたら疲れで幻覚が見えたのではないだろうかと思い、念のため目を擦ってみる。
「どうしたの玲士？いいの？」
しかしかな姉は変わらずクッションの上に正座してこちらを見上げている。
どうやら幻覚や見間違えでもないようだ。
いや、現実にしてもさすがにこれはおかしすぎる。考えてみれば昨日の夕食も僕の好物だし、良いことが続きすぎている。
もしかして一生分の幸せをこの三日間ですべてを使いきってしまったのであろうか？
明日になったら一気に不幸に襲われるのではないだろうか？
僕は恐る恐るかな姉に聞いてみる。
「なっ、なんで？いつもならしてくれないのに??」
「だって鞠莉がしてあげてって言うから??。ほら、そんなに遠慮しないで」
こちらを見上げながらかな姉は言う。かな姉は意識してやっているわけではないだろうが、その上目遣いに僕は心を奪われる。
「じゃ、じゃあ??」
きっかけを作ってくれた鞠莉姉に感謝しつつ、かな姉のお言葉に甘えて僕は腰を下ろしての横になり、そしてゆっくりとかな姉の膝に頭をのせる。

頭を膝にのせた瞬間、ほどよい柔らかさと体温の温かさを感じ、なんとも言えない心地よい感覚がする。
そして一気に体の力が抜けてリラックスした状態になる。
昔からここだけは誰にも譲れない僕だけの特等席だ。
上を見上げるとかな姉と目が合う。一緒に暮らす姉弟だから目が合うなんて特に珍しいことでもないが、今回ばかりはなんだか少し気恥ずかしく感じる。

「どうだった?この三日間」
かな姉が僕に聞いてきた。
「ああ、ゆっくりと休めて、最近の復習もできたし、何より今日こうやってかな姉と過ごせたりして、本当に楽しかったよ」
僕がそう答えるとかな姉は優しい笑顔になった。
「よかったよかった。実は、玲士が忙しくて疲れてるみたいだったから三人で話し合って玲士にどうやってゆっくり休んでもらえるか色々考えてたんだ。一昨日は鞠莉、昨日はダイヤ、今日は私の番ってわけ」
そんなことがあったなんて僕にとっては寝耳に水の話だが、
今は驚きというよりもいろいろ感じていた疑問が解けた納得感の方が大きい。
「ありがとう、僕なんかのためにわざわざいろいろしてもらって??」
「いつも頑張ってくれてる玲士に、私たちからのせめてものお返しだから気にしないで。それと、玲士はもっと人に頼って。」
「ありがとう。明日からまた頑張るよ??」
「頑張りすぎないでね」
かな姉の膝の上という至上の場所でリラックスしたせいもあって、先程から一段と強くなっていた睡魔もいよいよ限界が来た。
幸せな感覚につつまれながら、ゆっくりと僕の意識は途切れていった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
しばらくすると、私の膝の上で玲士はすうすうと寝息をたてた。
それにしてもこの歳になっても私のベッドに潜ろうとしていたとはさすがに驚いた。玲士は成長してるように見えるけど、まだまだ内面は子供だ。まあ、そこがかわいいんだけど。
しばらくして部屋の扉が開き、見知った顔が現れる。
「果南〜Ｇｏｏｄ　ａｆｔｅｒｎｏｏｎ♪」
「お邪魔しますわ」
「あっ、鞠莉、ダイヤ」

実は先ほど二人からこちらに来ると連絡をもらっていたのだが、片付けや昼食のためにすっかり忘れていた。
私は口の前で人差し指を立てて、寝ている玲士を起こさないように合図をする。
二人はゆっくりとこちらに近づいてきて、私の膝の上の玲士の寝顔を覗きこむ。
「ふふっ、玲士ったら、かわいい寝顔は昔と変わらないままね♪」
「本当にそうですわね。体を縮こめて寝るのも、昔のままですわ」
二人に言われて玲士のあどけない寝顔を見ると確かに昔と変わっていない。
成長したけど、やっぱり玲士は変わらないままなんだなぁ、って改めて実感する。
「?お姉ちゃん??」
その時玲士が寝言を言った。
なにか楽しい夢を見ているのだろう、少し寝顔の口元が緩む。
「あら、玲士ったら夢の中でも甘えてるのね♪」
鞠莉は玲士の優しく頭を撫で、ダイヤもそれに続く。
「それにしても二人ともありがとね、昨日一昨日と玲士の面倒見てくれて」
そんな二人に私は感謝の意を伝える。
「かわいい玲士のためなら当然デース!それに、昔三人で約束したでしょ」
まだ小学生のころ、こうやって眠っている玲士を囲んで三人で約束した
『玲士はみんなの弟だから、何かあったら三人で守ってあげる』と。
「??でも、私は玲士を傷つけた。自分の意地とわがままで??」
しかし、そんな約束をしたにもかかわらず私はあの日、彼を深く傷つけてしまった。
2年前、私が一度スクールアイドルを辞めたあの日。
その時玲士は私のことを必死で止めようとした。
きっと、私の心の奥底にあった本当の気持ちを見抜いていたんだろ

う。
でも、その時私は必死で止める彼を突き放した。そして??
私達がスクールアイドルをやめて鞠莉が留学してから、お互いのすれ違いが解けて私達がＡｑｏｕｒｓに入るまでの２年間、彼にとってはどれだけ辛かっただろう。
思い出すだけで罪悪感で胸が一杯になる。
「それなら私達も同罪デース。果南だけのせいじゃないわ」
「鞠莉さんの言うとおりですわ。果南さん、そんなに自分を責めないでください」
「鞠莉、ダイヤ??」
二人は私の肩に手を当てて言った。
「いつまでもそんなだと、また玲士に心配かけるわよ。それに、果南がそう思うなら、これから取り返せば良いのよ、ねっ」
二人の言葉に胸を打たれる。「いつまでも過去を引きずってちゃいけない」私が再びスクールアイドルを始めたとき玲士が教えてくれたことだ。
「そっか??、そうだよね。鞠莉、ダイヤ、ありがとう」
私はもう一度膝の上に目をやる。
そして、そこにいる子供のように眠るかわいい弟をひと撫でした。

船上のシンデレラ

海鳥の鳴き声で目が覚める。
カーテンの隙間から日差しが見えるから天気は予報と同じくの晴れらしい。
僕はこの起きた直後のうとうとしている時が大好きだ。
夢と現の境がはっきりとせず、まるで雲の上にいるように感じられるなんとも至上な時間だ。
昨日はお客さんが多くて疲れた。逆に今日は予約が入ってないならゆっくり寝てられる。
そんなことを思いながら布団の中でぬくぬくとしていると、何やら早足でこちらに向かってくる足音がする。
考えられる足音の主はかな姉しかいないが、何かが変だ。
お客さんにしてはまだ早すぎるし、何かあったのだろうか？
すると扉が開く音がして??
「玲士ー!!シャイニーーー!!!」
「ぐぇっー!!」
聞きなれた元気な声と同時に体に強い衝撃が加わり、家中に僕の叫び声が響いた。

～～～

そんな僕に対して目の前にいる鞠莉姉は何やら興奮ぎみだ。
「ｓｏｒｒｙ！どーーしても二人に伝えたい、一大ｂｉｇ　ｎｅｗｓがあるからつい??」
「何さ、そのビッグニュースって」
そう聞かれると鞠莉姉は一通の便箋を差し出す。いかにも高級そうだ。
「なにこれ？」
「開けてみて！」
鞠莉姉に促されて開けてみると、当然ながら手紙らしきものと。それともう一枚大きな船が写ったカードが入っていた。
「あれ、この船どっかで見たことあったような???」
「これは我が小原グループが提携しているクルーズ船よ。近々ｄｉｎｎｅｒ　ｃｒｏｏｚがあるの」
「知ってる。なんか凄い豪華だってなんかに載ってたの見たよ」
かな姉に言われて家に置いてある雑誌に特集記事が載っていたことを思い出す。しかし、それがなぜ大ニュースなのだろうか？
「それで、それが僕たちになんの関係があるんです？」
「なんと、そこのｐｅｒｆｏｒｍａｎｃｅ　ｓｔａｇｅにＡｑｏｕｒｓが招待されたの!!」
その言葉を聞いて僕とかな姉は顔を見合わせる。どうやらこれは本当に大ニュースらしい。眠気も機嫌の悪さも一気に吹っ飛んだ。
「「ええっーーー!!!」」
「ほら、ｂｉｇ　ｎｅｗｓでしょ？」
「えっ、これほんとにすごいじゃないですか！ねえ、かな姉？」
「うん！すごいよこれ！あぁ、なんだか今から体動かしたくなってきちゃった！玲士、ちょっと走ってくる！」
「えっ！ちょっ、かな姉！」
そう言うとかな姉はタオルを首にかけて飛び出していった。
「ああ、行っちゃった??」
「まったく、果南は昔から変わらないわね。興奮するとすぐに走り出

しちゃうんだから。あっ！玲士も昔と変わらずｖｅｒｙ　ｃｕｔｅよ♪」
　たしかに鞠莉姉の言うとおり、かな姉は昔から興奮したり、何かあったりするとすぐに走り出してしまう。僕は必死になってその背中を追いかけたものだ。それで転んで泣いてかな姉や鞠莉姉に慰めてもらったっけ。
　あと、変わっていないものといえば鞠莉姉の僕に対する接し方。
　いったい僕をなんだと思ってるんだ。もう子供じゃないんだぞ。
「はいはい。それにしても凄い場所でライブをすることになりましたね。船上でのライブをするなんて今まで聞いたことないですよ」
　Ａｑｏｕｒｓの皆がこんな大きなステージでライブをするとなると、別にステージに立つわけでもない僕も今から緊張してしまう。
「そんなに心配することないわ、いつも通りにやればいいのよ♪そういえば、たしか夜には大広間でｄａｎｃｅ　ｐａｒｔｙもあるのよ！玲士も参加するでしょ？」
「ダンスパーティーかぁ??、僕は遠慮しておきます。皆で楽しんで来て下さい」
「Ｗｈｙ？なぜ？」
　僕の答えが意外だったのか、鞠莉姉は少し驚いたように聞いてくる。
「だってダンスも何もできない僕がついていっても足手まといになるだけですし、第一、僕にそんな場は似合いませんよ」
　Ａｑｏｕｒｓの皆が輝くために変に表に出たりせず裏方に徹する、それが僕のモットーだ。
「ふ～ん、玲士、本当にいいの？」
　そう言って鞠莉姉は僕の顔を覗きこむ。そして、まるで幼い子供に何かを説明するような口調で語りかける。
「いい玲士、ワルツを踊るにはね、パートナーが必要なの。それにｐａｒｔｙにはね、いろーんな人が集まるの。もちろんその中にはとってもｃｏｏｌでハンサムなｇｅｎｔｌｅｍａｎもいるわ」
「まあ、そうでしょうね」

鞠莉姉に言われて頭の中で様子を想像してみる。
大きなシャンデリアが輝く大広間。美しいドレスに着飾ったかな姉と、スーツの男達。
「その男が果南と一緒にｄａｎｃｅするのよ？『美しいお嬢さん。私と踊ってくれませんか？』って」
一人の男が跪いてかな姉に向けて手を伸ばしている。
そんなことを想像していると次第に落ち着いていた僕の心も穏やかではなくなってくる。
「そして手を差し出された果南はその男の美貌にうっとりと??」
「鞠莉姉!!今すぐ躍りかた教えて!!!」
前言撤回。どこの馬の骨ともわからない輩が、恐れ多くもかな姉の手を握って、ましてや一緒に踊るなんて事はこの松浦玲士が絶対に許さない。
「ＯＫ！そう言ってくれると思ってたわ！じゃあ早速ｌｅｓｓｏｎを始めましょう！」
こうして、鞠莉姉によるダンス教室が始まったのであった。

そういうわけで、僕と鞠莉姉のダンスレッスンは放課後に理事長室でおこなわれることとなった。
「それにしても本当によかったんですか、こんなところで？今のところは誰にも見られてないけど、見つかったら確実に怒られますよ」
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ♪ほら、集中集中♪ワン、ツー、スリー、フォー♪」
こういうことに不馴れな僕は鞠莉姉に身を任せる形でステップを踏む。
その鞠莉姉は目が会うたびに微笑をうかべる。
その美しい金色の瞳にまじまじと見つめられると少し気恥ずかしく感じてしまう。
「ワン、ツー　、スリー、??あっ！」
「Ｏｕｃｈ！」
しかし、僕が鞠莉姉に見とれていると足がもつれてバランスを崩

し、二人して床に倒れこんでしまった。
「いてて??、鞠莉姉大丈夫!?」
「大丈夫よ」
幸いにも鞠莉姉に怪我は無いようだ。
早速体勢を立て直そうと立ち上がろうとするが、今の自分の体勢に気づいて動きが止待ってしまう。
尻もちをついている状態の鞠莉姉に僕がその体の両脇に手足をついて、覆い被さっているような状態だ。
意識してしまったからか、急に恥ずかしくなってしまう。
「あら、玲士ったら随分とダイダンね」
「??へ?ま、鞠莉姉何を言って??」
「今なら??　イイヨォ??」
意味深な事を言って妖艶な笑みを浮かべる鞠莉姉。
その吸い込まれそうなぐらい美しい金色の瞳から、僕は目が離せなくなってしまう。自然に心臓の鼓動も高鳴る。
その時ノックする音がして、続いて扉が開いた。
「鞠莉さん、いらっしゃいますか?今度の行事の書類を??」
「あっ??」
振り向いてダイヤさんと目があった瞬間、その場の空気が硬直する。
そしてしばらくの間の後??
「ピギャァァ!!!」
ダイヤ姉の声が部屋中に響いた。
「ふ、二人とも先程から姿が見えないと思ってましたが、よ、よりにもよって、り、理事長室で何をやっているのですか!は、破廉恥極まりないですわ!!」
瞬時に顔色が真っ赤になるダイヤさん。
「ちっ、違うんです!ダイヤさん、誤解です!!」
「ダイヤ、どうかしたの???!!って玲士!?」
騒ぎを聞きつけてかな姉も駆けつけてきた。
興奮したダイヤさんをかな姉が落ち着かせて何とかその場は収

まった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「まったく、何事かと思ったよ。ダイヤも大袈裟なんだから」
「なんかすみません??」
家に帰って来て一息つきながら、先程の理事長室での出来事を回想する。
「それにしてもびっくりしたなぁ、玲士がダンスパーティーに参加したいなんて言い出すなんて。もしかして、何かあったの?」
「べ、別に特に理由なんてないよ??」
本人の前で理由を恥ずかしくなってしまい、とっさにそう言ってしまう。
「実は私も鞠莉に教えてもらおっかな?って思ってるんだ」
「ふぇっ!かな姉も!?」
「ダメかなん?」
「全然ダメじゃないよ!かな姉だったら練習すればすぐに上手くなるよ!」
かな姉も行って来ました練習することとなったすると聞いてたちまちやる気か満ち溢れてきた。
あと、かな姉はたまにこうやって自分の名前を語尾につける。
そんな普段とは違ったお茶目な一面も僕がかな姉を好きな理由の一つだ。
「ありがとう。玲士も頑張ってね、当日楽しみにしてるよ」
「うん!」
かな姉と踊るその日まで絶対上達してみせる、そう僕は決意を新たにするのであった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

翌日から僕と鞠莉姉のダンスレッスンは理事長室から場所を移し

て空き教室で行われることとなった。
　しかし今日は二人きりではなく、かな姉とダイヤさんも一緒だ。
「それにしてもな～んでダイヤと果南がいるのよ、せっかく玲士と二人っきりだと思ったのにぃ～」
「また二人が不健全な行為をしないか監視しているのですわ！」
「だからそれは誤解ですって」
　まあ、あんなところを見られたらダイヤさんが疑うのも無理はないだろう。
「そんなこと言って、ほんとはダイヤも練習したいだけでしょ？」
「かっ、果南さん！」
「あら～、もしかしてダイヤ、マリーと玲士が二人っきりでいるのに嫉妬ｆｉｒｅしちゃったんじゃな～いの？」
「なあっ、し、嫉妬などしていませんわ！」
　鞠莉姉の言葉になぜかムキになったような言い方をするダイヤさん。
　そもそも僕なんかを誰かにとられて嫉妬する人なんかいるのだろうか？
「そんなダイヤのために、今日は特別に代わってあげようかしら♪」
　そう言うと鞠莉姉は僕の背中を押してダイヤさんの前につれていく。
「ちょっ、鞠莉姉!?ダイヤさんだって僕なんかと??」
「いっ、いえ、わ、私もちょうど練習をしようと思っていたところですので、かまいませんわ」
「は、はぁ」
　こうしてよくわからないまま、今日は僕とダイヤさんが一緒に練習することとなった。
「そういえば、ダイヤって前にこうやって踊ったことあるの？」
　横から見ていたかな姉が言う。
「いえ、以前本でなら見たことありますのである程度の知識はあるのですが、まだ実際にやったことはないですわ」
「僕だってそんなに上手くないのそんなに気にしないでください」

「ほーら、二人ともいつまでも話してないでＬｅｔ，ｓ　ｄａｎｃｅ！」
鞠莉姉に促されて僕とダイヤさんはゆっくりと踊り始める。
連日の鞠莉姉との練習である程度覚えてきたので以前よりミスなく踊れるようになった。
一方のダイヤさんはというと、実践したことはないと言っていたが、やはり普段のスクールアイドルとしての練習だけでなく日舞の稽古もしているせいだろう、僕よりも断然上手い気がする。
鞠莉姉の時もそうだが、やはり見つめあっている気恥ずかしい。ダイヤさんの顔も心なしか少し赤いようにも見える。
うつくしいエメラルド色の瞳は凛とした雰囲気を醸し出している。
一通り踊り終わってダイヤさんの方を見る。
「玲士さん、ありがとうございました。とてもお上手でしたわ」
「いえいえ、僕なんかまだまだです」
「そんなに謙遜することありませんわ」
「もう！二人でいい雰囲気になっちゃって！やっぱりマリーが代わる！」
そう言って鞠莉姉は僕の腕を引っ張る。
「ちょっ、鞠莉姉引っ張らないでください！」
「あはは、玲士は人気者だなぁ」
「か、かな姉??」
こうして僕は二人の相手をしながら練習は続いていくのであった。

～～～

だね」
「かな姉だってすごく上手だったよ」
　かな姉は初めてにもかかわらず、今日の練習が終わった時には鞠莉姉から教えてもらったことはほとんどこなせてた。
　やっぱりかな姉はすごい。僕の自慢の姉だ。
「あの～、玲士さん」
　するとダイヤさんが少し遠慮ぎみにこちらに話しかけてきた。
「はい、何です？」
「ひとつお願いがあるのですが??　よ、よろしいでしょうか？」
「お願い？僕にできることなら何でもしますよ」
　ダイヤさんのお願い？はて、なんだろうか？
「当日のことなのですが??　わ、私と踊ってはいただけないでしょうか？」
「??へっ？ぼ、僕とですか？」
　ダイヤさんからの意外なお誘いに困惑してしまう。
「??ダメでしょうか？」
「いえいえ！そんなんじゃないです！ただ、僕が一緒だと足手まといになるだけだと思いますし??」
「もう！ダイヤばっかりずるいわ！玲士と一緒に踊るのはマリーよ！」
「鞠莉姉!?」
「鞠莉さん!?」
　突然横で話を聞いていた鞠莉姉が割って入ってきた。
「マリーと一緒ならぜっっったい、大丈夫よ！だってマリーが教えたんですもの！」
「なっ、何を言い出すんですの鞠莉さん！」
　なぜか少しムキになった鞠莉姉と、それに反論するダイヤさん。
　そしてなんだか二人の間で僕をめぐった？よく分からない争いが始まり、そして次第にどんどんヒートアップしていった。
「何よ！ダイヤってば最初はあんなにハレンチだって言ってたのに！」

「それはお二人があのような体勢でいるからであって！」
「ふ、二人とも落ち着いて??」
「玲士」
「玲士さん！」
そして同時に僕を見る。なんだか二人とも表情が怖い。
「どっちを選ぶの！」
「どちらを選ぶんですの！」
二人同時に迫ってくる。ものすごい威圧感だ。
「か、かな姉??」
僕はどうしようもなくなりかな姉の後ろに隠れる。
僕は何かあるとすぐこうしてしまうのだ。カッコ悪いのはわかってるけどだって気持ちいいんだもん、かな姉の背中に抱きつくの。
「こらこら二人とも落ち着いて！玲士が困ってるでしょ」
かな姉が何とか割って入り、二人をなだめる。
「玲士、ｓｏｒｒｙ??」
「私としたことが、申し訳ないですわ??」
ハッとして我に帰って二人は僕に頭を下げる。
「いえいえ、僕が決められないのがいけないのであって??、そ、その??考えておきます」
こうして何とかこの争いは収まった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「はぁ〜、ほんとさっきはどうなることかと思ったよ」
自室のベッドの上でそう独り言を言う。それにしても何で下手な僕なんかと一緒に踊りたがるんだろうか？
「玲士、入るよ」
ノックがしてかな姉が入ってくる。
「かな姉？」
「玲士、何か私に隠してるでしょ」
入ってくるなりかな姉はそう言った。
「か、隠してること？無いよそんなの」

しかし今の自分に思い当たる節はない。
「それじゃ、なにか悩んでることは？」
「どうしたの急に」
「だって、練習してるときとか、さっきとか、何か変だったから。正直に話して。別に怒るわけじゃないから」
悩んでること？もしかしてと思い、以前鞠莉姉に言われたことを話した。たしかに自分の心の中で引っ掛かっていたものがあった。
「??って言われたんだけど??痛てっ！」
そこまで言うとかな姉にデコピンをくらった。
「まったく、またそんな下らないこと気にして??。私のことなんか気にしないで。玲士は自分の心から踊りたいと思う人と踊って。その方がいいでしょ」
「うん??」
かな姉の言葉に僕は頷くことしかできなかった。
心から一緒に踊りたい人か??、一体誰だろう。
その日から僕は悶々と考え続けるのであった。

～～～

じてしまう。
「あっ、玲士」
　そんな僕の前に姿を表したのは美しいドレスを身に纏ったかな姉、鞠莉姉、ダイヤ姉の三人。
　スクールアイドルとしてステージに立っているときとは違う大人びた美しさだ。
「みんなすごく似合ってますよ」
「あら玲士ったら、心配していた割にはずいぶんと様になってるじゃないの♪」
「そうそう。昨日はあんなに不安がってたのにね」
　正直言うと今も緊張してしている。かな姉、鞠莉姉、ダイヤ姉と何回も練習してきたが、失敗してしまう不安が常に頭をよぎる。
　するとかな姉がしっかりと僕の両手を握ってきた。
「さすがにここでハグはできないから、その代わり」
　その後に続いて代わる代わる鞠莉姉とダイヤさんも同じように手を握る。
「そんなに緊張しないで。私達がついてるわ」
「玲士さん、あなたは十分できるのですから気を強くお持ちなさい」
　ああ、昔と変わらないな。僕はいつもこうやって励まされてばかりだ。
「ありがとう」
　でも、今日は違う。踊る時は僕がリードしていかないと。
「玲士、そろそろ時間だよ」
　時計を見ると針はもう8時を指していた。
「ふふっ、玲士が誰を選んでも文句は無しだよ」
「わかってるわよ！」
「ええ、僕も決めてきました。ものすごく悩みましたけどね」
　この日までの数日間、ものすごく悩んで夜遅くまで起きてるときもあった。そしてわかった、僕が心から踊りたい人。
「さあ、いよいのですわ！」
　そう言うと三人は僕の前に並んで同時に手を伸ばす。

「「「Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ??」」」

僕はその場にひざまづき、そして「彼女」の手をとった。

玲士の日常と果南の想い　【2年生編ｐｒｏｌｏｇｕｅ】

授業終了を告げるチャイムが鳴り響き、それと同時に遠くから足音や明るい話声が聞こえだす。

今日はたまたまうちの学校が短縮授業だったということもあり、いつもより早く浦女に来て部室でＡｑｏｕｒｓの皆が来るのを待っているのだ。

目をつぶると少し開けておいた部室の扉から海からの心地よい風と、学校の周りの木々が揺れる音が入ってくるのを感じる。

町中の学校に通う僕にとっては、こんな自然に囲まれた学校に通うＡｑｏｕｒｓの皆が羨ましい。女子高でなかったら確実にここを選んでいたと言っていい。

すると、そんな木々の葉音をかき消すように、こちらに向かってくる元気な足音が聞こえてきた。

これほど元気な人物はＡｑｏｕｒｓの中で一人しかいない。

「今日もいっちばーん・・・あれっ!?玲士くん!?」

「残念でした」

部室に入ってきた千歌は、椅子に座った僕を見て驚いたような表情を見せる。小さなことではしゃぐ子供っぽいところは昔から変わっていない。

「あははっ、千歌ちゃん待ってよー！」

「こら千歌ちゃん曜ちゃん！廊下走っちゃダメでしょ！またダイヤさんに怒られるわよ」

千歌に続いて続いて曜ちゃんが、少し遅れて梨子ちゃんが部室にやってきた。

いつも思うがＡｑｏｕｒｓの中でも、この2年生の仲の良さは1番だと感じる。無論かな姉たち3年生や善子ちゃんたち1年生も互いに仲良しであることに間違いはないが、曜ちゃん、梨子ちゃん、それに千歌、この3人の仲の良さは別格だ。互いのことを何でも知り尽く

したような千歌と曜ちゃん。今年転入してきたばかりの梨子ちゃんも、まるで昔からの仲のように二人となじんでる。
「どうしたんだ千歌、そんなににやにやして。何かあったのか？」
「だって玲士くんが早く来てくれたんだもん、それだけで千歌は嬉しいよ！」
　そう言って千歌はぴょんぴょんと小さく飛び跳ねる。普段はどうしても沼津の学校からここまで３０分近くかかるので練習開始にはどうしても間に合わないのだ。
「まったく千歌は昔から単純なんだから・・・あれ？梨子ちゃん・・・髪留め変えた？」
　よく見てみると梨子ちゃんのトレードマーク（と個人的に思ってる）後ろ髪を結んでバレッタものが、いつものピンク色のバレッタではなく、桜のあしらった物に代わっていた。
「えっ!?ちょっと変えてみたんだ・・・、でも、ちょっと派手すぎて私にはあってないみたいだから・・・」
「そんなことないよ！とっても梨子ちゃんに似合ってるよ！むしろいつもよりすっごく綺麗だよ！」
　お世辞でもなんでもなく、綺麗な桜のバレッタは清楚な雰囲気の梨子ちゃんにとてもよく似合っている。例えるなら、薄いピンク色の花が咲き誇っている花畑の中に大きな赤い花が一輪咲いたようなものだ。
「はわわ!?き、きれい・・・、あの、その、あ、ありがとう！」
　僕はただ褒めただけなのに、梨子ちゃんはなぜか慌てたような様子を見せて頭を下げる。梨子ちゃんは基本的にしっかりしている人物だが、たまにこういう僕には理解しがたい面を見せる。やっぱり女の子というのは謎の多いものだな。
「あはは、別にそんなに頭を下げなくっても・・・」
「むー！また千歌ちゃんと梨子ちゃんと3人で盛り上がって！曜ちゃんをのけ者にしないでほしいであります！」
　横から少し頬を膨らませた曜が割って入ってきた。
「別にのけ者になんかしてないさ」

すると、曜が動くたびに清涼感のある匂いが鼻孔をくすぐる。
「そういえば、曜ちゃんシャンプー変えた？それとも洗剤？」
「えっ!?た、確かにシャンプー変えたけど・・・、は、恥ずかしいであります・・・」
途端に要は赤面してしまう。しまった、また変なこと言ってしまった。やっぱりだめだなぁ僕は。
「ごめん曜ちゃん！たまたま鼻に・・・」
「あっ、千歌知ってるよ、そういう人のこと『においふぇち』て言うんだよ」
「なっ、何を言うか、僕は断じてそんなんじゃないぞ！」
まったく千歌のやつ一体どこでそんな言葉覚えたんだ。確かに僕はハグした時にするかな姉の匂いや鞠莉姉からする外国の石鹸の匂いは好きだが案じてそんな人間ではない。絶対。多分。
「この前も『梨子ちゃんの部屋は良い匂いだった』って言ってたじゃん」
「れ、玲士君・・・」
「うぐぅ・・・」
「ほら千歌の言った通り」
自慢げに腕組みをする千歌。残念ながら僕が以前そう言ったのは事実だ。だって本当の事なんだもん。ミカンの匂いしかしない千歌の部屋に比べたら断然良い匂いだ。
「二人とも、騒がしいですわよ」
「こらこら千歌に玲士、どうしたの？」
「あらあら、今日も二人は元気ね♪」
ダイヤさんを先頭に3年生が入ってきた。早速僕は愛しのかな姉に千歌の暴言を訴え出ることにした。
「かな姉！だって千歌が！」
「果南ちゃん！玲士くんが！」
「はいはいそこまでそこまで。」
不敵にも千歌のやつもかな姉に訴え出るなんてことをしようとしたがかな姉に軽くあしらわれてしまった。無念。

「あ！玲士さん！」
「リトルデーモン、なぜこの時間に!?まさかあなた空間移動を!?」
「ただ学校が早く終わっただけずら」
　次々とＡｑｏｕｒｓの皆がやってきて、さっきまで静かだった部室が途端に騒がしくなる。
　普段は静かなところを好む僕だが、この騒がしさは好きだ。
　性格も個性も点でバラバラな９人の女の子たちが一つの「輝き」を目指して一つになって活動している。
　そんな中に僕みたいな普通の人間が関わらせてもらっているだけでもありがたい。みんなが輝くためにしっかりとサポートして、みんなの事を守らなきゃ、もう何度目かはわからないが、改めてそう心の中で誓った。
「さて、みんな揃ったことだし、練習はじめよっか」
「かな姉、その前に今度のライブの打ち合わせがあるでしょ。まだ曲も決めてないんだし」
「あのっ、そのことなんだけど、まだ作りかけなんだけどひとついい曲があって・・・聴いてもらえないかな？」
「なになに梨子ちゃん！早く聞かせて！」
　こうして今日も僕とＡｑｏｕｒｓの日常が始まったのだった。

～～～

どうなの？」
「い、いないよ・・・」
「ほんと？Ａｑｏｕｒｓの中で誰かいないの？」
「ま、マネージャーとしてそんなこはできるわけないじゃないか」
　玲士ってばほんとストイックだな。姉として頼もしく感じる。
「いったい誰に似たのかしらねぇ？うちの男にはそんな人いないはずなのに」
　母さんが意味ありげにそう言うと、なぜか台所で皿を洗ってる父さんが気まずそうに顔をそむけた。昔何かあったのだろうか？
「ほらほら母さんその辺にしてあげて」
　このまま慌てている玲士を見ているのもよかったが、さすがにかわいそうなので助け舟を出す。
「果南から見てどうなの？何か気になる様なことはないの？」
「そんなのないよ。玲士は鈍感だから、何かあっても気づきっこないって」
「か、かな姉、ひどいよ・・・」
「あはは、冗談冗談。そんな顔しないで」
　ちょうどその時、お風呂が沸いたことを知らせる電子音が鳴り響いた。
「さ、先入るね」
　そう言って玲士はそそくさと逃げ去るように部屋から出ていった。
　実を言うと、玲士のことで気になることがないわけではない。
　まず、明らかに千歌と曜は少なからず玲士に好意を持っている。普段の様子を見ていても明らかだ。無論のこと玲士は気づいていない。
　ダイヤたちがどう思うかは別として、私はＡｑｏｕｒｓの活動に支障が出ないのならどういう関係であろうが問題はないと考えてる。
　彼は人の気持ちの変化や、考えてることはすぐに気づくのに、それが自分に向けられるものとなると、どういうわけかたちまち鈍くなる。おまけに昔から純粋で一途だ。
　この先そんな彼の特性が災いしなければいいのだが。
　そう思いながら、私は彼が出ていったドアの方を一瞥し、再び雑誌

に目を戻した。

十千万旅館いおいでませ

「ねえねえ果南ちゃん、今度の土曜日って空いてる？」
　練習が終わり、帰りのバスを待っていると千歌がかな姉に話しかけてきた。
「うん、お店の方は父さんたちが対応してくれるから、大丈夫だよ」
「じゃあ、うちに泊まりに来ない？玲士くんと一緒に」
「ちょっと待て何で僕の予定を聞かないんだ」
　唐突に僕の名前が出てきたので思わず割って入る。
「だってどうせ玲士くん予定ないでしょ」
「なっ、人を万年暇人みたいに言うな。千歌だって練習がない日は部屋でごろごろしてるじゃないか」
　確かに僕は週末にこれと言って予定がないことが多いが、さもそれが当然みたいに言われるのは不本意だ。
　思わず言い返してしまう。
「違うもん！千歌は毎日旅館の手伝いしてるんだよ！」
「僕だってお店の手伝いしてるんだぞ」
「こら、千歌に玲士。全く、二人はいつもこうなんだから」
　だんだん会話がヒートアップしてきたので見かねたかな姉が止めに入ってきた。
　これは昔からなのだが、僕はどういうわけかいつも千歌と張り合ってしまうのだ。
「別にいいでしょ玲士。予定ないのは本当なんだし。それにしても、千歌の方から誘うなんて何かあったの？」
「この間泊めてもらった時のお返しだよ！なんたってうちは旅館だからね」
「ありがとう、楽しみにしてるよ。玲士も良いでしょ」
「うん・・・」

～～～

そして土曜日。練習を終えると約束通りかな姉と僕は準備を整え十千万へ向かった。
「二人とも十千万旅館へようこそ！」
十千万の前では旅館用の着物に身を包んだ千歌が待っていた。昔から見慣れた姿だが、普段よりも落ち着いて見えとてもよく似合っている。
「千歌、今日はよろしくね」
「たっぷりお返ししてもらうんだからね」
「もっちろん、じゃあさっそく二名様ごあんなーい♪」
意気揚々とした千歌に連れられ旅館に入っていく。
「あら～、果南ちゃんに玲士君いらっしゃ～い」
旅館に入ると高海家の長女、志満さんが出迎えてくれた。とてもやさしい人で昔からよくお世話になっているのだ。
「志満さん、今日はよろしくお願いします」
「こちらこそ、この間はありがとね。そういえば、千歌ったら家ではいっつも玲士君の話するのよ～」
「わわっ、志満姉・・・」
「そうなのか千歌？」
「せ、世間話だよ・・・。ほ、ほら早くいくよ」
さっきまで元気だった千歌が途端におとなしくなる。それにしても他の内で自分のうわさがされているとなるとなんだか少し気恥しいものである。
そして僕たちはそのまま2階に上がり千歌の部屋に通される。
そして、部屋に入った瞬間に違和感に気づいた。
「本日のお部屋はこちらでございます！」
「あれっ千歌、布団が・・・」
千歌の部屋にはベッドがあるのだが、なぜか布団が3枚敷いてあるのだ。
「もしかして、他に誰か呼んでるのか？」
「うんうん、玲士くんと果南ちゃんだけだよ」

「じゃあ、何で布団が・・・」
「今日は千歌も布団で寝るの！いいでしょ？」
「別にいいけど、そんなに気張らなくてもいいんだよ千歌。私たちは本当のお客さんじゃないんだし」
「まあ、気張ってる千歌はそれはそれで好きだから良いけど」
「果南ちゃん、玲士くん・・・」
　かな姉は千歌に対してそう優しく語り掛ける。確かに今日の千歌はいつもとは少し違うようだが、気張っていたのか。それにしてもこんなことをすぐに見抜けるかな姉はやっぱりすごい。本当エスパーなんじゃないかと思ってしまうほどだ。
「こぉらぁ玲士！またうちの妹をたぶらかしてぇ～！」
「わわっ！美渡さん」
　すると突然後ろの襖が開き、そこから出てきた千歌のもう一人の姉である美渡さんに頭をわしづかみにされた。
　美渡さんは志満さんとは正反対な活発な人物で、昔はいろんなことされてよく泣かされたものだ。
「お前は内浦中の女をくらいつくす気か！」
「な、何を言うんですか!?」
　一体何を言うんだこの人は。確かに僕は浦女に出入りしてるから女子と話すことも多いが決してそれはやましい意味ではない。ほんとですよ！
「むー、美渡姉、玲士くんの悪口は許さないよ！二人は大切なお客さんなんだからね！」
　すると横にいた千歌が美渡さんの腕をつかみにかかり、引っ張って隣の部屋まで押し戻そうとする。
「おわっ、千歌！」
「お客様の邪魔です！あっ、二人は夕食までごゆっくりー」
　しばらくの押し合いへし合いの後、二人は隣の部屋へと消えていった。
「かな姉も見てないで助けてよ」
「ごめんごめん、ちょっと面白くって」

「そんなぁ。それにしてもかな姉、僕ってそんなに変かな？」
「まあ、ちょっとね」
　その後しばらく千歌の部屋で過ごした後、夕食のために食堂へ向かう。普段ならできないそうだが、今日はたまたまお客さんも少なく、食堂の予約もないから特別だそうだ。
「うわっ、すごいな・・・」
　夕食は旅館とあってとても豪華だ。きっと板前の千歌のお父さんが腕によりをかけて作ってくれたのだろう、後でお礼言わなきゃな。
「二人が来るから今日は特別だよ。こんなんなら毎日二人が毎日来てくれればなぁ」
「おっ、千歌ったらいきなり大胆なことを言うな～」
「あらあら千歌ちゃんったら～」
　すると志満さんと美渡さんがなぜだかニヤニヤしだした。特に千歌が変なことを言ったわけでもないのにどうしてだろうか？
「わわっ、そういう意味じゃないよ。私はただ単に・・・」
「何を言ってるんだ？」
「あはは、やっぱりうちと違ってにぎやかだなぁ」

　にぎやかな夕食の後、僕はそのままお風呂に向かった。
「ふう、温泉っていいなぁ～」
　十千万の温泉は地元でも有数の規模を誇る名湯だ。
　温泉はやっぱり良い。体も心も癒される。千歌はつくづくうらやましいと思う。
　すると、戸が開いて人が入ってきた。よく見ると千歌のお父さんであった。
　昔から千歌のお父さんは旅館で板前をやっており、寡黙な職人さんだ。あまり話したことがないが、昔は旅館に預けられたときにはよくお世話になったものだ。
「あっ、あのっ、今日はありがとうございます。わざわざ泊めていただいたりして」
「いや、ゆっくりしていってくれ・・・」

「ありがとうございます」
あまり話したことのないせいかどうも会話がぎこちなくなってしまい、そのまま温泉に浸かったまま無言の時間が続いた。
「千歌をよろしく頼む・・・」
すると突然、千歌のお父さんが僕に声をかけてきた。
「は、はい」
「よろしく頼む」かＡｑｏｕｒｓのマネージャーとして頑張らなきゃ、そう思いながらさらに深く温泉に浸かるのだった。

～～～

「・・・いいよ、だって、そこも含めて玲士くんだもん」
「私から伝えた方がいい？もっと他の人の気持ちに・・・」
「それはだめ!!!」
　千歌の威勢に思わずのけぞってしまう。
「だって、だってそんなのずるいじゃん・・・玲士くんにはじぶんできづいてもらわないと・・・だから！」
「わかったよ千歌。何も手出しはしないよ、がんばってね」
「うん！」

　元気な笑顔を見せる千歌に、私もつられて笑顔になるのだった。

～～～

「このお味噌汁、早起きして千歌が作ったんだよ！・どう？」
「うん、かな姉の作る味にそっくり。おいしいよ」
確かに味はいつも飲んでるかな姉特製みそ汁と同じだ。かな姉が微笑浮かべてることからきっと一緒に作ったんだろう。
「やったぁ！」
千歌はよほどうれしいのか得意げな顔をして喜んだ。よほどうれしいのか頭の毛もぴょこぴょこ揺れている。
「こ～ら～千～歌静かにしろぉ！」
「げっ、美渡姉?!」
そこに美渡さんが割って入りまたまた大騒乱が始まった。
「うちもこんな風に賑やかだったらいいのにね」
その光景を見ている僕にかな姉が耳打ちしてきた。
「うん、でもこれはちょっと賑やかすぎるよ。でも、元気でいいもんだね」
いつもと違うにぎやかな朝もいいんもんだな、そんなことを想いながら僕たちは高海家での朝を過ごすのだった。

甘え上手な渡辺さん

「果南ちゃん！お願いがあるであります！」
「どうしたの曜」
　いつものように練習を終えて部室で帰る準備をしていると曜がこちらへやってきた。
「玲士くんを一日貸してください！」
「ゴホッゴホッ！」
　隣でお茶を飲みながら日誌を書いていた玲士がむせ返る。
「な、何を言うんだ曜。人を物みたいに借りるだなんて」
「こら、急にどうしたの」
「わかった、前みたいに僕をマネキンにするつもりだろ！嫌だ、絶対嫌だ！」
　玲士は座りながら咄嗟に身構える。
「こら玲士、そうやってすぐ決めつけないの」
「もう、玲士君ったらそんなんじゃないって」
「じゃあ、何だって言うんだ」
「これであります！」
　曜がカバンから取り出したのは何かのチケットのようなものであった。
「あっ、深海水族館の」
「この間パパの友達にもらったのであります！一緒に行かない？」
　曜は玲士に接近してねだるようにそう言った。
「別にいいけど・・・。でもいいのか、僕なんかで。千歌や梨子ちゃんとじゃなくていいのか？」
「曜ちゃんは玲士君と行きたいのであります・・・」
「はあ」
　玲士はきょとんとした顔をしているがこれは明らかにデートの誘いだ。少しばかり曜の顔も赤い。
「ほら玲士、どうするの」
「まあ、明日は予定ないし、いいよ」

「やったあ！ありがとう」
「うわっ、曜!?」
　すると曜は勢いよく玲士に抱き着いた。
「たーだーしー条件があるぞ」
「「条件？」」
　玲士が求める条件とは一体何であろうか？私も思わず聞き返してしまう。
「かな姉と一緒じゃなきゃ僕は行かない」
「果南ちゃん!?」
「私!?」
「だってかな姉を差し置いて僕だけ楽しむなんて姉弟として不公平じゃないか」
「そんな私に気を使わなくていいから、二人で行ってきなよ」
「じゃ僕は行かない」
「そんなぁ～」
　そういうと玲士はそっぽを向いた。
「ねえねえ果南ちゃんも一緒に行こうよ！」
「えぇっ、そんな急に・・・」
　そういうと曜はがっくりと肩を落とし目線を下げる。
「どうしても・・・？」
　そして再び目線をあげて子犬のように目をキラキラさせてこちらを見上げる。
「ううっ・・・」
　曜は昔から何かあるとこうするのだ。しかも破壊力抜群、昔からこの頼みを断れたことは私といえどもないのだ。
「し、しかたないなぁ」
「わーい!!ありがとう果南ちゃん!!」
　ころっとかわって大喜びする曜。曜は昔からこうすぐ表情を変えるのだ。
「よーしハグ！」
　すると曜はいきなり私に抱き着いてきた。

「わわっ、いきなり!?」
「なあっ、曜、僕だって！」
　するとまた玲士も妙な対抗心を起こして私に抱き着く。
「もう、二人とも暑苦しいってばぁ！」

　なんだかよくわからないが、こうして明日の曜と玲士のデートに付き合うことになったのだった。

～～～

なのだ。
「ほ、ほら、行くであります！」
　曜の案内でまずは商店街を回ることになった。いつも来慣れているが、ここの案内については曜の方が詳しいだろう。
「最近、新しいお店ができたんだ。そこをぜひ紹介しようと思って」
　曜について来てやってきたのは喫茶店であった。周囲の店舗に比べて外装も綺麗であり一目で新しい店舗だとわかる。
「二人とも何にする？」
「うーん、私はアイスティーでいいかな。玲士は？」
「決まってるじゃないか、クリームソーダ」
　僕は迷わず答える。やはり子供っぽいかな？
「やっぱり、玲士君は昔から変わってないであります」
「べ、別にいいじゃないか好物なんだし」
　しばらく待っていると注文の品が来た。曜はどうやら僕と同じクリームソーダを頼んだようだ。
　僕は真っ先にストローを加えてメロンソーダを飲む。
　メロンソーダにアイスが解けた独特の風味が口の中に広がる。何ともいい気分だ。
「玲士君」
「ん？」
「はい、あーん」
「な、何をするんだ曜いきなり」
　すると曜は突然スプーンでアイスをすくって僕に差し出してきた。
「もう、ちょっとくらいいいじゃん」
「よくない。それを僕にやっていいのはかな姉だけなんだからね！」
「全く玲士ったら適当なこと言って・・・。そんなこと言うんならもうやってあげないよ」
「ええっ!?そんなぁ」
　曜からされるのは恥ずかしいが、かな姉からされてもらわないと辛いものである。
「仕方ない、今回だけだぞ」

「やった！」
「あ、あーん・・・」
「えへへっ」
　僕は恥ずかしながら曜の「あーん」を受けるのであった。

　其の後喫茶店を出た僕たちは歩いて深海水族館がある沼津港へと歩いていく。そこそこ距離があるが曜といつもの日常の話をしていると自然と足も速くなり苦にならない。
「それにしても、本当に僕なんかでよかったのか？一緒に来るの」
「もう！またそんなこと言って、玲士君だから良いのであります」
「ふーん変なの」
　そしてしばらく歩いて水族館に到着した。熱い音とは違って冷房が効いている館内はとても心地いい。
「なんか水族館の雰囲気って好きだな、なんか薄暗くてひんやりしてて」
「曜ちゃんも同じであります！」
　こうして館内を回ることになったのだがなぜか曜はさきほどから僕にくっついている。
「ねえ見て見て果南ちゃん、この魚玲士君に似てない？」
「ほんとだ、そっくり」
「なぁっ、ひどいじゃないか二人とも・・・」
　そして僕たち三人はいよいよ名物である冷凍シーラカンスのところまでやってきた。
　何千年も前から全く変わらない姿をしているといわれているシーラカンス。なんだか見ていると不思議な感覚に陥ってしまう。
「すごいよなぁ、ずっと姿が変わってないんだよね」
「曜ちゃんは玲士君とずーっと一緒にいたいであります・・・」
　すると曜が僕の袖を引っ張りながら曜が何か言ってきた。
「僕もだよ」
「ふえっ!?」
　すると曜は驚いたような声をあげて少しのけぞった。何か変な事

でも言ったのであろうか。
「ちょっ玲士・・・」
「千歌とか梨子ちゃんとかＡｑｏｕｒｓのみんなでずっと一緒にいれるといいね」
「あはは、そうだね・・・」
「バカ、鈍感・・・」
そしてお出かけの最後はびゅうおに上ることになった。海に沈みかけている夕日はとても神秘的でいつみても素晴らしい。
「二人とも今日はありがとね！」
窓から見える夕日をバックに曜が言った。
「いいよそんな。またいつでも言って」
かな姉はそう答えて曜を撫でた。
「えへへっ」
「あっ、ずるいぞ曜！」
僕は思わず声を出してしまった。かな姉にナデナデされるのは僕の特権なんだからね！
「あのね二人とも、最後に一つ言っていい？」
「別にいいけど、どした？」
すると曜は一度大きく息を吐いて大きく吸い込んだ。
「果南ちゃんも玲士君もだーーーあーーーいすき!!!」
そう言う曜の笑顔は今日一番のとびっきりの笑顔であった。
～～～

「曜だけじゃないよ、千歌や梨子ちゃんからもさ」
「えっ、そんなぁ」
確かに僕は千歌や梨子ちゃんと仲良くしているのは事実だが、それがどうかしたのであろうか。
「とうとう玲士もお姉ちゃん離れかぁ」
「ちょっと待ってよかな姉。たとえどんなに魅力的な女の子が僕に近づいてきたって、僕にとって一番なのはかな姉だけさ」
「本当？」
「ほんとのほんとさ」
「うむ、よろしい」
そういうとかな姉は僕の頭を撫でた。心なしか表情も少し元に戻ったような気がする。本当に何だったのだろうか
「えへへへ・・・、かな姉にナデナデされるの大好き」
「全く玲士はいつまでたっても甘えん坊なんだから」
「ずっと甘えてるもんね」
曜といるのももちろん楽しかったけど、やっぱりいちばんはかな姉の隣にいるときなんだな。
そんな事を想いながら内浦に向かうバスに揺られるのであった。

ｋａｎａｎ，ｓ　ｍｏｎｏｌｏｇｕｅ
「ずっと一緒に居たい」なんてもはや告白だろう
でも玲士ときたらその意味も解せずに変に受け答えをするもんだから困ったものだ。
それにしても玲士はほんとに女の子に好かれる。
しかし彼はそれを自覚していない
玲士の鈍感にはあきれたものだ。
それにしてもあんなにお姉ちゃん以外の女の子にニコニコしちゃって・・・嫉妬しちゃうよまったく。

桜内梨子と湯けむり温泉旅行

「洗剤は買った、後は・・・」
今日の松浦玲士は沼津へ買い出しに出掛けてるのだ。
天気もいいのでかな姉は今頃海の中だろう。
商店街で買い物を済ませた僕はいつもならすぐにバス乗場に向かうところであるが、今日は違った。
「よーし、いいもの当ててかな姉をびっくりさせてみせるんだから」
僕が向かったのは商店街の真ん中に設けられた特設テント、そして手にはチケット。そう、福引きである。
おいしい旬の食べ物や家電、商品券などたくさんの賞品があるが、もちろん狙うのはなんとも素晴らしい温泉旅館のペア宿泊券である。
もしかな姉と二人きりで行けたらどれだけ素晴らしいことであろうか。近くの商店街で和服でショッピング、温泉後で卓球（得意じゃないけど）二人で布団の中で寝るまで思い出を話し合う、ああ、幸せな妄想がどんどん膨らんでいく。
「ああ、かな姉かな姉・・・」
「れ、玲士君？どうしたの・・・？」
振り返るとワインレッドの美しい髪の人物がその場にいた。梨子ちゃんである。
「や、やあ梨子ちゃん。もしかして梨子ちゃんも？」
「うん、お母さんにお使いを頼まれたの。一枚だけだけどね」
「えらいねぇ梨子ちゃんは」
表面上は世間話でやりすごしているが内心は冷や汗ものだ。まあ商店街の真ん中で妄想癖を炸裂させている僕が悪いのだがまさか知り合いに見られていたとは思わなかった。てか絶対返って思われてたよね今!?女の子の間で広まるうわさは恐ろしいものであるから油断はできないのだ。
カランカランとハンドベルが鳴り響く音で現実に戻される。どうやら何か当たったようである。
「そうだ、お先にどうぞ」

「そんな、玲士君が先にいたんだし・・・」
「いいよいいよ、どうせ僕なんて何て当たりっこないから」
「それじゃあ・・・」
　こうして僕は梨子ちゃんの後ろに並ぶことになった。
「そういえば、もし一等が当たったらどうする？」
「うん、お父さんと母さんにあげるつもりだよ」
「僕は当然かな姉さ」
「あはは、やっぱり・・・」
　順番になり梨子ちゃんはチケットを渡し、取っ手を握り抽選機をゆっくりと回していく。
「「あっ!!」」
　まばゆいばかりの金色に輝く球が抽選機から排出されたのであった。

「それで、このティッシュの山はなに」
「すみません・・・」
　あの後僕は梨子ちゃんに負けじと持てるお小遣いを振り絞ってやったのだが無念なことに当りは出なかった。そして今かな姉のお叱りを受けているということである。
「まったく玲士は・・・。何度も言ってるでしょ、よく考えてお金を使わなきゃダメだって」
「だって、梨子ちゃんが目の前で1等出したから僕だって・・・」
「こら、言い訳しない」
「はぁい・・・」
　僕はおとなしく引き下がる。こういう事に関しては僕は昔からかな姉に頭が上がらないのだ。
「まあこれくらいにしよっか。それにしても本当に当たるもんなんだね」

「ほんとほんと」
　きっと今頃桜内家は幸せに包まれているのだろう。そんな事を思いながら一日を終えようとするのだった。

～～～

たりしてくれるからそのせめてものお礼というかなんというかで別に玲士君が嫌だったらいいんだけど・・・。やっぱり、嫌だよね私みたいな地味な娘となんか・・・」
「わかったわかった、とにかく落ち着いて梨子ちゃん」
　ものすごい早口で話す梨子ちゃんを僕は何とか落ち着かせる。
「よ、要はあの福引の旅行を一緒に行ってほしいってこと・・・？」
　すると梨子ちゃんは再度顔を赤くして頷いた。
「えっ、ぼ、僕なんかでいいの？千歌とか曜とか善子ちゃんとかじゃなくて？」
「う、うん・・・」
　どうしてなのか、全く訳が分からない。もちろん三人とも梨子ちゃんと喧嘩などしている様子もないので、普通なら行かない理由がない。
「ほら、玲士君はいつもＡｑｏｕｒｓのために頑張ってくれてるし、少しでもお礼がしたいなって・・・」
「そんなそんな、僕は当然のことをしてるだけで、お礼されるほどの事じゃないよ。それに僕なんかと行ったって楽しくもなんともないよきっと」
　確かに梨子ちゃんのご好意はありがたいがいくら何でも温泉旅行なんて身に余る。
「こら玲士、またそういうこと言って。梨子ちゃんを困らせないの」
「果南ちゃん！」
　どうや近くで話を聞いていたかな姉が入ってきた。別に僕は困らせてるんじゃないんだけど・・・
「せっかく梨子ちゃんが誘ってくれたんだし、行かないと悪いよ」
「で、でも・・・」
　かな姉はどういうわけか僕に行くように勧める。
「玲士もあんなに羨ましがってじゃん」
「か、かな姉なんでそれを・・・」
「そうなの玲士君？」
　かな姉の言葉に反論のしようがなくなってしまう。

確かに羨ましがっていたのは事実だが、わざわざそれを言わなくたっていいじゃないかと思ってしまう。一体かな姉はどうして僕をそんなに行かせようとするのであろうか。
「た、たしかにそうだけど・・・」
「なら、断るのも失礼だし行ってあげなって。それに、千歌と曜とだけ遊んで梨子ちゃんだけ断るなんて不公平だよ」
「たしかに・・・」
別に梨子ちゃんだけを省いたつもりはないが、確かにかな姉の言う通りだ。
「僕でよければご一緒させてもらおうかな」
「あっ、ありがとう玲士君！」
すると梨子ちゃんはさっきまでの様子とは打って変わって満面の笑みを浮かべる。僕と行くことがそんなに嬉しいのかなぁ。
「あと、さっき言ってたけど、梨子ちゃんは地味な娘なんかじゃないよ。とっても素敵な人」
「はわわわわ!?」
「まったく玲士は・・・」
またもや顔を真っ赤にして慌てた様子を見せ、反対にかな姉はあきれたような目で僕を見ている。一体どうしたのであろうか？

～～～

ちなみに梨子ちゃんのご両親には事前にお礼を言いに行ったのだが、なぜかお母さんは『いいのいいの～、それよりうちの梨子をよろしく頼むわね～』とにこにこしていた。

なにが『よろしく頼む』なのかよく分からなかったが、旅行中に面倒を見てくれということなのだろう。

梨子ちゃんの方がしっかりしているからどちらかと言ったら僕が面倒を見られる方なんだけどなぁ・・・

そうこうしているうちに今晩泊るお宿に着いた。調べたところにあると歴史ある立派なものであるようで、中に入るといかにも歴史のありそうな和風建築が出迎えてくれた。

「ご連絡承っております。本日ご宿泊の松浦玲士様と『松浦』梨子様ですね」

「はわわわわっ!?!?!?」

「へ・・・？」

あまりに突然の事なので思考が追い付かない。何とも心臓に悪い間違いだ。

すぐさま誤っている旨を伝えると相手もすぐに謝罪し事なきを得た。どうやら連絡の段階で取違があったようである。

「ま、松浦梨子、松浦梨子・・・」

梨子ちゃんは名前を間違えられたことがよほど恥ずかしかったのか何かを言いながら顔を真っ赤にしている。そんなに恥ずかしいかなぁ？

来て早々予想外の事に見舞われたが、なんとか切り抜けて部屋に向かうことにした。

「やっぱりすごいんだなぁ」

部屋に入ると畳の良い香りが鼻孔をくすぐる趣がある和室で、窓から見える景色もまるで一枚の絵画のような非常に美しいものである。

僕たちは荷物を下ろして一息つくことにした。

「なんかぴったりだね、梨子ちゃんと日本間って」

「どういうこと？」

「うーん、なんて言うんだろう。日本間の落ち着いた雰囲気と梨子ちゃんの奥ゆかしい感じがすごい似合っているというかなんというか・・・。」
「もう!玲士君!!」
　すると急に梨子ちゃんが大声を出したので驚いてしまう。僕は何か悪い事を言ったのだろうか。
「へ??」
　すると梨子ちゃんが我に返ったような様子になり急にあたふたし始める。
「だから、そのっ、玲士君はいつもいつも私も褒めてくれるから私には勿体ないというか、私なんか全然奥ゆかしくないよ!」
「そうやって慌ててるとこもかわいいよ」
「もう知らない!」
　すると梨子ちゃんはそっぽを向いてしまった。女の子の考えることは複雑怪奇だ。だって本当にかわいいんだけどなぁ。

　しばらくすると梨子ちゃんは機嫌を直してくれ、温泉に入ろうということになった。
　無論温泉は男女別々なので僕たちは分かれ、浴場に向かう。やっぱり有名な温泉宿ということで非常に立派である。どうやら時間帯が少し早かったからか、男湯には誰もいなかった。
「はふぅ〜」
　僕は簡単に体を洗い、檜でできた大きな湯船につかる。
「ほんとに僕でよかったんだろうか・・・」
　しばらく湯につかっていると、ふとそんなことが頭に浮かぶ。
　どうして梨子ちゃんは僕を選んだのだろうか、どうしてかな姉はあれほど僕に行くことを勧めたのか、考えてみればこの旅行には疑問が尽きない。
　かと言って、それを梨子ちゃんにいちいち聞いたり追及したりするのもせっかく誘ってくれたのに失礼だし、この疑問を解消するすべがないのである。

今頃湯船につかっているであろう梨子ちゃんはどんなことを考えているのであろうか、そんな事を思いながら女湯を隔てる壁に目を向けるのであった。

～～～

「梨子ちゃん、今日はありがとね。こんな素敵な所に招待してくれて」
改めて僕は今日のお礼を言う。
「私も玲士君が喜んでくれて嬉しいわ」
「それで、お礼と言っては何だけど」
僕は満を持して、隠し持っていたあるものを取り出して梨子ちゃんに渡す。
「これって・・・・!」
僕が手渡したのは桜の飾りが付いた髪飾りである。
実は先程二人で入ったお店で売られていたものである。梨子ちゃんは気に入ったようだが高いからという理由で結局買わず仕舞いに終わったのだ。
「でもそれ結構高かったんじゃ・・・・」
「僕がここに来れたのは梨子ちゃんのお陰。だからこれくらいなんて何ともないよ。さっ、着けてあげる」
「ありがとう!」
髪飾りを着けてあげたことなどないので、少しばかり時間を要したが、なんとか上手いこと着けることができた。
「どう・・・かな?」
「うん、とっても似合ってるよ」
髪飾りを着けた梨子ちゃんは、まるで桜のつぼみがまた一輪咲いたかのごとくいっそう美しいものであった。
僕たちはそのまま特に景色が良いという渓谷に架かる橋の真ん中まで移動した。
眼前に広がる渓谷からは湯けむりが立ち込め、ライトアップされていることもあってとても良い雰囲気を醸し出している。
「綺麗だね」
「うん、すごく幻想的」
「こんな景色をかな姉に見せてあげられないなんて勿体ないや。そうだ」
僕はスマホを取り出してその光景を写真に収める。
「よし撮れてるぞ」

僕が画面を確認していると梨子ちゃんが僕の浴衣の袖をくいくいと軽く引っ張ってきた。
「ねえ玲士君、せっかくなんだし一緒に写真でもどうかなって・・・」
「いいね、やろうやろう。でも誰かに撮ってもらわないとね、ちょっと頼んでみるよ」
そう言って僕が道行く人に声をかけようと歩き出す。
「待って！」
すると後ろからに呼び止められた。振り返ると梨子ちゃんが先ほどとは明らかに違う様子でこちらを見ていた。一体どうしたのだろうか。
「人呼ばなくて大丈夫だから・・・」
「へ？」
そして僕の方へと歩みより、腕を引っ張って僕を引き寄せて肩と肩が触れ合った。
「り、梨子ちゃん？」
そして梨子ちゃんは僕の困惑をよそに左手で僕と腕を組み、スマホを持った右手を斜め上に掲げた。
「こうすれば、二人だけでも撮れるでしょ」
そう小声でささやいた後、カメラのシャッター音が鳴った。
ここまで来てやっと梨子ちゃんの行動の意味が分かったのと同時にその突然の行動にドキッとしてしまう。
いくらＡｑｏｕｒｓのお手伝いさんをしているとはいえ、かな姉（と勝手に抱き着いてくる鞠莉姉）以外の女の子とここまで密着するようなことは初めてだ。
しかもそれを梨子ちゃんがやったというのだから驚かないはずがない。
「ふふっ、びっくりしちゃった？」
「ちょっとね。もしかして、さっきから考えてたのって・・・」
「ばれちゃったか」
梨子ちゃんは少しあざとっぽく笑った。
「でも、どうして急に」

「そんなの決まってるじゃない」
そして梨子ちゃんは一呼吸置き僕の目をまっすぐと見つめた。
「だって、玲士君との思い出を残したかったからに決まってるじゃないの」
「梨子ちゃん・・・」
その言葉にどういうわけか僕は何かに打たれたような感覚を受けた。
一緒に旅行した証を残す、何ともない普通の事かもしれないが、その言葉にどういうわけか僕は一種の感動に似た感情すら覚えてしまう。
その言葉の裏にある梨子ちゃんの、ある種の何かに対する決意のようなものを感じ取ったのかもしれない。
それがどんなものか僕にはまだわからないが、いずれ分かる時が来るのであろうか。
「ありがとう。さて、一通り楽しんだことだしそろそろ宿に戻ろうか」
「うん！」
僕たちは旅館への帰り道を歩く。
僕の隣を行く梨子ちゃんの姿は今日一番の美しさであった。

二人の弟と姉への想い【コラボ作品】

「おはようございます、今日はよろしくお願いします」
そう言って連絡船から降りてきた奥山明は頭を下げる。
その大柄でがっしりとした体は、対岸から向かってくる船のデッキにいるときからよく見えた。
「明くん、今日はよろしくね！」
「よろしく」
彼は今日、わがダイビングショップの臨時店員として働いてもらうこととなった。
最近このあたりがテレビで紹介されたらしく、その影響か我がダイビングショップにもひさしぶりに団体で予約が入ったのだ。
無論多くの人がこの内浦、淡島に訪れてくれることは喜ばしい限りだが、人員の少ない我が家としては大変だ。うちの家族だけでは到底対応しきれない。
そこでかな姉が彼をスカウトしたのだが、僕がそれを知ったのは一昨日の夕食の時であった。

～～～

ないだろう。
一体誰であろうか？
「ああ、玲士には話してなかったっけ。奥山君だよ。空手やってるから体力もあるし」
「奥山君だと・・・」

～～～

明の呼び方もさることながら、それ以上にかな姉がその呼び方になにも疑問を持ってない方が僕にとって衝撃だ。
「だってかな姉、『かなっち』なんて呼びかた・・・」
「私がそう呼んでって言ったから良いの」
「なぬ!?」
今度はかな姉の口から発せられた衝撃の言葉に絶句する。これまた初耳だ。いくら同じＡｑｏｕｒｓのマネージャとはいえこれほどなれなれしく接されるのは僕としても納得がいかない。
「な、なんで・・・」
「いいじゃん、そんなに気にしなくても。そんなことより準備するから二人ともこっち来て」
かな姉についていき父さんと母さんがもう既に準備をしていた。
「あら、あなたが奥山君ね。いつも果南から聞いてるわ、今日はよろしくね！」
「おう！よろしくな！」
両親はかな姉と同じく明朗快活。いつもは内浦と沖縄にある店を行き来していていてどちらかが不在ということも少なくないが、今日は団体が来るということなので戻ってきたというわけである。
「はい、玲士のスーツ。今日はしっかり頼むよ」
そう言ってかな姉から少し暗めの緑が買った色の僕用のスーツを渡される。
「玲士さんも潜るんですか？ちょっと意外です」
「何を言うんだ、僕だって　店の一員なんだから当然さ」
「こら、そんなこと言ってると奥山君に抜かされるかもよ。二人でそこのボンベ運ぶの手伝って」
「はーい」
お客さんが来るのに備えて家族皆で機材を用意したり準備を整える。
明くんは初めてだというのに、言われたことをそつなくこなしている。かな姉が言ったことが現実になりかねんな・・・
そして、お客さんがやってくると、予想通り休む間もなく働くこと

となった。僕も久しぶりに何度も潜ったり、陸の上でお客さんに潜り方やスーツの着方などを教えたりと大忙しとなった。
「奥山君、お客様の案内お願い！」
「わかりました。はい、皆さんご案内しますので私についてきてくださーい」
「玲士！フィンあと二組持ってきて！一つはサイズ小さいやつ」
「待って、今行く！」
「すみません、これはどこに・・・」
「はい、これはですねまず・・・」
休みなく動き回っているのに疲れた様子一つ見せず、お客さんからの質問にてきぱきと答えている。
おのれ明くん、中々やるな・・・さすがかな姉の見込んだことはある。
「玲士、奥山君、ちょっと落ち着いたから休んでていいよ」
「ありがとうかな姉。後はお願い」
「ありがとうございます」
僕たちはいったんお店の中に戻って椅子に腰かけ一息ついた。
「お疲れ明くん。すごいんだね、やっぱり武道やってる人は体力も違うなぁ」
「玲士さんだってすごいじゃないですか。正直な話、あんなに体力あるなんて思ってなかったです」
「まあ、多少は。本当よく言われるんだよねぇ～」
確かに僕はそんなに身長も大きくないし、色白だからよく体力ないって思われることも多い。それどころか1年生に間違われることさえある。昔からの私のコンプレックスだが、かな姉との身長差が少ないからハグしやすいという唯一にして最大の利点があるから何とも悩むところである。
「二人ともお疲れ～」
母さんがスポーツドリンクのペットボトルを持ってきた。
「ありがとう母さん」

受け取ると直ぐに蓋を開け、喉が渇いていたので一気に半分ほど飲み干す。明くんも同様だ。
「それにしても明君、初めてにしてはなかなかやるわね」
「いえ、それほどでもないですよ。果南さんや玲士さんに比べたらまだまだです」
「そんなことないわよ。体力もあるし、お客さんの対応もできてたじゃない。いっそのとこ家で働いてくれないかしら？住み込みでもいいわよ♪」
「なっ！か、母さん何て事を言うのさ！」
母さんの突飛な発言に危うく持っていたペットボトルを落としそうになる。いくら明くんと言えどもかな姉が家族以外の「男」が一緒に暮らすことは容認できるものではない。
「あら？玲士だっていつも言ってるじゃない、『家にもう一人ぐらいいてくれたら楽になるのにな』って」
「うぐぅ・・・確かに言ったけど・・・、これ以上人を雇ったらお小遣いが減っちゃうじゃないか・・・」
「まあ、いつも忙しいって言ってますから」
その後もお客さんへの対応は順調に進んだ。
お客さん全員が陸に戻り、後は着替えて帰るだけとなった。いつもは泳いだ後も笑顔なかな姉の顔にも疲れの色が見えている。
しかし、最後の最後に事件が起こった。それは一瞬の出来事だった。
「すみませーん・・・あっ！」
調度店の入り口の前にいるボンベを抱えたお客さんが足を滑らせ、その拍子にボンベが手から離れ宙に浮いた。
その様子は僕の目にスローモーションのようにゆっくりと映る。
しかもタイミング悪くボンベが落ちるであろう階段の下にはかな姉がいる。
「かな姉危ない！」
「「果南！」」
僕があっけにとられてると何がが横をサッと通りすぎた。

明くんだ。
僕もそれにつられて動き出す。
彼は一瞬にして持っていたアクアラングを横に投げ捨て、とっさにかな姉を伏せさせ、間一髪のところでボンベをかわした。
僕は渾身の力を振り絞って跳躍し、地面に落ちる寸前のところでボンベをキャッチする。
「よしっ！」
そしてそのままの勢いでボンベを抱えたまま地面にぶつかる。
「玲士！大丈夫⁉」
「玲士さん！」
「「玲士!!」」
かな姉や明くん、両親が駆け寄って来る音がする。
抱いているボンベを支えにやっとのことで起き上がる。
ああ、よかった。かな姉が無事で。
そう安堵した途端、一日の疲れがどっと出てくる感覚に襲われ、立ち上がったはずなのにその場にへたり込んだ。

～～～

そんな風に他愛もなく今日のことを振り替えるが、僕の心は暗かった。
自分にとっての一番大切な人を自分で守ることができなかった。
それが僕にとってはなによりも悔しかった。
無論かな姉を助けてくれた明くんには感謝してもしきれない。
しかし、あの時かな姉の一番近くにいたのは僕だったのに、すぐに動くことができなかった。
それが僕の心の奥底に引っかかったままだ。

「やっぱり、駄目だね僕は・・・」
そんな気持ちから、自然にそんな言葉が口から漏れてしまった。
「なにがです??玲士さんも今日は十分頑張ってたじゃないですか」
「えっ、いや・・・その・・・僕はかな姉のことは口ばっかりで全然ダメだなって・・・ほら、さっきだって奥山君みたいにとっさに動けなかったし。僕はいつもかな姉に守ってもらうばっかりで、大切な人なのに守ってあげることができない自分がなんというか・・・僕も明君みたいに強かったらなぁ、って・・・」
身長も同年代の男子に比べてそんなに高くなくて細身。おまけに気も弱く、たがら何かあるといつもかな姉の背中に隠れて、震えながら泣いていた。
だからいつも思っていた。僕がもっと強かったら、男らしかったら、かな姉を守ってあげられるのにな、と。
僕がそこまで言うと明くんは僕の瞳をじっと見つめる。細い　色から放たれる目の鋭い眼光に思わず少しのけぞってしまう。
「玲士さん、あなたは今のままで十分果南さんを守れてますよ」
「えっ？」
しばらくの沈黙の後に返ってきた予想もしてなかった返答に少し驚いてしまう。
「あなたが果南さんを想うその気持ちこそ、なによりも果南さんを守ることになるんです。だから、果南さんを守る事に関してはあなたに敵う人はいません。さっきだって、一番先に叫んだのは玲士さんで

しょ。あの忙しい状況の中でも常に果南さんの事を気にかけてられるってだけで十分すごいことです
「だから、果南さんの事に関してはあなたに任せます。しっかり守ってあげてください。一緒にいられるだけで幸せなんですから」
「明くん・・・」
彼は、まっすぐ僕の眼を見てはっきりそう告げた。言葉の重みが違う。
「でも・・・、決して俺みたいにはならないでください・・・。あなたのその純粋さは時として恐ろしいものになりかねませんから・・・」
『純粋さは時として恐ろしいものになりかねない』
その言葉は僕に言い知れぬ不安を与えた。
実際、自分でもかな姉を盲信しすぎなんじゃないかと思うことがある。
盲信ほど恐ろしいものはない。自分は、大好きな人のためなら手段を選ばないような人間になってしまっていないだろうか？
もし僕が幼いころの明くんと同じような状況になったら、誰かが危害を加えようとしてかな姉の身に危機が迫ったら、僕はどうしていただろうか。
もしかしたら、僕も明くんと同じことをしていたかもしれない。
そう考えると言葉に表せないような複雑な感情が沸き起こってしまう。
「まあ、その時は俺が殴ってでも何しても全力であなたを止めますから」
「・・・ありがとう明くん」
そう僕の瞳をまっすぐ見つめて話す彼の姿はとても頼もしく見えた。
「そういえば、実は会ってみたいなって思ってるんだ、明くんのお姉さんたちに。まだ会ったことないからね。その時は明くんも一緒に・・・ね？」
彼の姉はあのＳａｉｎｔ　Ｓｎｏｗの鹿角聖良と理亞。実は松浦玲士は彼女たちに会った事がないのだ。Ａｑｏｕｒｓのお手伝いを

させている身としてぜひとも会ってみたいと思っているのだ。
「玲士さん・・・あなたはそう簡単に言いますけど、例え俺が会いたいと思っても、姉さん達は俺の事なんか受け入れてくれないですよ。『もう私達に関わらないで』って。だから・・・」
さっきとは打って変わって僕を見る目が一段と細くなり声のトーンも下がる。
あんたなんかには俺の気持ちなんか分かるもんか、わかってたまるか。
彼の表情からそう言わんとしてる事がわかった。
『二度と関わらないで』
人を殺めてまで守った愛する家族から発せられたその言葉は今も彼の心に外れることのない鎖となって絡みつき、『人殺し』という背負った十字架と共に今なお彼を苦しめ続けている。
私みたいな人間には想像もできない苦痛だろう。
「でも、相手を信じて、自分の気持ちを正直に打ち明けてみればいいんじゃないかな?ずっと辛かったこと、自分の事を受け入れてほしいことを」
「玲士さん・・・」
「もちろん、今の明くんにはすごく難しいと思う。それはわかってる。でも、自分の正直な気持ちを心から伝えて、本気でぶつかってみる。そうすれば相手ももわかってくれる。僕はそう思ってるんだ。それでもダメな時は・・・」
「・・・ダメなときはどうするんですか」
「思いっきりハグしてみる!」
僕がそう言ったとたんに明くんは間の抜けた顔になった。喧嘩したり、お互いの心が離れそうになった時はハグをする、そうすればどんな相手とも繋がれる、かな姉からの教えだ。
「あなたが果南さんの弟だってことを忘れてましたよ・・・」
彼は頬を少し緩ませてそう言った。
「もしかして、玲士さんもかなっ・・・んさんと何かあったんですか?」
「まあ、ちょっとね」

確かに彼の言うとおりなのだが、別に今話すことでもない。
「二人とも起きてる？」
するとノックの後に部屋の扉が開き、パジャマ姿のかな姉が現れた。
「玲士、明くん、ちょっと来て」
「かな姉？何？」
かな姉に言われるがまま僕と明くんはかな姉の方へ向かう。
「どうしたの？」
「ハグッ!!」
かな姉はいきなり両手を広げてそのまま僕たちをまとめてぎゅーっと抱き締めた。
「うわっ!?かな姉!?」
「果南さん!?」
「玲士、明くん、今日は本当にありがとね！」
そのままかな姉は一分以上僕たちを抱きしめ続けた。これほど長いハグは久しぶりだ。
「か、かな姉、どうしたのさ急に」
「だって今日は二人ともすっごく頑張ったから。今日は本当にお疲れ様！せめてものお礼だよ！嫌だった？」
かな姉は屈託のない無邪気な笑顔で僕たち二人の頭を撫でる。
「い、嫌なんかじゃないもん！で、でも明くんがいるし・・・」
「そんなに気にすることじゃないでしょ。せっかく泊まるんだからやっぱり三人で寝ようよ。こんな機会滅多にないんだし。いいでしょ？」
「ええっ!?だって・・・」
「俺は別に構いませんが」
「ほら、明くんも良いって言ってるんだし」
「か、かな姉がそんなに言うのなら・・・」
かな姉があまりにも言うので渋々納得するのだった。
「布団出すから待ってて！」

そう言ってかな姉は布団を取りに戻った。
「明くん」
「はい？」
「改めて今日はありがとう。そしてこれからもよろしくね」
かな姉が去った後、僕は改めて明くんに今日の感謝を伝える。これからも頼りにしてるよ、僕と同じＡｑｏｕｒｓのマネージャーとして、そして守り人として。
「どういたしまして。またいつでも手伝いに来ますよ」
「あともうひとつ」
「今度はなんです・・・？」
「カナ姉ニヘンナコトシタラショウチシナイカラナ」
「はいはいわかってますよ」
その時の彼の表情は今日一番の優しい顔であった。

玲士の悩みとＡｑｏｕｒｓの心配【果南ちゃんお誕生日記念回】

「また玲士の様子が変??」
「そうなんだよね??」
　昼休み、机を囲んで一緒にお弁当を食べている鞠莉とダイヤに最近の私の悩みを相談してみる。
「それは心配ですわね。また以前のようにお店がお忙しいのですか？」
「いや、忙しくて疲れてるって感じじゃなくて、なんかずっと考え込んでるというかなんというか??」
　私が話しかけてもすぐには反応してくれないし、なにか小声で独り言を言っている。私がなにかあったのかと聞いても「何でもないよ??」としか返してくれない。もちろんその時は目をそらし、右手は頭を掻いている。嘘をついている証拠だ。
「それなら問い詰めちゃえばいいじゃない。玲士ってば押しに弱いんだし」
「いや、さすがにそこまでは??」
　鞠莉の言うとおり、玲士は押しに弱い。たわいもない事なら問題ないが、こう深く悩んでるとどうもためらってしまう。
「じゃあマリーが代わりに聞いてあげるわ！」
「鞠莉さん、人に言いたくないことを無理やり聞き出すのは、よくありませんわ」
「だって心配なんだもん！　もしまた一人で抱え込んでたりでもしたら??」
「こら鞠莉、落ち着いて」
　私もそう言って鞠莉をなだめるも、なんだか不安になってきた。
「いくら玲士さんといえども、どうしても人に相談できないことのひとつや二つあってもおかしくないですわ」
　そんなことはわかってる。でも私は玲士の姉だ。いままで相談し

たり、されたりするの事なんて数えきれないほどあった。だから、昔からずっと一緒にいる私にも相談できないなんて余計に心配になってしまう。
「ですから、どうしても知りたければ、本人の口からお話ししていただくほか方法は無いですわね」
ダイヤの言葉に一応納得はするものの、私の心の中のモヤモヤは募っていくばかりであった。

～～～

な男子はＮＧ！』という見出しが目に留まった。
「えーっとなになに??、『人の気持ち気づけないニブニブな男子なんて超ＮＧ！』」
なんだか少し胸が痛い。かな姉にも昔から自分に向けられる気持ちに鈍いって言われてるし、やっぱり駄目だなぁ僕は。ヘマをして皆から嫌われないように気を付けなきゃ。
「玲士さん」
呼ばれる声に振り替えると、花丸ちゃんであった。
その手に鍵を持っているから図書室を閉めに来たのだろう。
「あっ、花丸ちゃん。ごめんごめん、すぐ出ていくよ」
「そんなに急がなくてもいいずら。それにしても、玲士さんが雑誌を読んでるなんて珍しいずら」
「えーっと、ちょ、ちょっと面白そうな本を探しててたまたま手に取ったらつい長居しちゃって」
さすがに自分から進んで女子向けの雑誌を読んでた事を知られるのは恥ずかしいので、とっさにはぐらかしてしまう。
「なるほど、たまには自分が普段読まない本を読むのを面白いずらね」
「あはは、そうだね。さて、そろそろ出ていかなきゃね」
そしてさっさと雑誌をもとの場所に戻して、花丸ちゃんと共に図書館を後にした。

～～～

私が玲士から今日は少し遅れると連絡があったことを告げると、案の定みんなが話し始めた。
「ねえ果南、ずっと考え込んでる以外に何か変わったことはなかったの？」
「変わったことねぇ??、あっ！　そういえば！　いやっ、でも??」
みんなの視線が一気に私に集まる。
実はもう一つ気になっていたことがあるのだが、これは関係あるのかわからないから、言うのをためらってしまう。
「もーう、気になるじゃないの。教えてよ果南」
「えーっと??なんか最近玲士がファッション誌を読み始めたというか??」
「「ファッション誌???」」
きっと今みんなの頭に「？」が浮かんでいるだろう。やっぱり関係なかったよね??
「ほら、千歌がこの間参考にって何冊かくれたやつ」
「えっ、でもあれ女の子向けじゃ??」
「家にあったものを読んでいたわけですから、そんなにおかしな事ではありませんわ」
たしかにダイヤの言うとおりで興味本意で読んでるだけかもしれない。でも、同じページを何回も見返したり、読みながら考え込むそぶりを見せたりと何かが変だ。
「やっぱりそうだよね??」
「でも、玲士さんこの間図書室でも読んでたずら」
その言葉に、今度は視線が花丸ちゃんに集まる。
「果南ちゃんが言う通り何か考え込むようにずーっと読んでたずら。玲士さんがいままそんなの読んでるとこ見たこと無いから、変だなって思って」
花丸ちゃんからこうも言われるとやっぱり何か目的があって読んでいるのだろうが、その目的が何なのか全く見当がつかない。
「ねえ花丸ちゃん、玲氏がどんなページ読んでたかってわかる??」
「そこまでは??」

「もしかして花丸ちゃんが言ってたのってこれ？　衣装の参考用に持ってきたんだけど??」
「それずら！」
　花丸ちゃんは渡された雑誌のページをパラパラとめくり、しばらくして
「これずら！」
　そう言って花丸ちゃんがあるページを指さすとみんなが一斉に寄ってきた。
「『女子が思わずキュンとしちゃう男子の行動アンケート』??　花丸ちゃん、本当にこれなの??」
「たしかにこれずら」
「なんでこんなものを??」
　謎が謎を呼ぶとはまさにこの事だろう。ますます玲士の目的がわからなくなってしまう。
　みんなが考え込んでいると、梨子ちゃんがはっとしたそぶりを見せ、次第に顔が紅潮していった。
「どうしたの梨子ちゃん？」
「も、もしかして、玲士君??、す、好きな人ができたんじゃ??だから??」
「ピギィ!?」
「れ、れ、れ、玲士くんにす、す、好きな人!?!?」
「レイシクンニスキナヒトガ、レイシクンニスキナヒトガ、レイシクンニスキナヒトガ、ソンナソンナ、ソンナソンナ」
「よ、曜。お、落ち着きなさい！」
　梨子ちゃんの言葉の後に一瞬の沈黙の後、みんなが途端に色めき立って騒ぎ始めた。玲士から今までそんな話は聞いたこと無いし、噂も聞いたこと無い。別に玲士も年頃だから好きな娘の一人や二人いてもおかしくはないだろう。

「み・な・さ・ん！」
するとそう言いながら注目を自分に向けるために手を叩いた。
「まったく、玲士さんのプライベートに関して余計な詮索は不要です!! これ以降この話題は禁止ですわ！ 果南さんも！ いいですわね！」
はーい、と皆が返事をしてその場は収まったが、私は釈然としないままであった。

～～～

「お邪魔します」
「約束の時間より１０分も前に来るなんて、さすが私のリトルデーモンね」
　そして翌日、約束通り善子ちゃんの家であるマンションの一室を訪れた。
「そ、それにしても今日はいったい何をするつもり？　ゲーム？」
　善子ちゃんの部屋は昼間にもかかわらずカーテンは閉め切られており、ローソクのうっすらとした明かりに黒いローブを身にまとった善子ちゃんの姿が映し出されているといった状況だ。
「クックック、今はそのような下界の遊びなどに興味はないわ」
「じゃ、じゃあ何を？」
「このヨハネが冥界の王より授けられし魔力によって、悩めるリトルデーモンのことを占ってあげるわ!!」
　そう言っていつものポーズを決める。
「あっ、ありがとう」
　そして促されるままにリビングから持ってきたであろう椅子に座る。目の前の机の上には水晶玉やタロットカード等などいかにも占いに使いそうな道具が並べられていた。善子ちゃんも机を挟んで反対側の椅子に座る。
「これからこのヨハネが３つの質問を与えます。リトルデーモンは包み隠さず答えるのです」
「了解」
「早速始めるわよ。その１、リトルデーモン、あなたは今深淵の闇の如く深い悩みの中にいますね？」
「まあ、そうですね??」
　座って開口一番そう言って僕の瞳を見つめる。きれいな瞳だ。
　いくら親しい仲だとしても、女の子から至近距離でじっと見つめられると少し緊張してしまう。
「ふふっ、思った通りね。このヨハネに隠し事なんて無駄よ」
「ごめんごめん」

やっぱり僕は隠し事はできないみたいだ。かな姉にもすぐ見抜かれる。
「次の質問よ。それはある人物についての悩みですか？」
「そうですね??、凄いなぁ善子ちゃんは」
「さ、さ、さ、最後の質問よ」
さっきとは変わって急にどぎまぎする善子ちゃん。どうかしたのだろうか？
「そ、それは、り、リトルデーモンにとって、や、病めるときも、す、スコヤカナルトキモ、つつ、常にあ、愛を捧げ??」
前の質問と違って急に善子ちゃんの口調が変わってどぎまぎとした、感じになる。最後の部分なんて聞き取れない。
常に愛を捧げる人物??
僕にとってそんな人物はただひとり。
無論かな姉のことだ。
それ以外当てはまるものもない。やっぱり善子ちゃんはすごいなぁ。もしかして僕が分かりやすいだけ??
「そうだね」
「ひいっ！　り、リトルデーモン!!　こ、このヨハネを差し置いてなんたることを??」
え？　どういうこと？
「Ｏｈ　ｍｙ　Ｇｏｄ！」
「ウソダウソダウソダウソダウソダウソダ」
「えっ、よ、よ、よーちゃん!?　だ、大丈夫!?」
「千歌ちゃん！　聞こえちゃうわよ！」

すると何やら急に後ろの方が騒がしくなる。
気になって席を立ち扉を開けると
「「うわっ！」」
扉に体をくっつけていた人物がこちらに倒れこんできて、僕もそれにつられ尻餅をついてしまった。
「「あいて??」」

「三人とも大丈夫!?」
「痛てて??、あれっ、千歌に曜!?　それに梨子ちゃんに鞠莉姉！　なんで？」
後ろを振り替えると善子ちゃんがあたふたしている。
なんで善子ちゃんの家に四人がいるんだ??
ここはこのメンバーのなかで一番の常識人に聞いてみることにした。
「どういうこと梨子ちゃん？」
「実は??」
梨子ちゃんからの話を総合すると、最近僕が悩んでるのは好きな人ができたんじゃないかとＡｑｏｕｒｓのみんなが勘違いして、その真偽を確かめるべく、鞠莉姉の発案で占いに偽装して聞き出そうとした、言うものだった。
「というわけなの??、ごめんなさい!!」
そう言って梨子ちゃんは深々と頭を下げる。
「梨子ちゃんが謝ることはないよ！　謝るのはむしろみんなに心配かけた僕の方だよ！　ごめんみんな！」
僕は頭を下げる。
「それで結局玲士は何を悩んでたの？」
「ああ、僕が悩んでたのはかな姉への誕生日プレゼント何が良いかな、ってだけだよ？
「「「「へぇ!?」」」」
みんなが間の抜けたような声を出す。えっ？　なに？　僕今まずいこと言った??
「じゃあ、みんなに言わなかったのは？」
「だって知られるとカッコ悪いし??。特に千歌なんかはすぐに口を滑らせるじゃないか。小学生の頃に秘密にしておくよう頼んだのに、結局千歌が言って知られたの忘れてないんだから」
「「「「なぁんだ〜」」」」
皆その場にへたり込んだ。ますます何が何だかわからなくなる。
「じゃ、じゃあ愛を捧げるってのは??」

「何を言ってるんだみんな、僕の好きな人なんて、かな姉以外にあり得ないじゃないか！」
「やっぱり、シスコンっぷりは変わらないわね??」
「でもみんなありがとう、『常に愛を捧げる人』って言葉で思い付いたんだかな姉へのプレゼント」
「なになに！　玲士くん！」

～～～

玲士の顔が赤くなっている、照れているのだろう。かわいい。
Ａｑｏｕｒｓの皆からのいろんなプレゼントをもらってきたが、これは予想できなかった。
嬉しいという感情が溢れだしそうな私は目の前の玲士に思いっきりハグをする。
「うわっ、かな姉!?」
「嬉しいよ玲士！　ハグっ!!」
どんな高価なものよりも、私にとってはこれが最高のプレゼントだ。思わず頭を撫でてしまう。
どんな時も一緒にいてくれ寄り添ってくれる一番の家族。
ありがとう、そしてこれからもよろしくね。私の大切なかわいい弟。
そんなことを思いながらちょっと抱き締める力を強めるのであった。

誕生日の朝　【果南ちゃんお誕生日記念】

「んぁ・・・」
　時間通りになった目覚ましの音と、寄せては返す波の音が僕の眠りを覚ます。
「うぅっ・・・眠いししゃむい・・・」
　僕、松浦玲士は朝が苦手なのだ。しかも2月、まだ日も上がりきっていない6時となるとなおさらである。
　いつもなら目覚ましなんてかけずにベッドの上で毛布にくるまり暖かく幸せな空間で夢を見ているだろう。
　しかし、今日はそういうわけにはいかないのだ。
　気持ちを奮い立たせて急いで寝間着からジャージに着替え、軽い栄養補給を済ませて玄関へと向かう。
「おはようかな姉」
「ありゃ、玲士が早起きなんて珍しい。もしかして雪でも降るのかなん？」
　玄関には当然の如く先客がいた。もちろんかな姉である。
「もう、僕だって早起きぐらいするよ。だからランニングのお供をしようかと思ってね」
「感心感心、じゃあ今日は普段よりもたくさん走ろうかな」
「ひぇっ！さすがにそれは・・・」
「あはは、冗談冗談」
　いつも通りのさわやかな笑顔を見せる。僕はこの笑顔が大好きだ。
「それにして本当にどうしたの？いつもだったら布団をはいだって起きないのに」
「なんてったって今日はかな姉の誕生日だもん。一秒でも長くか一緒にいたいからね」
　そう、今日2月10日は我が愛しのかな姉のお誕生日なのである。日付が変わる瞬間からいっしょにいたので当然ながら一番最初に『お誕生日おめでとう』と言ったのも勿論僕である。
「嬉しいこと言ってくれるね。さ、そろそろ行くよ」

「うん！」
外はまだ薄暗く、空気は当然ながら家の中よりもずっと寒い。吐く息も真っ白だ。
まずは島を離れるために朝一番の連絡船に乗る。
船に乗ると言っても、海の上にいる時間はほんのわずかだが僕はこの時間が好きだ。
「なんか船に揺られるっていいよね。なんか落ち着く」
「わたしも。昔から訳もないのに往復してたっけ」
「そんなこともあったね」
短い会話をしている間にもう岸に就いた。
「じゃあさっそく出発」
「こらこらちょっと待って。まずは準備運動、体を慣らさないと余計つかれるし、怪我の元だよ」
かな姉に言われて早速二人で柔軟や屈伸をして体を整える。それにしても運動の知識に関してはかな姉に敵うものはのはないのだとつくづく思うのだ。
準備運動を終えて早速僕たちは走りはじめる。ルートは海岸沿いを通って弁天島方面に向かうというかな姉のお気に入りである。
前を走るかな姉はテンポの良い呼吸で軽快に進んでいくが、一方の僕はというと普段は練習でＡｑｏｕｒｓのみんなと一緒に走ることはあるが、これ程の距離と時間は慣れてないのでもう息が上がってしまう。
「玲士、大丈夫？」
「だ、大丈夫大丈夫」
「疲れたら言ってね、無理しちゃだめだよ」
優しいかな姉は定期的に声をかけてこちらを心配してくれる。正直な事を言うとまだ折り返し地点にも来ていないのにもう疲れてしまっている。
しかし、せっかく自分からかな姉について行ったんだから弱いところを見せるわけにはいかない。
こんなところでくじけていてはだめだと景色の方に意識を向けて

辛い気持ちを紛らわせる。
徐々に上っていく朝日に照らされる内浦の風景はどんなものよりも素晴しい。海は朝日が水面に反射して美しく輝いており、町を囲む山々の色も徐々により鮮やかなものになっていく。
美しい景色の中を順調に進んでいよいよ折り返しの弁天島でと少しというところまできたが、かな姉はどういうわけか徐々にスピードを落としてその場に立ち止まった。
「かな姉どうしたの？なにかあった？」
かな姉は僕の問いかけに答える事無くそのままガードレールに手をかけて海の方をじっと見つめる。
一体どうしたのであろうか。もしかして足のどこかを痛めて立ち止まってしまったのであろうか、それなら一大事だ。
「いや。景色がきれいだなぁって思って」
たしかにかな姉の言う通りここからは海が一望できる。
「いつもここで見てるの？」
「いや、いつもは弁天島まで一気に行くよ。だって途中で休んじゃうと余計疲れちゃうし」
「だったらどうして・・・」
こちらを振り向いたかな姉は少し考えるような
「なんとなく、かな？」
「かな姉らしいや」
そう言うと僕たちは顔を見合わせて笑った。いつもは気にも留めないこんな何気ないやり取りも、かな姉の誕生日というだけでいつもより何倍も幸せに感じる。
「さあ、まだまだこれからだよ！出発！」
「おー！」
かな姉と話した後だからか先ほどよりも元気が出たような気がして自然と走るペースも上がる。
そしてようやく折り返し地点である弁天島神社までやってきた。
「お参りしたら少し休もうか」
二人で小さな社殿に手を合わせる。ここに来た時は必ずお参りを

する、これは昔から変わらない。この神社は僕たちを、この内浦をずっと昔から見守ってくれてくれている。
「ねえかな姉」
「なに玲士」
「いつも何をお祈りしてるの？」
　手を合わせている時のかな姉の表情はいつになく真剣な表情であった。何をお祈りしていたのか非常に気になるところである。
「ふふっ、内緒」
「む～」
　そして僕は持ってきたペットボトルのふたを開け中身を一気に飲み干す。
　当然中身はただの水であるが、その冷たさは走って疲れた体に染みわたる。
「久しぶりのランニングはどう？」
「やっぱり朝から運動すると気持ちがいいもんだね。なんかシャキッとする」
「でしょでしょ。じゃあ、これから毎朝やる？」
「み、三日に一度くらいなら・・・」
　光輝く朝の海を眺めながらかな姉と二人で木陰で過ごす。いつもならまだまだ寝ている時間だがたまには早起きするのも良いものだなと思ってしまう。

「あとかな姉、ここまで来る間いつもより走るペース落してたでしょ」
「ありゃ、ばれてたか」
「当然さ、何たって僕はいっつもかな姉を見てるからね。練習の時とペースが違う事なんてすぐわかるさ」
　いつもＡｑｏｕｒｓの練習を見ている僕からすれば誰がどのくらいは知っているかを覚えているなんて造作もないことである。今回のかな姉は練習の時に比べて明らかに遅かった。体力に自信のない僕が後ろにピッタリくっついてこられるほどだから相当である。
「だってあんまり速く走っちゃうと玲士がついてこられないでしょ。

せっかく一緒に走るんだから」
「もう、僕に遠慮なんかしなくて自分のペースで走ればいいのに」
　たしかにいつものかな姉のペースにずっとついて行くことは僕にとっては大変であるが、だからと言ってランニングが好きなかな姉が僕のせいで自分のペースで走れないことの方が弟の僕にとって心苦しいものである。
「言ったな～！じゃあ、帰りは本気でいくよ。ついてこられなくなって泣き言ってもも知らないからね」
「かな姉がどんなに速く走ったって僕は絶対離れないんだからね」
　子供のころから僕はかな姉の背中を見て育ってきた。だから、どんなことがあっても絶対に僕はかな姉のそばから離れない。それは僕の中でも譲れないものだ。
「嬉しいこと言ってくれるねぇ。さあ、そろそろ行くよ！」
「うん！」
　そして僕たちは再び走り出す。先ほど言った通りかな姉のペースは格段に上がっており、むしろ普段の練習以上である。あっという間にかな姉の背中が遠くなってしまった。
　長距離ランニングは何度かＡｑｏｕｒｓのみんなと練習でやったことがあったがこれはかなり体力を使う。息を切らす気配すらないかな姉の運動能力には我が愛しの姉ながら恐ろしささえ感じてしまう。
　先を行くかな姉について行くのは体力がない僕にとってはとてもつらいことである。しかし、ここであきらめることはできない。残った力を振り絞って必死にかな姉に食らいつく。
　先ほどのように景色を楽しんでいる余裕はないが、しばらく走っているとどういうわけか走っていて心地よく感じる。
　頬を撫でる朝の冷たい風がランニングで火照った体を調度よく冷やしてくれる。かな姉がランニングが好きな理由が少しわかったような気がした。
　そして、かな姉に送れるほど１分ほどで出発した船着き場に着いた。

「はあっ・・・、はあっ・・・、やった・・・」
ランニングを終えてかな姉の顔を見た途端にどっと疲れが出た。思わずその場にへたり込んでしまう。
「お疲れ様、よく頑張ったね。よしよし」
するとかな姉はしゃがんで僕の頭を撫でてくれた。これは思わぬご褒美だ。
「かな姉は疲れてないの？」
「う～ん、あと3往復はいけるかなん。もう一回行く？」
「ひえっ！それはさすがに・・・」
「あはは、冗談冗談。かわいいなぁ」
そう言って再び僕を撫でる。立て続けにかな姉になでなでさえるなんてまったくもって幸せである。
「久しぶりのランニングはどうだった？」
「最初は大変だったけど、とっても気持ちよかったよ」
「うむうむ。玲士がランニングの楽しさをわかってくれて嬉しいよ」
するとその時僕のお腹が鳴る音が響いた。朝早くから運動したことなどほとんどないのでもうお腹がペコペコである。
「あはは、それじゃあお腹もすいてきたことだしそろそろ帰ろうか」
「うん！」
こうして僕たちはまたも船に揺られて家に戻る。疲れているせいかなんだかとても眠くなってきたが、ここで寝てしまうわけはいかない。今日はまだまだやることがあるのだ。
家に着いた後は着替えて台所へと向かう。
「かな姉、今日の朝ご飯は僕が作るよ！誕生日ぐらいゆっくりしてて」
「おおっ、珍しい。それじゃあ頑張ってね」
作るのはみそ汁とスクランブルエッグ。実はここ数日かな姉に内緒で練習していたのだ。
普段料理することは乗り気ではないが、かな姉のために作るから一段と気合が入るものである。
そして、先週のおかげもあって特に問題なく料理を完成させてかな姉の前に持っていく。果たしてかな姉のお口に合うのだろうか。い

よいよ緊張の瞬間である。
「うん、おいしいよ。前より上達したね」
かな姉の言葉にほっと胸をなでおろす。どうやらお気に召してくれたようである。
「へへっ、どんなもんだい」
ご飯を食べ終えもやることは続く。この後はＡｑｏｕｒｓのみんなで誕生パーティーがあるのだ。かな姉には内緒にしているので一旦部屋に戻る。
「まずはこれからＡｑｏｕｒｓのみんなに連絡して、それからお昼はみんなで作ったケーキを・・・」
あれ、何だろう。頭がぼーっとしてきた。だめだだめだ、僕には寝てる暇なんてない。
「えっとまずは千歌たちに・・・」
しまった、布団の上で寝転がるんじゃなかった。そう思ったときにはもう遅かった。
「かな姉・・・」
必死に起き上がろうとするが、僕の意識はだんだんと遠のいていった。

～～～

肩をゆすって起こそうと手をかけたが、その寝顔を見て思わず手が止まってしまった。
成れない朝早くからのランニングや料理でとても疲れていたのだろう。
実は黙ってたんだけど知ってたんだよね、ここ最近走ったり料理の練習してたこと。とっても嬉しかったよ。
「もう少し寝かせてあげよっか」
私は傍らにあった毛布を玲士にかけてあげた。
「玲士、いつもありがと、そしてこれからもよろしくね」

仮装をするのは大変だ

「玲士くん！ハロウィンだよ、ハロウィン！」
「は??」
　日々秋も深まっていく今日この頃、いつものように部室でミーティングを始めようとするとまた千歌がおかしなことを言ってきた。
「だーかーらートリックオアトリート！だよ!!」
　勢いだけで言ってることがまるでさっぱりわからないので僕はすかさずかな姉に助けを求めるように目配せをする。
「こら千歌、ちゃんと説明しなきゃダメでしょ」
「えっとね玲士君、実は今度のイベントでやるライブなんだけど、ハロウィンをテーマにしたらどうかなってみんなで話してたんだ」
「いつもとは違う感じの衣装が着れると思うから、曜ちゃん的にはとっても賛成であります！」
　曜梨子コンビがご丁寧に説明してくれた。やっぱり千歌と違って二人は頼りになるなぁ。
「なるほどなるほどそりゃいいや。それで、みんなは何の仮装したいの？」
「ヨハネはもちろん堕天使!!」
「マリーは魔女よ!!」
「ルビィは黒猫しゃん！」
　皆思い思いの仮装を言っていく。きっとどれも似合うであろう。
「かな姉はなにするの？」
　僕はかな姉にも聞いてみる。まあかな姉の事だからどんな仮装をしても似合うのは決まっているのだ。
「私かぁ・・・」
「なんでもいいよ！魔女に吸血鬼、悪魔に・・・かな姉ならどれもぜえったい似合う!!」
「うーん、選ぶとしたら、魔女かなぁ・・・」
　かな姉はしばらく考え込んだ後そう答えた。
「かなぁん！マリーと同じのを選んでくれるなんて嬉しいわぁ!!」

すると鞠莉姉が飛びついてきた。鞠莉姉はかな姉の事に関するといつもこうなのだ。
「ちょと鞠莉、くっつかないの」
「もう！果南のいけずぅ～」
「まったく鞠莉ちゃんは・・・。あっ、そういえば玲士くん」
「ん？」
「玲士くんは何の仮装するの？」
「・・・へ？」
これまた全く予想外の質問が飛んできた。
「いやいやだって僕は裏方だし僕が仮装したって意味ないよ。それに衣装だって・・・」
「イベントではスタッフ含めてみんなが仮装する決まりなのですわ」
「それに、衣装については曜ちゃんにお任せであります！」
不参加という手はないし、どうやら僕に逃げ道はないようである。
こうして、『松浦玲士に何の仮装をさせるか』という僕からすれば何とも対応に苦慮する懐疑が開始されたのである。

～～～

「う～ん、鎧はちょっと難しいかもしれないです・・・」
千歌の提案だけは聞いておいて、ルビィちゃんに尋ねるがやはり鎧という大掛かりなものは難しそうである。
「やっぱり定番だとゾンビとかじゃないかな。特殊メイクならお任せであります！」
「何で生きているうちから死んだ後の格好をしなくちゃならないんだ」
「リトルデーモン、それを言っちゃおしまいよ」
「そもそもハロウィンの仮装は死後の世界からやってきた悪霊に仮装することで仲間と思わせて身を守るものずら」
「ごもっともです」

この後も次々と案が出てきたがなかなかいいものにたどり着かない。そうこうしていくうちにバスの時間も近づいていた。
「皆さん、そろそろ時間ですわ。続きはまた明日になさいましょう」
ダイヤさんの一声で、ひとまず今日の所は解散となった。
いつもの如く皆と別れて、かな姉と鞠莉姉と一緒に淡島に戻った。
「それにしても、玲士も頑固だよね。仮装なんて正直なんでもいいのに」
ただぼんやりと海を眺めていると、隣からかな姉の声がした。
「だって僕は何着たって似合わないし・・・」
振り向かずにそう呟くと、かな姉はため息をつき、
「こら、そういうこと言わない」
片方の耳たぶを軽く引っ張った。
「私は、玲士が何着ても気にならないし、なったことはないよ。もっと自信もって良いんだからね」
「かな姉・・・」
正直なことを言うと、自分が何着ても似合わないなんてことは本心ではない。ただの照れ隠しに近いような、もっと単純なものである。
なんだろう、僕ももっと素直になれたらいいのになぁ。

「かなぁ～ん！トリック・オア・トリートよ～！」
　静寂を切り裂くように鞠莉姉の明るい声が響く。
「お菓子なんてないよ。間食は太るもとだし」
「さすがかな姉！プロポーション維持もしっかり！」
「玲士も最近よく食べてるけど、食べすぎはダメだからね」
　かな姉から耳の痛いお言葉をいただく。さて、鞠莉姉はどうするのであろうか。
「じゃあ！果南にいたずらを～」
「なぬ!?かな姉にいたずらをするのは許さない・・・」
　やはりそうきた、我がかな姉に鞠莉姉のいたずらなどさせてなるものか。僕はすかさず二人の間に割って入る。
「じゃあ果南の代わりに玲士に～、顎の下こちょこちょ～」
「ひゃうん」
　しまった、こればかりは僕の弱点だ。途端に体の力が抜けてしまう。
「こら鞠莉、玲士がかわいそうだよ」
　かな姉の一声でてが緩んだ瞬間僕はすかさずかな姉の背中に隠れた。これでなんとか助かった。
　それにしても、冷えた体にかな姉の暖かさは染み渡る。
「まあ、仮装の件は考えても答えはでないから、そんな時はランニングで頭をすっきりさせるしかないね！」
　練習が終わってからもランニングとは、さすがの僕でも堪える。
「あっ！見たいテレビがあったんだ！」
　僕は巻き込まれぬうちに急いで家の中へと逃げ帰るのであった。

善子ちゃんって不思議だな

Ａｑｏｕｒｓのメンバーは皆個性的だ。かな姉は当然として皆と関わっていると毎日とても楽しい。

そして僕、松浦玲士がその中で最近一番気になっている人物がいる。

「じーっ」

「なによ」

僕はその人物をじっくりと見つめる。

「じーっ」

「だからなによ」

すらっとした顔立ち、色白な肌、そして特徴的な髪型。見れば見るほど気になってくる。

「じーっ」

「だからさっきから何見つめてるのよ！」

机の反対でスマホをいじっていた善子ちゃんは勢いよくこちらに食って掛かってきた。すでに部室にいたかな姉と他の一年生組は驚いた様子で声のするの方を見る。

怒っている姿もなんだかおもしろい。

「どうしたの玲士」

「ごめんごめん、ちょっと善子ちゃんが気になったからさ」

「ヨハネよ！何よ、気になったって」

「要は観察してたのさ」

「「観察??」」

花丸ちゃんとルビィちゃんが首をかしげる。まあ、自分でも変な事だとは思うから不思議がるのは当然だろう。
「クックック、主を観察するなんて良い心掛けだわリトルデーモン。もっとその目にこの堕天使ヨハネの姿を焼き付けなさい!!」
「こんな堕天使なんか観察しても意味ないずら」
「時々変な格好するのは見てて面白いけどね」
「こら!そこの二人!変なこと言うな!」
「まったく。玲士、いきなり人を見つめたりしたらびっくりするでしょ」
「はーい」
かな姉からの指摘にちょっと反省する。それにしても相変らず花丸ちゃんとルビィちゃんは手厳しい。
「まあ、玲士が観察好きなのは今に始まった事じゃないけどね」
「そうなの果南ちゃん?」
ルビィちゃんが尋ねる。
「うん、昔から玲士は気になったら時間を忘れて観察しててさ。この間なんか雨が降ってるのに外でずっとかえる見つめててさ」
「だってかえるさんかわいかったんだもん」
「リトルデーモン、あなた意外に子供っぽいのね」
たしかにかな姉の言う通り僕は気になったものをずっと観察している癖がある。それにしても子供っぽいと言われるのは心外だ。確かに二年生の中では唯一の早生まれで一番の年少だが僕にだってプライドというものがある。それにかえるさんかわいかったんだもん。
「それで、今度は何で善子ちゃんが気になったずら?」
「んー、なんでだろう。なんとなく、かな」
「何よ、なんとなくって!」
またも善子ちゃんは食って掛かる。オーバーリアクションなのも善子ちゃんの面白いところだ。
「具体的にどこが気になってるとかないの玲士」
「ある!」

僕は善子ちゃんと初めて会った時から一番気になっていたことがある。
「なになに！ルビィも気になる！」
「それは・・・」
「「「それは・・・？」」」
皆が一様に興味津々な目で僕を見つめる。

「善子ちゃんの髪型!!」

そう言った瞬間、先ほどまでの眼差しとはうって変わって皆の目が点になった。
「ヨハネの・・・」
「・・・髪型??」
「うん！髪型！」
「髪型のどんなところ？」
「善子玉!!」

「「「善子玉??」」」
またも皆が一様に首をかしげる。

「なによ善子玉って！あとヨハネ!!」
「もしかして、それってシニヨンのこと？」
「シニヨン？」
ルビィちゃんの口から出てきた知らない言葉、ファッションとかの事は疎いから何のことだか全くわからない。
「お団子髪のことだよ」
困っているところをかな姉が教えてくれる。やっぱりかな姉は頼りになるなぁ。
「そうそう！シニヨンって言うんだあれ」

僕が知ってる髪型の名前なんてせいぜいツインテールとかショートボブとかそれぐらいである。名前がわからなかったので勝手に善子玉と呼んでいたのだ。
「それのどこが不思議なのよ。別に珍しい髪型でもなんでもないでしょ」
「いや僕にとっては大いに不思議だよ」
僕は再びまじまじと善子玉、もといシニヨンを見つめる。
「どうやって作ってるのかもそうだし、なにかエネルギーが詰まってるんじゃないかと思って」
「まったく・・・。またおかしなこと言って」
僕の言葉にかな姉は呆れたような表情を見せる。

「クックック、この髪型は天界にいた頃より定められしヨハネのアイデンティティ。内部には堕天の力が秘められているのです!!」
いつものごとくポーズを決める。
「おお!すごい!」
「この間作るのに失敗してたのに?」
「ルビすけ!そのことは言うな!」
「なんかとりはずせそうずら」
「うんうん、わかるよ花丸ちゃん。よ~くわかるその気持ち」
善子ちゃんの頭にちょこんとついているこの善子玉、反対側につけたり取り外したりできそうだと前々から思っていた。
「なによ!取り外すって!」
「えー、だって堕天使の力が秘められてるんでしょ?エネルギータンクみたいだからもう一個付けると力が湧いたり、取れると力が出なくなったりするのかなーって思って」
「ロボットみたいでおもしろいね」

善子ちゃん曰く堕天の力が詰まってるんだから、取り外し可能って結構合理的な考えだと思うんだけどな。
ルビィちゃんは無邪気に突っ込んでくるからこれまた面白い。か

な姉はもはや突っ込むのをやめて頭を押さえている。
「あ・ん・た・た・ちぃー!!いい加減にしないとー!!」
そう言うと善子ちゃんは手を前に突き出してじわじわとこちらに近づいてきた。
「くらいなさい!堕天使地獄固め(フォーリンエンジェルヘルブロック)!!」
「ピギッ!」
「ひぃー!!」
ルビィちゃんは間一髪かわしたが、僕はあっけなく捕まり善子ちゃんの腕でがっちりとがんじがらめにされてしまった。
善子ちゃんの腕は細いがやはりスクールアイドル活動で培われた筋力ゆえかその力は強い。
「生意気なリトルデーモンにはこうしてやるわ!」
「か、かな姉助けて・・・」
「自業自得」
「そ、そんなぁ・・・」
その呆れたような冷めた目には僕の抵抗力を失わせるのに十分であった。
嗚呼、とうとうかな姉にも見捨てられてしまった、僕はもう最期だ。
だんだん体の力が抜けてゆく。僕はもうだめかもしれない。

「こ、こら!堕天使!そこまでよ!」
諦めかけたその瞬間、ようやく救い主が現れた。
「りっ梨子ちゃん!」
「リリー!」
「善子ちゃん!離れなさい!!」
梨子ちゃんは手に持っていた楽譜が落ちたのも構わずすかさず僕と善子ちゃんを引きはがしにかかる。
「た、助かった。ありがとう梨子ちゃん」
「ふんっ、今回は許してやるわ!」

梨子ちゃんによって僕は何とか助け出された。それにしても善子ちゃんの力の強さには驚いた。
「よ・し・こちゃん」
梨子ちゃんは普段より幾分か低い声とギロっとした表情で善子ちゃんを睨みつける。
「次やったらお団子没収するって言ったよね」
「言ってないわよ！」
「わ・か・っ・て・る・わ・よ・ね」
「ひっ!!」
こんな表情の梨子ちゃんは初めて見た、善子ちゃんと一緒に僕まで声を上げてしまう。それにしてもやっぱりあのお団子取れそうだよなぁ。
「ひどいよかな姉、見ているだけなんて」
「玲士があんまりからかうからいけないんだよ」

「わーなになに！千歌も混ぜてー！」
「全く、騒がしいですわよ」

すると残りの皆もやってきてたちまち部室は騒がしくなった。
ああ、僕はこの騒がしさが好きだ。些細な事でもこうやって楽しめる。そんな事を思いながら僕は皆を見つめるのだった。

～～～

「か、かな姉!その髪型・・・」
なんと驚くべきか、かな姉の髪型はいつものポニーテールではなく髪をお団子にまとめているのである。
「玲士があんなに不思議だ不思議だって言うから、善子ちゃんに教えてもらってちょっとやってみたんだ。似合ってるかなん?」
「もちろん!でも、かな姉の髪型はポニーテールが一番さ」
ポニーテールはかな姉のトレードマークだ。いろんな髪型のかな姉は勿論素敵だがやっぱりいつもの髪型が一番だ。
「ねえねえかな姉!触らせて!」
「ダメ、崩れるから。セットするの大変だったんだからね」
「そんなぁ・・・」
無論断られるのはわかりきっていたが、ちょっと大げさにしょんぼりしてみせる。
「まったく・・・。ちょっとだけだよ」
「わーい!!」
かな姉の許可が出たところで早速お団子髪を触ってみる。
「どうかなん?」
「へー!こんな感じなんだ。おもしろーい」
いつものポニーテールとは違って髪がまとまっているから感触が独特でおもしろい。それにしても、やっぱりかな姉の髪の毛は触って気持ちがいい。
「ほんと玲士は昔から髪の毛触るの好きだよね」
「だってきもちいいんだもん」
「私は別にいいけど、他の人にはやっちゃだめだからね。やるにしても言ってからだよ。わかった?」
「はーい」
「うむ、よろしい」
そうは言いつつも、やっぱり善子ちゃんの髪は気になる、今度お願いして触らせてもらおう。
そんなことを考えながら今日もいつもどおりかな姉に甘えながら

休日を過ごすのであった。

幻日のレーシ【シスコン弟　ｉｎ　ｔｈｅ　ｍｉｒｒｏｒ】

これはある夏の日、突然僕が体験した不思議なふしぎなお話。

～～～

入ってよけい視界が鮮明でなくなる。

「あっ、タオルこれ使って！」
手探りでタオルを受け取って顔を拭う。ゆっくりと目を開けると視界には白い砂浜と広い海の景色が広がる。

頭がぼーっとする。今がいつで自分が何でここにいるのか全く思い出せない。

「キミ、大丈夫!?　どこか怪我してない!?」
先ほどから僕を気に掛けてくれる優しい声。

ゆっくりと顔を向けた先に会ったその声の主は、

「……かな……姉？」

紛れもない僕の姉、松浦果南その人だった。

「かな姉……」
「名前言ってなかったね。私はカナン！　このあたりでメカニックやってるんだ！」
「……へ？」
「キミ、このあたりで見ないけどどこから来たの？　格好も珍しいし、もしかしてトカイ？」
「かな姉、何を言って……」

状況が理解できない。
今僕の目の前にいる人物は顔も、声もかな姉その人だ。でも、何かが違う。
先ほどから言っていることがおかしいし、着ているのは今まで見たことないような変わったデザインの服。大きなポケットにはたくさんの工具が入っている。
そもそもうちはダイビングショップだし、状況があまりに変だ。

「キミ、名前は？」
「玲士、松浦玲士」
「マツーラ・レーシ？　ん～聞かない名前だなぁ……。お家どこ？」
言っていることの意味が分からない。聞かない名前も何も、僕はひとつ屋根の下で暮らしているかな姉の弟だ。
冗談を言うにしてもあまりにもおかしい。
「ど、どこって、淡島……」
「アワシマ？　う～ん、聞いたことないなぁ……」
「聞いたことないって、だってあそこ……に……」

そう言いながら指さして示した先に有ったのは異様なものだった。
僕が指さした先に、確かに淡島はあった。
しかし島全体がうっそうとした木々に覆われており、見えるはずのマリンパークや我が家であるダイビングショップが見る影もない。
そして何より全体的に雰囲気が暗い靄のようなものに包まれている。
「あれはワーシマー島だよ。マリしか住んでいないはずだけど……」
「鞠莉姉⁉」

「あれ、マリのこと知ってるんだ。ちょっと怖いイメージがあったけど、実際会ってみたらすっごくかわいくていい子でさ。私もたまに遊びに行ってるんだ」

「へっ……何を言って……」

先ほどからだがいよいよ言っていることがおかしい。

『怖いイメージ』『実際に会ってみたら』なんて冗談でも絶対に言うはずがない。

もしかしたらこの人は僕の姉である松浦果南ではないのではないか。

そんな絶対にありえない考えまで頭に浮かびだしてきた。

「おーい！　カナンちゃーん！」

後方からよく響く明るい声がこちらに近づいてきたに振り向くと、見知った顔の人物がこちらに近づいてきた。

「あっ！　千歌ぁ！」

クローバーの髪留めにぴょんっ、と立つ髪の毛。かな姉と同じく奇妙な服装を除けばその声も容姿も間違いなく千歌である。

その顔を見た瞬間僕ははっとした。

そうだ、もしかしたらこれはＡｑｏｕｒｓの皆が僕が慌てているのを見て面白がっているドッキリかもしれない。

淡島もきっと鞠莉姉がよくわからないけど、どうにかしているんだろう。

もしドッキリなら千歌のことだからきっとボロを出すかもしれない。

そんな一抹の期待を胸に僕も千歌の方へ駆け出す。

「千歌ぁ！　僕のこと……」
「ふぇっ？　お兄さん……あーもしかして前にうちの旅館に泊まったことありますか？」
目の前にいる千歌、らしき人はあどけない顔で純粋な疑問を浮かべたようすでこちらに問いかける。
「泊まるも何も昔から……」
言葉が続かなかった。

ほぼ毎日見ているはずのあの歴史ある和風建築な旅館は、面影を残しながらも大きく形を変えていた。
全く意味の分からない。道行く人の服装もみたことのない変わったものだし、よく見ると周囲の地形自体が異なっている、何が何だかわからない。
やっぱりこの人たちは僕の知っているかな姉や千歌ではないのではない。
それに、ここは僕の知っている内浦ではない、どこだか全くわからない。

「えっあっ……」
「大丈夫!?」
一気に体の力が抜けてその場にへたり込んでしまう。
かな姉と千歌、らしき人が何か言葉をかけてはくれているが内容が全く耳に入らない。
混乱と悲壮感といろんな感情が頭の中で激しくうごめいて、どうし

ていいかわからない。
もしかしたら僕は一生家に帰れないのかもしれない、もう二度と皆に会えないのかもしれない、そうどんどん悪い方向に考えて呼吸が荒くなる。

「大丈夫、大丈夫だよ」

その言葉とともに、体が柔らかい感触に包まれる。
カナンさんが僕を抱きしめてくれたのだ。
かな姉にハグされた時と全く同じ安心感につつまれる。
「大丈夫、私たちが助けるから」
そして僕はしばらくの間声をしのんで泣いた。

「……ありがとうございます。こんな見ず知らずの僕を……」
「別になんてことないよ。この町はみんなで助け合っているからね」

その後僕は一通りの自己紹介と自分が知っていることを話した。
どうやらここは『ヌマヅのウチーラ地区』というところで、カナンさんが仕事で海に出ようとした所、砂浜に漂着していた僕を見つけたらしい。
当の僕はというと、相変わらず何でこんなことになったのか全く思い出せず、どういうわけか今日が何月何日なのかすらもわからない。頭でも打ったのだろうか。

「でも、これからどうすれば……」
「あっ！　カナンちゃんレーシくん！　いい方法があったよ！」
「良い方法？」
三人で考えていると、突然チカさんが声を上げた。

「うん！　こーいうときは占い屋さんに相談してみるのはどうかな」
「占い屋さん、ですか？」
「うん。とっても頼りになるんだ。きっとレーシ君の役に立つと思うよ」
「いいね！　私が送っていくよ！」
どうやら二人の話を聞くにその「占い屋さん」は困りごとを何でも解決してくれるとヌマヅの人たちから頼りにされているらしい。
普段は占いはそんなに本気にしないタイプの人だが、こんな状況なら藁にもすがる思いだ。
僕はカナンさんに連れられて『占い屋さん』の元へ行くこととなった。

〜〜〜

しきものが辛うじて読めるくらいで他は全く未知の記号に置き換わっている。

遠い外国に来たようだがどこか懐かしい知らないようでどこか知っている、とても不思議な気分だ。

「よし！　ついたよ」
「ここが占い屋さん、ですか……？」
カナンさんに連れられてやってきたのは大通りから少し外れた住宅街の一角にある建物。
『占いのお店』と聞いていたからもっと仰々しいもと勝手に想像していたのだが、実際は入口にある看板がなければお店とは気が付かないくらい周りと同じ普通の建物だ

「うん。何でも屋さんみたいな所もあるから、みんなから頼りにれてるんだ。確か名前は……なんだっけ。まあいいや」
それと、話していてわかったが、やっぱりカナンさんはやっぱりかな姉と似ている。細かいところを気にしないところなんかまさにそうだ。

僕は恐る恐る玄関のチャイム、ならぬ本物の呼び「鈴」のひもを引っ張る。

「クックック！　よく来たわね迷える子羊よ！」
軽快な足音がしたかと思うと勢いよく扉が開き、そしてこれまたよく見知った顔の人物が現れた。
「おお！　善子ちゃん!!」

「ヨシコ……？　私はヨハネよ？」
　善子ちゃん、もといヨハネさんは例によって変わった格好に右手には奇妙な杖を持っている。
　もうこの変な格好をしているくらいではさして驚かなくなった。それに僕の知っている津島善子ちゃんに関しては、普段からこんな格好をしていてもおかしくはない。
「はっ!!　それはトカイの服！　もしかしてこの私の噂を聞きつけて！
　いきなりヨハネさんは目をキラキラと輝かせて私の手を取って握る。
「えっ？　都会⁉へ？」
「実はねヨハネちゃん」
　混乱している僕に変わってカナンさんが事情を説明してくれた。

「えー、じゃああなたは本当に迷える子羊ってこと？」
「迷えるっていうか、本当にここがどこだかわからないというか……」
「それならこの町の占い師ヨハネに任せない!!　このヨハネの占いを持ってすれば造作もないことよ!!」
　ヨハネさんは得意げに胸をたたく。ここら辺も善子ちゃんと全くおんなじだ。
「ありがとうございます。頼りになる占い屋さんと聞いていなので」
「当然よ！　占いの館シュリーレン！覚えて帰ってね！さあさあ中に！」

「お、おじゃまし…ま……ひゃい！」
　ヨハネちゃんに続いて建物の中に入った僕の目に入ったのは僕の背丈ほどの大きさの犬とも狼ともつかない大型の獣。

ふさふさの毛並みに鋭い目、そして口を開けるたびに見える大きな牙。
今まで変な事には慣れてきたが思わず声が出てしまった。
「あっ、この子はライラプス。大丈夫、怖くないから」
「うんうん、それにしてもレーシって意外に怖がりなんだね。かわいいとこあるじゃん」
「ううっ……」
よく見ると驚いた表示に咄嗟にカナンさんの腕をつかんでいた。
かな姉にやる分にはいつもやってるので何てこともないが、カナンさんは一応初対面の人なので少々恥ずかしい。
「じゃあ、準備するからちょっと待ってて」
「じゃあ、私は来たついでだしいろいろと見ておくよ」
「えっあの……」
そしていつの間にか部屋には僕とライラプスの一人と一匹だけとなってしまった。

実のところ僕、松浦玲士は犬があまりと得意ではないのだ。
千歌のところのしいたけだけは別だが、それ以外はどういうわけか吠えられたり追いかけられたりとなかなかに縁が無い。
そういうわけでなるべく僕はライラプスと目を合わせないように視線を泳がせていた。

『うーん、私ってそんなに怖く見えるのかなぁ？』
「へっ？　怖い……あれっ？」
声がしたのでどちらかが戻ってきたと思ったが、周りを見回しても誰もいない。
『それにしても、この子……なんだかとっても不思議な子だなぁ』
「えっ？　あれ？」

他のお客さんが来たのかと思ったがやはり誰もいない。しかし絶対に気のせいなどではない。
『ん？　もしかして？』
いや、いた。『一匹』
『キミ……私の声が聞こえてるの？』
「えっあっ！　いっ、犬がしゃべった！」
唯一部屋にいた『一匹』ライラプスが、じっとこちらを見ながらその大きな体でこちらに近づいてきた。
『すごいね！　もしかしてキミも魔法が使えるの？』
「えっ？　マホウ？　聞こえるというか、なんか頭の中に直接……？
うーん、分からない」
先ほどから訳の分からない状況が続いているが、魔法なるものまであるとは驚いた。
『大変だったんだね。キミって、もしかしてカナンの親戚？』
「うーん、親戚というか……僕の姉さんによく似てるんだ。どうしてわかったの？」
『野生のカンって言えばいいのかな。キミからはカナンに近い匂いがするから。あお、ワーシマー島の匂いも』
「臭い？　もしかしてなんか……やっぱ臭う！」
たしかに言われてみれば先ほどから妙に気になる感覚が鼻をつく。
もしかして海水で濡れた服がまだ生乾きになっていたのだろうか。
『ああ、たぶんそれはヨハネが焚いてたお香の匂いだと思うよ。まったくヨハネったらいつも……』
どうやら話を聞くに、この世界でもヨハネちゃんはちょっと手のかかる女の子らしい。
『でも、見えてヨハネは善い子だからね』
「うん、それは知ってる。僕の知ってる人ととっても似てるから。そ

の子もとっても善い子」
『でもちょ～っと子供っぽい』
「そこもおんなじだ」

先程までは怖く見えていたライラプスだが、よくよく見ればつぶらな瞳がとてもかわいい、撫でさせてもらうとふさふさとした綺麗な毛並みがとても気持ち良い。

「待たわね！　準備できたわ！」
すると奥の部屋からいかにも占い師といった格好のヨハネちゃんが出てきた。

そしていよいよヨハネちゃんの占いの準備が整い、いよいよ

室内が一瞬静まりかえる。この世界のヨハネちゃんならもしかして本当に魔法が使えるかもしれない。
ただならぬ雰囲気に胸の鼓動が高まる。

「いくわよ」
「ごくり」

そしてヨハネちゃんによるよくわからない呪文の詠唱が始まった。

側に座っているはライラプスはじっとこちらを見ている

そして

「だだだだだっ!!」

「ダ――クネ――ス!!!」

「わーっ!」

一瞬の出来事だった。

ヨハネちゃんの言葉とともに眼の前にある水晶玉がまばゆい光を放った。

そして次の瞬間、目の前の景色がぐにゃりと曲がり、ぐるぐると渦を巻いたかと思うと、深い深い穴の底へ突き落されるような感覚に襲われる。

全く自分の中でも理解ができない。

深い深い海の底に沈んでいくような感覚の中、先ほどまでの光景が走馬灯のように流れる。

そしてそのまま、僕の記憶は途絶えた。

～～～

いつもの練習が終わった後、善子ちゃんが居残り練習をしたいとのことだったので僕とかな姉が一緒に練習に付き合っていたのだった。
なぜ今まで思い出せなかったんだろう。

しかし先ほどのショックがまだ抜けていない。この人が本当にかな姉なのか、はたまたカナンさんなのか、大丈夫だとは思いながらも僕はある質問を投げかける。

「あ、あの……う、うちって、どこにある？」
「淡島だよ」
「何屋さん……？」
「ダイビングショップだよ。寝ぼけていないでそろそろ時間だから帰るよ」
ここは僕の知っている内浦、そして紛れもない僕の姉、松浦果南だ。

そう気づいた瞬間、言いようのない安堵感に包まれる。
思わずかな姉に飛びついた。

「こらー、いきなりくっつくなー」
「やだ！　くっつく！」
いつもと同じ反応、同じ感触同じ匂い、やっぱり僕にはかな姉がなくてはならない存在だ。

「あらリトルデーモン、起きたのね」
聞き馴染んだ振り向けば、お団子髪がトレードマークのいつもの練習着姿の善子ちゃんの姿があった。
「あっヨハネ……じゃない、善子ちゃん！　善子ちゃんだ!!」
「ちょっ、なによいきなり！　それになんでわざわざ言い直すのよ！」
先ほどのかな姉の時と同じくどうしようもなく感動してしまった。
「おお、善子ちゃん善子ちゃんー」
「何度も何度も善子言うなー！」

何度も聞いたような、だけどどこか安心するやり取り。
やっぱり僕にとってはかな姉、Ａｑｏｕｒｓの皆との日常が一番なのだと改めて実感する。

「あのっ！　ふたりとも」
すると善子ちゃんは一転してに改まった様子を見せる。
「……今日は、私のために付き合ってくれてありがと。本番は絶対絶対成功させるから！」
真っ直ぐな瞳でこちらを見つめている。
善子ちゃんは堕天使だけど、真面目で努力家でとっても優しい善い子なんだなと改めて実感する。
「何を言ってるんだい。善子ちゃんのためなら協力なんて惜しむもん

か」
　そしてそれに応えて皆を助けるのが、僕の役割だ。
「うん！何でも言ってね。それにしても、やっぱり善子ちゃんはまじめな善い子だなぁ」
「うんうん偉い偉い。よしよし善子ちゃん」
「だから善子言うなー！」

「はいはい。ほら玲士、そろそろ時間だから……ありゃなんか付いてる」
　ふいにかな姉は僕の袖口まで手を伸ばし、そこについていた何かを取った。
「まったく。どこでこんなのつけてきたんだか」
　そこには灰色の太く長い毛のようなものが数本、ボタンに絡まるようについていた。
「これ……なんだろう。犬でも触ったの？」

「これって……？　あっ！」
　掌の毛束は一陣の海風が空へと運んでいった。

　空に消えていく様子を見てふと思った、あれは本当に夢だっのだろうか。
　もしかしたら、またあの不思議な世界の不思議な人達に逢えるのかな。
　どうも僕にはそんな気がしてならなかった。